八月

女子文壇

明治四十一年八月一日発行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



第四年第十二號

（電話本局 六百七番）

東京女子文壇社發行

（振替口座 壹七貳九番）

女子文壇第四年

八月一日發行

毎號 皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本欄





第十二號目次


御婦人用時計鎖
定價
(1)拾八金首懸 五拾六圓半
(2)拾八金首懸 三十二圓
(3)拾八金 拾七圓
(4)眞珠入 二十圓
(5)拾八金 拾六圓
東京銀座尾張町
白牡丹本店
口座四三九七番

涼しき聲



入江閣色刷部製版

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文壇空前の大活動

赤門派早稲田派文庫派無所屬自然主義派非自然主義派の文士悉く集まる

（每月壹回）

新文林

（一日發行）

八月號（本號附錄には美人を精巧寫眞に現はしたる栞あり口繪秀才閨秀文士肖像三葉）第五號

定價壹冊金拾錢郵稅壹錢六冊郵稅共割引金六拾錢十二冊同金壹圓貳拾錢

▲小說 双子宿…小栗風葉

▲小說 喧嘩…大倉桃郎

▲小說 中間…若麻績長風

▲小說 酒興…菊池曉汀

▲新詩 歸路…加藤介春

▲猫が居なくなつた…鮫島大浪

▲獨步氏…石丸紫水

▲花の旅…遲塚麗水

◎火雨　那珂古登子

◎磯舟　中尾紫川

◎一緒　山口鐵拳

◎川柳評釋　田樂道人

以上は本號卷頭を飾る花にして

投稿欄亦大に振ふ

全國秀才才媛諸君

投稿欄選者

◎論評文…渡邊文學士
◎小說…大倉桃郎
◎短歌…渡邊光風
◎美文…千葉江東
◎新體詩…蘆谷蘆村
◎小品文…鮫島大浪
◎新川柳…大喜多田樂
◎俳句…關石鐶
◎消息文…本田菊外
◎漢詩…榎本寬齋　波多野青雨
◎雲中語…町田柳圃
◎コマ繪…渡邊香涯

右の諸先生選評に任じ各詳細の評を加ふ

掲載種目

◎論評文 ◎叙事文 ◎抒情文 ◎小品文
◎消息文 ◎新體詩 ◎新川柳 ◎雲中語
◎短歌 ◎漢詩 ◎俳句 ◎俚諺
◎短篇小說 ◎文友詩友 ◎文士評判 ◎諸作批評

才媛文壇 欄々特設

每號懸賞

各種作品募集 賞金參圓 最低卅錢 當選賞二十名 規定詳細本誌に有

發賣所 東京市神田三河町一丁目十九番地【振替口座番號三八一五番】博報堂書店

腦病を根治し記臆力を増進する滋養劑

滋養記臆増進 回春健腦丸

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其發効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大に増進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力欠乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すると誓て確證する所なり(効驗)腦力を明快にし腦病神經病頭痛を全治し逆上を引下げ記臆力を増進するは勿論㊀健忘症㊁記臆欠損症㊂腦充血㊃便秘㊄不眠症㊅神經衰弱症㊆婦人ヒステリー㊇心悸亢進㊈腦力乏弱㊉神經系諸病㊀身體衰弱㊁貧血諸病㊂情慾減退㊃遺精病等の諸症に用ゆれば其病根を新ち筋肉を太め體量を増し強壯の身體となり人世天賦の快樂を受くるに至る現世紀唯一の特効新劑なり……常に腦神經を過勞する人、腦神經を健全にし精神快活に記臆強健を望む人は論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分參圓五拾錢五週分貳圓六拾錢參週分壹圓六拾錢壹週分六拾錢(送料各拾錢宛)

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痔毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上二藥專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

▲世界唯一

痳病消渇の根治新藥

痳滅

痳滅は最も進步したる最新の痳病消渇即治療藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑を重症は特別製分を用ひて必ず根底より**根治**することを確證す但し彼の注射洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり効確實峻烈なるだけその價は不廉なり用藥者は豫め之を諒せよ藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

有効無害 奏効確證 やせる藥

本劑は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ひて害なく身體美容となり程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき奇効を知られよ

壹劑分藥價料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る 確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶一個を用ゆれば忽ち毛髮着々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に論ずべきものにあらず實に天地月鼈の大差あるに付帝に玉瓦混同視すること勿れ

藥價送料共特別製大瓶貳圓卅錢▲中瓶同上壹圓廿錢

以上三藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**(電話下谷五四六番)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

常識修養を目的とする實用專一の婦人雜誌

記事有益

婦人世界

體裁優美

八月一日發行 毎月一回 三巻第九號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税共九十錢 十二冊一円七十五錢

▲女學生は如何に數學を勉強すべきか……山脇女學校講師 星常子

▲小說（女教師）最も清新なる家庭小說なり（平井晩村）

▲不姙症の婦人と溫泉（伊庭學士）

▲廿三年以前私の女學生時代回顧（藤生貞子）

口繪

◎彩色石版（海水浴）春帆

◎岩倉公爵夫人久子刀自

◎女學生の假裝行列會：

◎汽船に乘れる名流婦人

◎清國皇族の家庭と室內

◎名家令孃と新郎新婦：

▲我家に於ける育兒上の實驗……醫學博士 加藤照麿

▲婦人の模範たる岩倉公爵夫人の美德 山脇高等女學校長 山脇房子

▲府立第三女學校の生徒は暑中休暇を如何に暮すか… 府立第三高等女學校長 小林盈

▲私が妻を失ひたる當時の所感… 女子大學校學監 麻生正藏

▲八十四歳盲音樂家の實歷：

▲姙娠中の脚氣は如何に注意すべきか 醫學博士 榊順次郎

▲隱れたる賢婦人 青柳篤恒氏の母堂 浦子刀自

◎誰にも出來る 懸賞募集あり

◎選評親切なる 文藝欄あり：

◎解答丁寧なる 問答欄あり：

▲男女結婚論（血統は注意すべきか……病氣の遺傳は如何……性質の遺傳は如何……）村井弦齋

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社（郵便振替貯金口座參武六番）（電話新橋八七四番）賣捌 全國書店

誌友面影（十四）



（佐原）八代とき子

（岩代）濱野緑子　蒲野竹子　佐藤喜代子



（水戸）幸田歌代子





（越後）竹田末子

續々お寫眞の寄送を願ます
用濟の上は返送致します



川越高等女學校　あさつゆ

福岡奇勝（藥師裏）



常陸磯崎



（文枝子寄）

同（クヾリ岩）



（山田改枝子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美しい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ケ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會

新輸入 美容 肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製〓純白色に變化し艷美の容貌となるを確劑を用ゆれば忽ち肉體證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

價壹劑二圓七拾錢、參劑七圓五拾錢、五劑拾貳圓

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製清血劑にして頑強なる皮膚病。猛惡の「サーサパリラ」は峻烈なる慢性梅毒。痳毒。リウマチス等の病毒及惡血毒血を大小便に下し血液を清淨にし且び男女體内のつ精神を爽快にし根本的に肉色を純白艶美ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず嘗だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に縱々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視する勿れこと、昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

下する特効あり本劑參劑分を用ふれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治惡血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其發し多年滯りの古血及効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効な類似僞藥房「顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名稱に注目し蹟求あらんことを乞ふ



本劑は皆膀を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流

わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦脳を脱せよ (注意)近時續々無効の類似僞藥顯る深く注意ありて玉石混同視する勿れ

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房 (電話下谷五四六番)

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

誌友面影（十九）



（茨城）中山道江　中山とよ子



（武藏）右、青木きみ子　左、唐崎秀子



（靜岡）新藤元子と其姉妹



（下野）日露子と其親友



（神戸）右、山本妙子　左、相野増枝

をさな顔



（沼津　三枝子寄）

（北多摩　渡邊氏寄）

●月經時は如何に過すべきか

村井弦齋

月經時の衛生法は私が申上げずとも、醫師の訓戒をお守りになればそれに越した事はありませんたゞ一つ私どもの家族が用ゐて居ります「月の帶」と云ふ物がありますこれは産婆で有名な山田逸子が歐羅巴へ行て西洋婦人の用ゐる月經帶を調査し日本婦人に適する樣に改良を施し新に拵へたるものであります此の「月の帶」は至極輕く腰の工合も自由で大層都合が宜いさうです

右は村井弦齋先生が「婦人日常生活法」に紹介されたる一節にして現に本品の効用は

月經時に使用すれば如何程強い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動、起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品で有ます

赤白帶下の強き人、局部の惡臭を發する人、子宮病を惱める人等にも最も妙也

初めて月經になりし令孃に頗る適當す俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を溫め子宮病を豫防するの効があります

各地に取次店あり發賣元へ直接の御注文は特別製（冬季專門用）一圓二十九錢甲種は八十九錢乙種は九十七錢（何れも送料共）郵便爲替又は三錢切手代用一割増で注文早速送ります發賣元は東京神田猿樂町二丁目の資生堂藥局です

賣切報告

女子文壇

▲七月定期號（四卷十號）　七月一日發行分

▲▲▲▲七月號は發行旬日を出でず發行本社は全部賣切れに相成申候

▲七月増刊號（十一號 美人草）　七月十五日發行分

前以て申込んで置けば缺號にはなりません

高尚優美 京染呉服悉皆

▲營業課目▼

● 友仙染　● 小紋染　● 更紗染
● 琉球染　● 中形染　● 本黑染
● 諸色染　● 本擢椰子染　● 模樣紋付染

●其他悉皆一切は精々御便宜に取扱申候、柄合の流行後れの爲め廢物に遊され居候はば假令一掛の半ゑりにても染替利用遊されば僅少の費用にて新調したると等しく相成候

●詳細なる冊子京染しるべ、には定價表及御注文傳票用紙なども添付置候、往復ハカキにて御申込の御方樣へは無代進呈仕候（御照會は返信用付に願上候）

京都市綾小路通猪熊西入

桔梗屋 金田商店

電略（カ于一）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ





營業案内出版

弊店營業案内第拾五版出版致し候御希望の方は郵券四錢封入御申込み有之度候

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地

美術造花材料商

天野卯兵衛

特電話浪花一六四三番
電信略號(アマウ)
振替口座四九七〇番

健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは萬古不動の明言なり

近世絶好の
腦神經病良藥

陸軍々醫正從五位醫學士　森友道先生證明
海軍々醫少監從五位　日向次作先生證明
腦神經系統專門醫學士　森繁吉先生證明
自然療法創始者醫學士　常持爲治先生發見

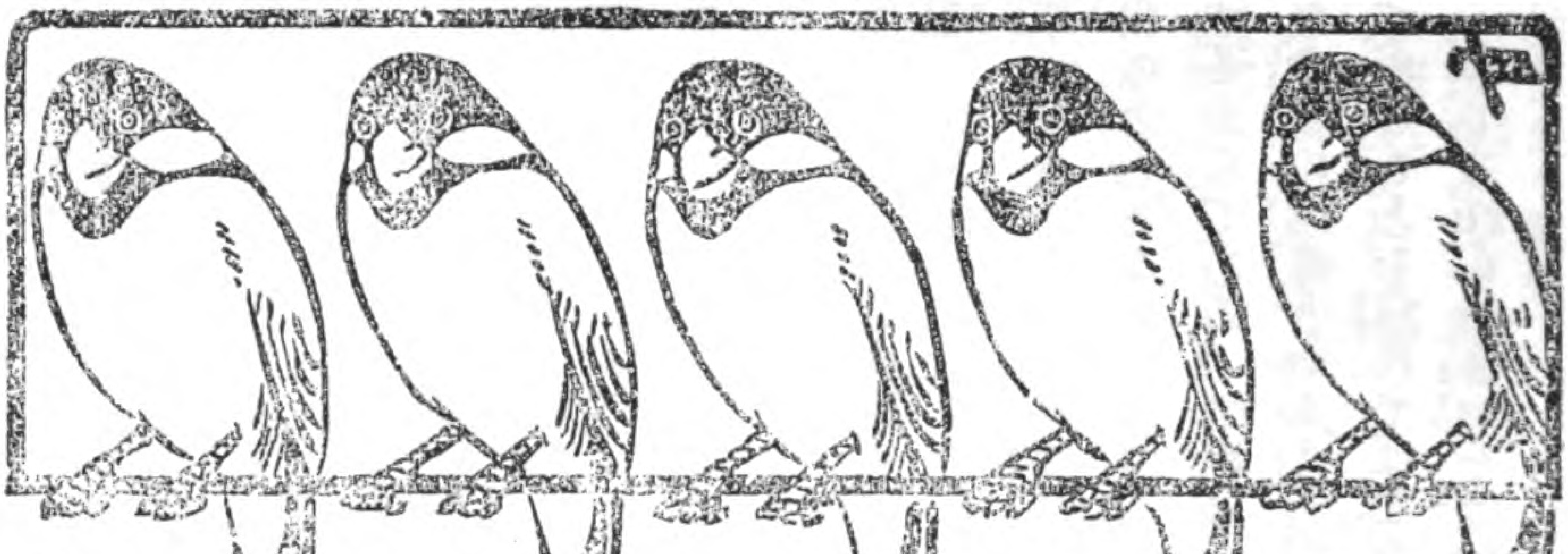
自然療法 レーベン

藥價
三十錠三十錢
百錠八十五錢
二百錠一圓六十錢
四百錠參圓

藥効

腦病、神經衰弱、ヒステリー、ヒポコンテリー、腦充血、陰萎、遺精、逆上、頭痛等の根本的療法として近世絶好の最良の藥物にして而かも熟練せる技術に依りて成功せる新式の錠劑なり夫の丸藥の類に非らす

發行所 弘濟藥院
東京市京橋區銀座弓町二十二番地
中南定太郎
特長電話新橋四九五三番
振替貯金口座[illegible]七七番



女子文壇　第四年第十二號

紀元二五六八年　（明治四十一年八月一日發行）　西暦1908

女子の友情

男と男との友情と云ふものは、輕忽のやうで、其實は美くしく深い、女と女との友情と云ふものは、愼重のやうに見えて居て、其實は美くしくなく、又淺い。何故女子の友情は斯くも淺いのだらうか、之には種々原因があらうと思ふ、女子は男子より用心深いと云ふ事が、却つて友情を淺くするのではなからうか、男子は一旦信ぢると心の底まで信ずるが女子は底の底まで信じ合はない、何うしても表面だけで交際てる者が多い、女子は友情にも虚榮があつて、つまらない事も隱し合ふたり、誇り合ふたりして居る、然うかと思ふと眞にうちとけて、親や同胞に隱してゐるやうな事でも遠慮なく語り合ふ、それも永く續かない。初めて會つた女どうしの對話などを聞いて居ると、しら〳〵しくて、何うしてあゝまで餘所行の話が出來るものかと呆れる事がある。思ふに斯う云ふ風に女子の友情が偏頗になり、矛盾になり、淺薄になるは、眞に人生と云ふものが呑込めて居ないからであらう、男子の友情は苦痛の時にも虚榮あり、宜しく改めて、友情を眞にせよ、女子が孤獨を悲むのは、眞の友情を見出し得ないからで、男子に比べて其點は未だ甚だ眞に遠ざかつてゐると言はなければならぬ。

八月（大）

日曜　二日　九日　十六日　廿三日　三十日

しめじ茸出づ、西瓜、絲瓜よろし。

文學と批評

武島羽衣

吾人は何故に文學を讀みまた研究する必要があるかといふに一つには智識を得るため、二つには快樂を得るため、三つには敎育をうけむがためであるからである。すでにかやうなる目的がある以上は讀みまた研究すべき文學にもおのづから種類がきまつてくる。瑣細なる文學これらは讀む必要はない。何となれば何の智識も得るところがないからである。みだりがはしき文學これもまた讀む必要はない。何となれば何の敎育を得ることもないのみならず、かへりて心神を不健全にするからである。さればこの讀書の目的にかなふやうな書物の選擇といふことが讀書するもの丶當面の急務であることを忘れてはならぬ。

さてこれらの書物を讀むにあたりてはたゞ一わたり讀んだだけではゆけぬ。これをよく理解せねばならぬ。よく作者の思想と感情とに立入りて十分に之れをのみこまねばならぬ。これは若き讀者にははじめのうちはちとむづかしき注文かも知れぬが、しかしつとめてこのやうな讀みかたをすれば利益と快樂と文才とを得ることは多大なものである。

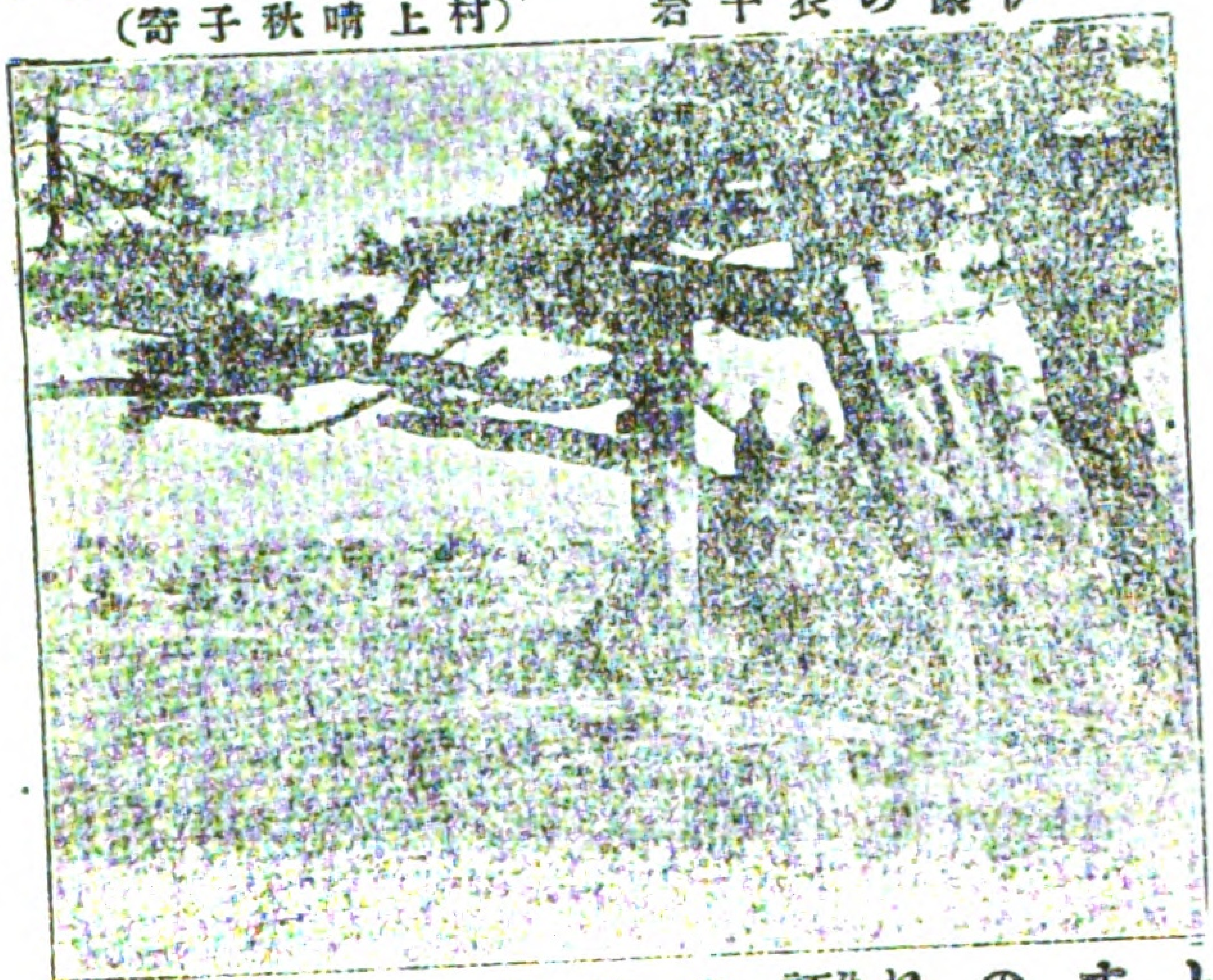
かやうに作物の精神まで立入りて精讀するやうになると、こゝにおのづから批評といふはたらきが、おこつてくるのである。批評といふのはその文字の示すが如くに批判し評論することである。作物の形式と內容とを考へ心に蓄へたる善惡の標準、思慮の作用によりて、そのあしきところ、よきところを定めることである。批評といふことを世間ではまゝあらさがしといふやうに心得てゐるものもあるが、これはあやまりて、批評は眞相をさがし出すことをいふのである。作物の美醜の兩點がこもごも讀者の頭腦にうつつたあとをさながらしるすことをいふのである。

批評といふ以上は必ず比較といふことがともなはれる。則こゝにある作物があると、その作物にあらはれ

た思想や感情、あるひは言語や修飾の方法などを、別に理想として考へらるゝ思想や感情、また言語や修飾の方法などと比べるのである。かくしてよいとか、惡いとかいふ考が生じてきてこゝに批評といふことが出來るのである。

批評するにあたりて缺くべからざる原理は言葉づかひ、段落布置、內容および精神についての原理である。よい文學には必ずや言葉づかひが精撰せられてなければならぬ。また文句の布置や段落のきりかたがととのほつてなければならぬ。また單にかやうな外形のとゝのほれるのみにはあらで、これに加へて、思想の統一といふこと、則前後首尾の聯絡といふこと、また思想感情の誠實といふこと、また思想感情の清新といふやうなこともなければならぬ。この內容の美點と外形の美點とが相

伊豫の衣干岩（村上晴秋子寄）



まちて、はじめてよい文學はあらはれてくるのである。

さて然らばかやうな完然な批評をしやうとするならば讀者はいかなる資格をもつてをらなければならぬかといふのに、それにいろ〳〵あります。まづ第一には批評せんとするものは明確な判斷力のあるものでなければならぬ。この意味からいふと批評家も詩人と同じく半ばは生れるもので作られるものではない。批評家は偏見を除去する力をもたねばならぬ。また第二に批評家は厚き同情をもち廣き敎育をうけたものでなければならぬ。人間に關したことはことごとく知つてをるといふやうでなければならぬ。世界的の智識をもたねばならぬ。いかなるものに出あふてもこれを玩味する性がなければならぬ。第三に各時代の事情に通じ各社會の組織などにも明かにしてそれを

直に目前に書くことが出來るやうなはたらきがなければならぬ。まづこの判斷力の深いといふ事と、同情のあついといふ事と、各種の智識をもつてをるといふ事とがそろはぬ時には批評家は狹小な偏見なもしくは不公平な性質をおぶるやうにならざるを得ない。

文學の歴史はよくこれを示してをる。新しき思想をもてる文學者詩人などが新傾向を世におこなはんとするに際して不完全の批評家のためにのゝしられ汚名をかぶせられたことはあまた例を見出すことが出來る。

かやうに考へると批評家になるのは非常にむづかしいやうに思はれる。實に非常にむづかしい。それは半ばは作らるべきものであるといふのでもわかる。しかし、ある程度までは勉強で批評家の技能を養ふことは出來る。文法修辭法美學倫理學これらの研究で批評家の資格は半ば習得せられる。とにかく廣く讀書して諸般の智識を得、あまねく經驗して人間としての教育を身にうくることが必要である。たれもかれもひとしく大批評家になるのは困難ではあるが、しかし文藝趣味をある程度までたくはへて、文藝の作物に對して正常なる判斷を下すぐらゐのことは大概のものには出來るのである。

しからば大批評家になると、たれも皆よき作物に對しては異口同音にほめそやし、あしき作物に向ひては鋒先をそろへてこれを排斥するかといふのに、それはさうともかぎらぬ。則批評家の説は必ずしも一致するとはかぎらぬ事がある。一人の評家のよくいふ物を他の評家はわるく論ずる場合もある。

かやうに同一の作物に對して説がちがふとすれば批評といふものはあてにならぬものではないか。批評家といふものは要するにありてもなくてもよいものではないかといふ考がおこつてくる。そも〳〵かく説がまちまちになるといふのはいかなることに原因するのであらうかといふことが第一の疑になつてくる。しかしこれは原因がある。

これはつまり批評そのものに罪はないのであるけれども批評のしかたに精密と粗漏とがあるからである。

今日の多くの批評家には批評すべき作物を精讀するものがない。書物の序と表などを一覽して下した漫評にすぎぬものが多い。新聞の批評の多くがあてにならぬもこの故である。ある批評家はおのれの屬する黨派の考から不公平に批評するものもある。それらの批評はほめるのもけなすのも一家の私見にすぎないので以て天下の公論とはいへぬ。ある批評家は批評の定理を標準とすることをしないて、たゞ、ある作物がその頭腦にしるした印象だけを漠然としるすにすぎぬ。無論見解の相違趣味のまち／＼といふとが批評の不定をひきおこすものではあるけれども、しかしもし批評の原理を苦心して不公平に應用したらむには大概作物の批評は一樣に出來なければならないのである。

文學を批評するといふことは三とほりの人に利益がある。年少のものには文學の形式につきて明確な考をもたするし、また文學の佳境につきての趣味を養成する。作者には刺戟劑ともなり、また壓迫力ともなる。その巧みなるところにむかひて慰藉をあたへ、その拙きふし／＼にむかひては痛棒を加へることが出來る。而して公衆にむかつてはいかなる書物をよむべきかのしるべをなし、また作物の批評せらるべき主義と標準とを知らすることが出來るのである。したがつて公衆の趣味と智識とをたかめることが出來るのである。



阿蘇の噴火口　（沼田秀子寄）

名流婦人の處女時代

一晝夜に千枚の繪

野口小蘋

私はまだ碌に歩けません頃から、畫が好きでした、勿論形も何も成さなかつたので御座いますが、紙さへ見れば、何か描いて見たくてならなかつたので御座います。丁度數へ年四歳の時、天然痘に罹りましたが、極く輕症かつたさうですから、疱瘡病みの小言に、紙を與れ、筆を與れと云つて、大變親達を困らしたさうで御座います。

八歳の時……其頃は大阪に居りましたのですが、初めて東山と云ふ先生から、一寸した畫のお手本を描いて戴いて、習ひ始めました。父は醫師で御座いまして、漢學の素養もあり、書も書きましたから、私は漢學は家に居ります門弟の人達に、暇を見て敎へて貰ひました、勿論素讀だけで御座いました、書の方は父から與へられました子昂の法帖を習ひました。

間もなく、家を擧げて京都に遷ることになりましたので其頃京都で名高かつた、南畫の畫家、日根對山先生の門に入りました、此の畫は（此時女史は床の間に掛けられたる山水の軸物を記者に指示されて）對山先生がお若い時の作で御座いまして、餘り密畫ではありませんが、一寸面白いところがありますので、先達京都から取よせました、先生は晩年にはもつと強い筆法を用はれました。

其頃、少しは遊歷も致しましたので、丁度越前に父の知己がありまして、一度來て見たら好いだらうと云ふことで御座いまして、父に伴れられて越前に遊びましたが、其時は大分歡迎を受けました。伊勢にもまゐつたことが御座いますが、其後、名古屋に遊びました時、父が旅先で病氣になりました、丁度母も同道で御座いましたから、大層心配致しまして、種々看護に手

を盡しましたが、療養の効がなく、遂に歿しましたので、一時は途方に暮れました。皆樣が喪中は名古屋に居つた方がよからうと被仰つて下さるので、三年間名古屋に留ることに決めましたが、其間には種々の困難も御座いました、何うやら畫によつて母子の糊口を凌ぐやうな譯で御座いました、父の歿しましたのは、丁度私が十五歳の時て…其頃はまだ小嶺とは申しませんでした、初めは玉山と申しましたので、姓も野口ではなく…野口は嫁しましてからの姓で、最初松村と申しましたのです。

右のやうな譯で一通りならぬ苦勞も致ましたが、何しろまだ十年代の時ですから、肯かぬ氣も御座いましたので、或る時、一日に千枚の畫が描けるだらうかと云ふ話が出まして、私は描けると申しますし、他の人達は到底も出來



盛溽の果實（錦子畫）

ないと申しますので、それでは描いて見やうと申しまして、徹夜で描き上げやうとしましたが、それでは體に障るから、何も徹夜せずとも、時間さへ十二刻（記者曰、當時の十二刻は現今の二十四時間即ち一晝夜也）と決めたなら、晝だけにして二日に亘つても宜しからうと申される方が御座いまして、晝だけ描くことにして、夜は休みまして、到當一日…十二刻に千枚を書き上げましたことも御座いました、至て粗雑なものではありますが、千枚と申しますと畫題にも困りますし一寸骨が折れましたが、只今と違つて血氣盛りでありましたから、負け惜みからそんなことも出來ましたので御座います。只今では、一寸何か描きますにも、筆を置いて考へもしますし、煙草も喫みます、お茶も呑みたくなりますので、なか〳〵進捗りませんが、其

頃は着手りますれば、其事一心になりまして、煙草どころて無く、落付いて御飯も戴いて居られませんので御座いました。

父の喪を濟まして、京都に歸りましてからは、矢張り劉山先生のところに通ふ側ら、揮毫に應じて居りました、其頃暇を見て、漢學を小林卓齋と云ふ先生に教へを受けました。詩集も愛讀しました、何と云ふことなしに、種々の集を讀みました、詩も十年代の頃からぼつ／＼作り始めまして、後に岡本黄石先生にも見て戴いたことが御座います。小野湖山先生にも知己になりました。書は其頃はまた、顔眞卿の楷書を習ひました。之は私共の流派……南畫の方ては、畫を描き上げますると、之に何か題辭を付けますので、其の爲めに自然、詩も學び、書も習ひましたので御座います。

名古屋から、京都に歸りました頃は、丁度維新の當時て御座いましたから、京都はなか／＼騒々しう御座いました。長州長屋などが、澤山建並んて居りまして……木戸さん（記者曰、木戸孝允のこと）などにも度度お目にかゝりまして、南畫を描きましたり、合作などしたことも御座います。其他當時の名士の方々にもよくお目にかゝりました。

二十五歳の時、母を失ひました、母は乳癌を煩ひまして、種々手を盡しましたが、只今のやうに醫術も進歩して居りませんので、何うにも致方なく、三年ばかり病つて、到當歿しました。野口家に嫁しましたのは、三十歳後のことて、東京に出てまゐつたのは、明治四年て御座いました。

親戚へ逃げ歸る

山室千代子

私は本所て生れました、此家（神田小川町）へまゐりましたのは、十三歳の時て御座います、私が生れました翌る年、父が亡くなりましたので、私は殆と母の手一つて育てられましたが、十三の歳に、又々母が歿しましたので、家は小供ばかりに成つて了ひました。て、

それ〴〵親戚へ預けられることになりましたが、私は小供のうち長唄を習ひまして、自分も好きて御座いましたから、相應に記憶も宜しかつたので、當家（山室家）の父は山田流の琴を教へて居りましたが、これ位長唄が出來るならば、容易に覺えられるだらうからといふところから、遂に當家へ貰はれることになりました、まゐつて見ますると、當家は澤山の人が出入りしますので、今日此の方が來られたかと思ふと、明る日はまた異つた方が見えられるといふ風に、始終來訪者も多く、其間には、お稽古に來る方も引切りなしにありましたので、母の手一つて育てられた私には、人樣の澤山出入りされるのが、何とかく恐ろしいやうに思はれまして、何うも居り惡くかつたので御座います、それて家内のもの、隙を見ては、竊そりと他の親戚へ逃げて歸りますのです、さうしますと、その親戚では大變に心配しまして、そんなことを爲てはならぬ、と、よく言ひ聞かして、人を附けて送り返して呉れます、さうしますると二三日居てまた逃げて歸ると云ふやうに、半歳程の間と申しますものは、隨分皆樣を困らせましたので、兄や親戚のものが集りまして、那麽に度々歸つては困るから、もう之れ限り決して何處へも歸つて來ては成らぬから、と申しまして、長唄のお道具やら、私の所有と成つて居りましたものは、一切私に附けて、送り戻して呉れました、それから初めて、自分も心から此家に居る氣になりまして、琴にも一心に身を注れるやうになりました。


洗濯（川畑はな子さん）

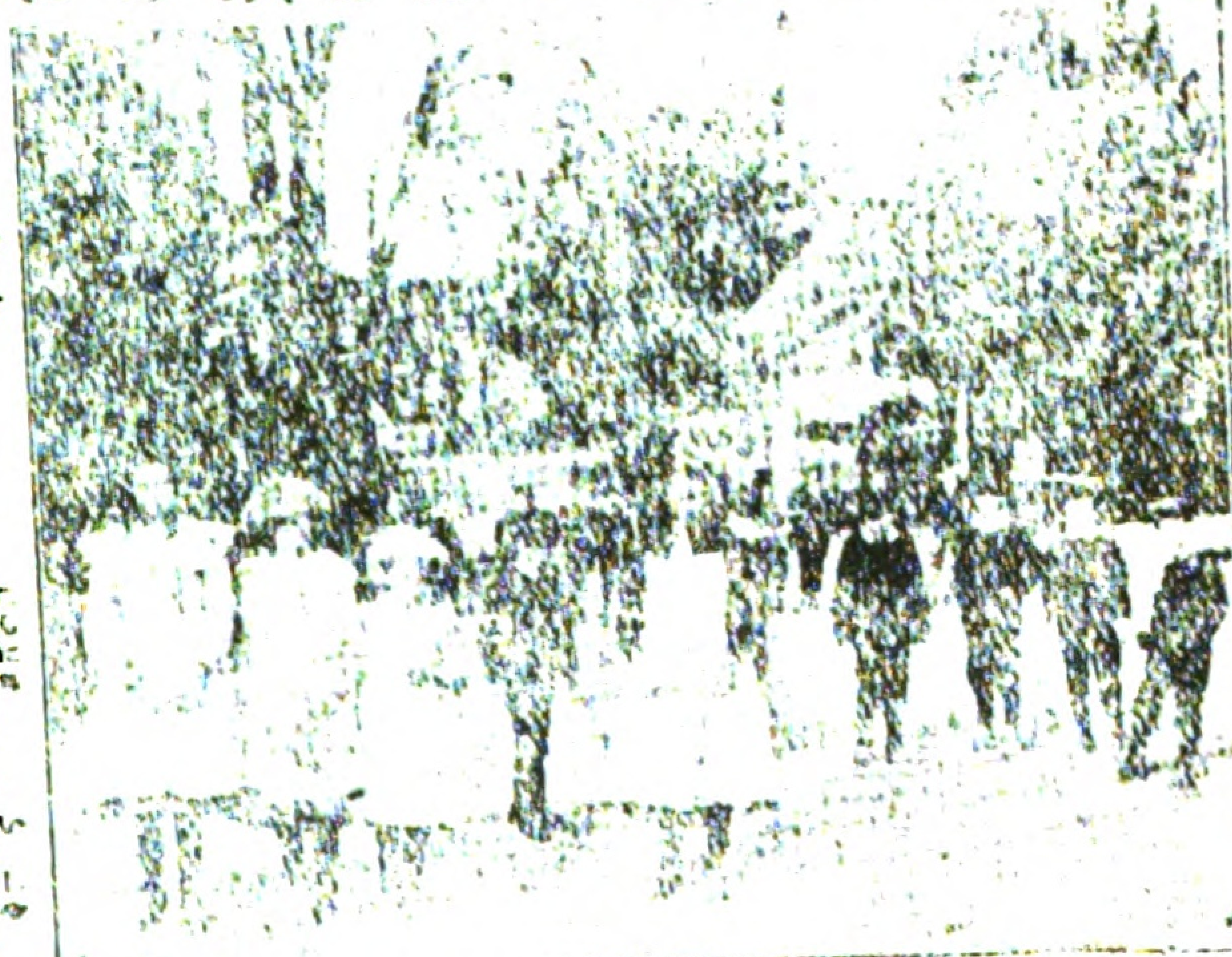
長唄の素養がありましたので、琴を習ひます上にも、

左程六ケ敷いとも思ひませず、最初から二挺立てゞ習ひました、初め一通りは父に教へて貰ひましたが、宅ばかりては宜しくないから、誰か他家の人に就いた方が宜しからうと申しまして、丁度山瀬が父の知己でもありましたし、日頃何かにつけて私を可愛がつて、何か會でもありますと、毎度私を呼びによこして、伴れて行つて呉れましたりなどした縁故がありましたので、山瀬のところへ稽古にまゐることになりました、よく教へて戴きましたが、間もなく先生が中風に罹りました、でも初めのうちは何うにか教はりもしましたが、だん／＼手も動かぬやうになりまして、遂に亡くなりましたので、今度は、明神下の山登…彼處へまゐりましたが、之れも三年ばかりして、先生に亡くなられましたので、次には櫛田へまゐりました、此先生はまた三味線が上手で御座いましたので、三味線の方も習ひましたが、誠に拍子惡るく此先生も亦三年ばかりして、亡くなられましたので、それ以後は習はうにも、教へて戴だく方はなし、何うにも致し方が御座いませんので、以後は一つ自分で出來るだけ研究いたさうと思ひまして、其積りで居りますので御座います、無論只今も研究中なので御座いますが、どうもいろ／＼忙がしくて閑のありませんのに、ほと／＼困つて居りますのです。

皆さんの前で演奏し始めましたのは、十五六歳の時からで御座いました、山瀬に連れられましてまゐりましたので、華族會館などにも度々まゐりましたことが御座います、よく皆さん…斯の道の方に伺ひますと、何方にも種々な苦心談と云つたやうな、面白いお話が澤山御座いますが、私のは只もう最初から、何の變化もなく只今までまゐりましたので、何うにかして少しでも上手にならうと云ふことは、始終心がけて居りましたが、別段これと取立てゝ申上げますやうな、苦心談も御座いません、それだから上手になれぬのかも知れませんが…。永い間のことで御座いますから、樣々の可笑かつたことや、失敗つてきまりの惡るかつたことも御座いましたが、私は何方かと申しますと、

さらいふことに餘り頓着せぬ方で御座いますから、只今別に之と申上げる程のお話も、考へ出せませんので御座います。

現今は、お稽古は主に午前中に致します、此方からまゐることも御座いますが、忙しいので、大低はお斷り致して居ります、徳大寺侯爵家は父の頃からお伺ひして居りますので、只今も折々お伺ひ致します、さうさう本年一月の宮中お歌會始めに御預選の御名譽を得られました伊楚子さま、彼のお方にもお教へ申しました。宅へ稽古に來られます方も澤山御座いますが、何れも女のお方のことで御座いますから、お縁付きになれば、引續いてお習ひになるお方は、まあ御座いませんと申しても宜しい位です、其間には此の道によつて糊口を凌がうとするお方なども多う御座いまして、終生を斯道の爲めに捧げて、飽くまで蘊奧を極めて見やうと云ふやうな、固い決心のお方の少ないのは誠に殘念のことゝ存じて居りますので御座います。



致　中　(無名子等)

婦人科醫の不注意

梅澤和軒

◎近頃衛生及び婦人科に關する冊子は續出する。而して醫學士の一冊の務を始とし、ドクトル何某と銘打つて、麗々しく新醫士などにて育兒法、養生法を說くものを見るに、今日のお醫者さんは、金持の爲めに養生法なり育兒法なりを說いてゐる傾向がある。若い娘さん達が夫れを御覽になると直ぐ其の通りに實行したくなる。ぜひ、

からい近頃では、つまらぬ病氣のために莫大な入費をかけて入院もさせ難い、名醫も聘しがたいと云ふのが中流以下の家庭の狀態である。醫者は何でも贅澤三昧な書きぶりをして、二言目には滋養物、入院、轉地を勸めるが、何より大事なのが精神的治療法である。

◎昔武士道の隆盛な時分には、士族の娘は、それ〴〵武藝の嗜もあつたので精神的修養も出來てゐた。『武士の娘』といふのが一種の向上心、奮鬪的精神を與へたのである。然るに今日の若い娘さん、お孃さん達には、大切な此の心懸がない。

◎希臘の末世に當つてストア學派の哲學が行はれた。此の派では外界即ち世間の無常な有樣に動されぬ確乎とした不動心を養ふことを務めたものである。されば青春の女子の如きは、銘々の分限に安んじて猥りに醫者の說に迷はされぬやう心懸くることが肝心である。世のお醫者さん達も今少し經濟眼を以て著述せらるゝことが目下の急務と存ずる。破戒墮落の世の中には佛敎の戒律若くはストアの如き嚴肅主義が必要である。私は此の點に於いて雲照律師がえらいと思ふので。

一滴又二滴

高須梅溪

◎此の頃は何も考へることもなし。又た考へると、頭腦が混亂して、氣ばかり逸る、逸るのも愚だと達觀すれば、萬物一切平等、月白く風もよし。

◎文學を好むもよし、好まぬもよし、唯、文學者にはならぬのが悧好なり。殊に女流の人々は、何れも此の點に注意する義務あり。

◎女子は摸倣性に富むも、獨創力なしと、罵るは非なり。非なりと雖も、其の一半は、概ねこれならずや。美文を能くするのも摸倣の結果、論文を綴るのも亦摸倣の生産と知るべし。

◎西洋の文學に通ずる人は、別にエライとは言へず、蓄音器同樣、彼の地にて流行遲れの詩文人を舁ぐ猿の

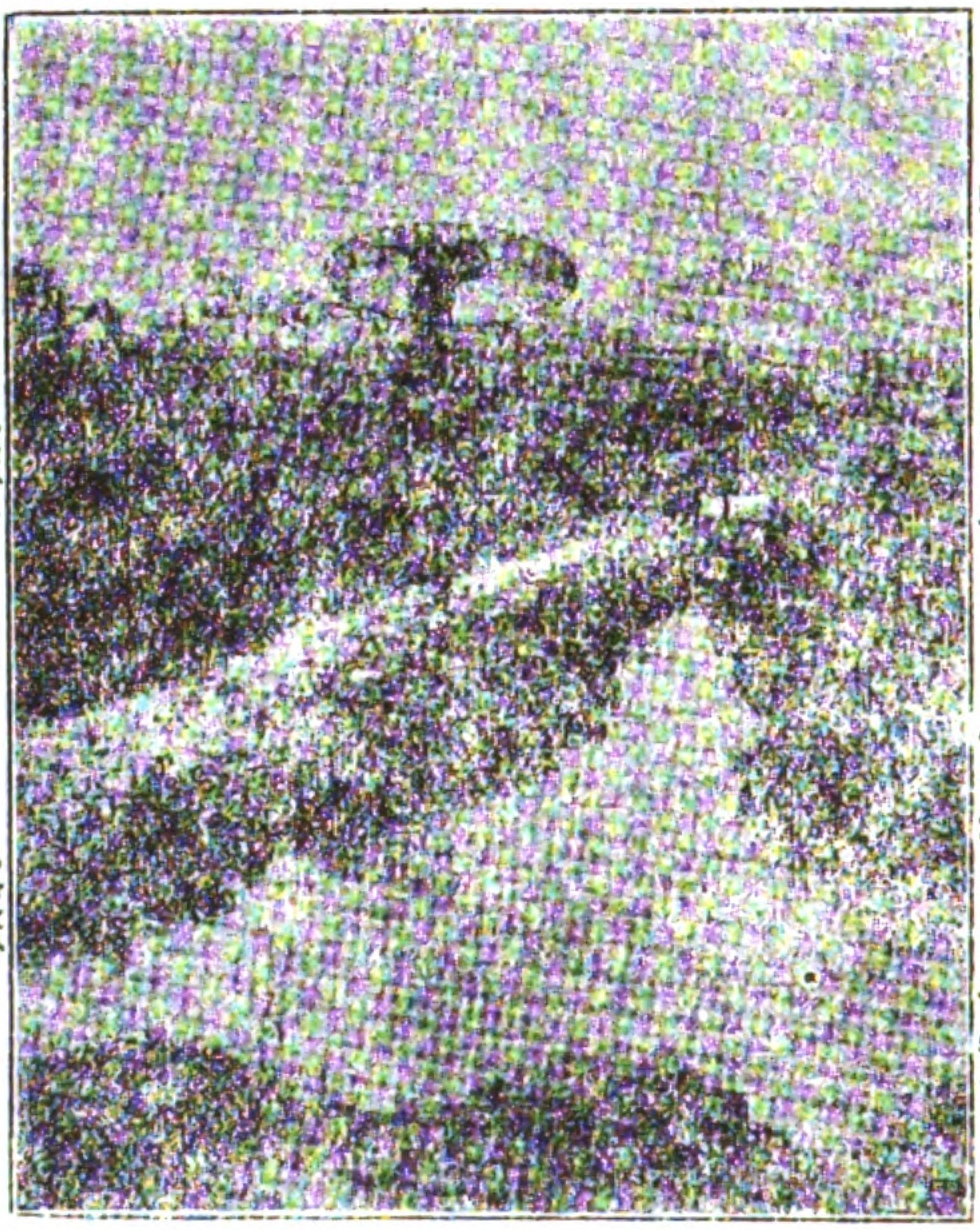
慧かしさは、見るも憐れなり。

◎文學には一定の形式もなければ、內容もなし。草は必ずしも靑からず、月は何時も白からず、血は何時も紅ゐとは言へず。形式、內容を壞すも、壞はさぬも、皆其の人々の心の儘なり。ローマ字にて書くも面白し、一切の思想に反對するは尙ほ面白し。

◎女子は稍もすると形式にかかはる弊ありと見ゆ。自分のお友達と話しする氣にて、叙事叙情の文を物し玉へ、一葉女史に劣らぬ傑作が出來るかも知れず。

◎近來、文藝上の作物を見るも、何故か感服せぬやうになれり。小說も愚、新體詩も大愚、俳句和歌更らに大いに愚劣とのみ感ぜらるゝは吾乍ら可笑し。蓋し感服熱の反動ならん。

◎少年の頃は、一寸した紀行文一篇に目を觸れても、初めより終りに至る迄、名句の行列とのみ思はれて、圏點を打つに忙はしかりき。今は叉た圏點を打つ處なきに苦む。



雨の田舍

（川畑はな子寄）

◎文藝上に名を馳せた人々にて、さて逢つて見ると、存外に單純なる小心の人々多し。ワイマルに於けるゲーテの威容をしのび、巴里劇場のユーゴーを畫き出すわれには、此の處失望落膽を通り越して、冷笑に終る。

◎冷笑は卑むべし、惡むべし、憐むべし。されど之れは無意味の冷笑なり。社會の矛盾と滑稽とを冷笑する心には、言ふべからざる甘味あり。

◎更らに大人物の缺點を見出して、之を冷笑する時、天上天下、吾獨り愉快を覺ゆ。

女

土岐哀果

よしわれ等、ドンジユアンの如く、一千有三人を抱擁すとも、なほ、腕を分ち唇を解くそのゆふべには、われ等の前に立てるもの、善き、はた惡しき、溫厚、はた酷薄、愛あり、はた信なき、いつも〳〵、そのひとつ女なることに心づかむ。

* *

男、初めて女に逢へるとき、美しきを、あるは床しきを無みするたゞひと言、はたさる思想は、その女の精神なる「彼の存在」を永久に害ふにあまりあらむ。

* *

地と天ばかり、相親しみ易きものはあらず。君が思へる女を腕に懷かむまへ、瞳をあげて星をあふがば、君が抱擁は、たゞ君が室の壁に對ひ居たりしものと同じからさらむ。

* *

今日わが腕に抱ける女が、嫉妬ぶかきか、うつり氣なるか、樂しき性か、哀しき性か、誠あるか、頼み難きか、われはそを知るのえうあらむや。これらあさましき語が、われ等の心靈の思ひ、われ等の命運の默々の中に遂げらるゝ高所に、達り得べしと君は思ふや。その女が雨のことを語るか、寶玉のことを語るか、飾針のことを語るか、飾羽のことを語るか、われ等いかでこれに心を勞せむ。またわがことを解かざる如しとも、いかで心を勞せむ。一心靈、わが心靈を見いれりと感ずるとき、わが憶るゝは莊重の一語なりと君は思ふや。

* *

女は、その生の中心に通ずる路を忘るゝことなし、その女の貧富、智識の多少、はた屈辱の中にあると、光榮の中にあるとを問はず、われをして、まことにわが清淨なる心靈の底より湧き出づる一語を囁かしめよ、このとき女は、曾て忘るゝことなかりし不可思議

の路の足跡を辿りて、一瞬も躊躇ふところなく、そが無盡の戀の寶庫より、淸きことわがものに劣らざる語辭と、顧盻と、擧措とを齎し來らむ。さながら、その心靈は、戀の物に應ずるが如し。蓋し、女は、他の心靈の最高の懇求に答へむと、日に夜に心がまへす。かゝれば、いと貧しきものゝ値と、皇后の値と、それ何の差別ぞ。

＊　＊　＊　＊　＊

英雄が、おのれの運星の力と、その確乎たることゝをさとるは、頭を女の胸に枕ける、その奥妙の時のまにあらざらむや。また、まことに、未來につきての眞の感情は、かつてその息所を女の心に有つことなかりし人に來るものならむや。

＊　＊　＊　＊　＊

愛し愛せらるゝは哀しきかな。然れども、愛すること能はざるは尙いよ〳〵哀し。

＊　＊　＊　＊　＊

もの狂ほしく戀ひ慕ふは、思ふに、賢しからざらむ。さもあれ、もし君にして、もの狂ほしく戀ひ慕ふことあらば、いつも賢しく戀ひ慕ひたりし時よりも、一層の賢智、疑なく君に來らむ。

＊　＊　＊　＊

われ等、愛する一人を失へるとき、われ等の戀のあまりにはかなかりしそのいく時を思ひては、潸然としていとつらき涙を覺ゆ。もしわれ等、逝きぬるものゝ上に微笑みてあるらむには、哀傷の中、何等絶望も無からむを。はた、貞操と幸福とを回想しては、一味の淸快、われ等の涙に纏はらむを。

—マアテルリンク—

口繪の説明

本誌の口繪に在るのは鳥類の生活を研究して有名なエチ、スターレ、マークスの初期の作物です。一八九一年にリバープールの秋期展覽會に出たもので、作者が夙くより此の方面に非凡の技倆を有してゐた事は當時の人を驚かしました。平生動物園に通つて熱心に諸鳥の生活を研究し、殊に鴫鷸に就ては諸所の動物園に行つて有りッたけの種類を悉く調べたものださうです。口繪のは即ち其の一部分で、勿論彼が細心の研究の結果を示したもので、一々の鳥には一々に活きた鳥のモデルがあるのですから實物の繪術でなく斯く原色版に撮つたものでも見てすら何れも躍動してゐます。『女王とペリカン鳥』と題したのは彼の最傑作の一つださうで、其の他彼の畫題は殆ど此の bird-life に取つたものばかりだと云ふ事です。

（香生）

A. "Inuboye Point" it says at the bottom. Is this then the famous lighthouse of Inuboye Zaki?

甲. "犬吠岬" と下に記してあります. 之がそれては有名な犬吠岬燈臺て御座いますか?

B. Exactly and it is the first lighthouse which is seen by the steamers crossing the Pacific Ocean. I saw the inside of it and at night when it sends the shafts of light across the sky, you think you are in another world.

乙. 然うです。太平洋を横切る滊船の見る最初の燈臺は是てす。内部を観ましたが，實に綺麗て，夜分空を射る光線など眺めますと，別天地の心持がいたします。

A. Is there any hotel near it?

甲. 其近邊に旅館が御座いますか?

B. Yes there is a very good one called "The Gyokei-Kwan" and women and children go there in summer because the house keeps order and quiet particularly during the night.

乙. 曉鷄館と云ふ良いのが御座いまして，婦人小供等が夏によく參りますが，其宿が格別夜間靜かて，規律がよいから，評判てす。

A. I shall advise my sister to go there. What else did you see?

甲. 姉に其處へ行く樣勧誘しましよう。其外何を御覧になつて?

B. The tireless telegraph not far from the light house.

乙. 無線電信. 其は燈臺から遠くありません。

A. Now I remember that I have read in the paper that the "Tango Maru" had communicated with it several hours before she was sighted.

甲. 成程，先日丹後丸が未だ日本の沿岸に達する八九時間前に，無線電信て報知したと，新聞て一寸讀みました。

B. It is worth while to go to see it. I have no time to tell you how the waves dash against the massive Choshi rocks and breaks into foam and spray, and how peaceful are the pine woods along the shore. Go and see them yourself.

乙. 態々ても觀に行く甲斐が御座います。其他，巨大な銚子巖に怒濤が打當て，水烟と成る樣や，海岸に沿ふての松林の幽邃なる事など御話し申す時がありません. 御自身て行つて御覽んなさいまし。

第一增刊『文壇の花』は文壇界に高評を博せり

女子文壇 臨時增刊 懸賞募集

紙數大判二百五十頁

文壇の光

十月十五日臨時增刊

投稿募集項目

○小説 ▲第壹種▼ 總假名付一行廿四字百五十行

○美文 ▲第二種▼ 一行二十四字七十行限

○お伽噺 ▲第三種▼ 總假名付一行廿四字百行限

▲第四種▼

○新體詩 總假名二十行限

○日記文 一行二十四字三十行限

○書簡文 一行二十四字三十行限

○論文 一行二十四字三十行限

○短文 總假名付一行廿四字五行限

○和歌 一首限

○俳句 一句限

○圖畫 人物風景 縱横隨意二寸五分の三寸位

（此スケッチ畫は可成鴈皮紙の樣なる薄き日本紙を用ふると ▲賞は番外一等より十等迄）

▲投稿〆切期限 八月三十一日

（此日の午後十時迄到着を以て〆切る）

▲投稿規定は次の心得書に就て見よ

『文壇の花』紙上に於て豫告したる如く。我が女子文壇の第二臨時增刊は『文壇の光』と題し來る十月十五日に發刊すべし。募集の項目と懸賞方法は次の如し。苟も文字あるものは此好機を逸する勿れ。因に云ふ募集の各詩文の選評は凡て編輯局にて行ふと前の『文壇の花』に同じ。其公平懇切なるとは應募諸君の信じ給ふ處ならん。敢て傑作の投稿を勸誘す。

珍案懸賞贈品

第壹種 ○天賞 金拾五圓 ○地賞 金八圓 ○人賞 金五圓

第貳種 ○天賞 金拾圓 ○地賞 金五圓 ○人賞 金參圓

（正金を呈す）

第參種 ○天賞 絹反物（價格七圓） ○地賞 舶來更紗（同四圓） ○人賞 絹ハンカチ（同貳圓）

第四種 ○天賞 絹ショール（價格五圓） ○地賞 手提袋（同參圓） ○人賞 机掛（同壹圓）

〔番外〕 一等より十等まで

（價格五十錢以上貳圓迄）

▲投稿の心得▼

○投稿は女子にして一人一章又は一首限りとす。

○題と文體とは各自の隨意なり。

○投稿用紙は半紙又は原稿紙に限る。字體は楷書、假名は平假名を用ふ、但和歌俳句は一首或は一句を半紙半枚に認むべし。

○投稿は各種類を異にする毎に必ず別の用紙に認め、題の上に各その項目を書し、題下には必ず住所姓名を明記すべし。

○投稿は句點を施すべし、圈點は附すべからず。

○投稿の封筒は女子文壇社編輯局宛、『文壇の光原稿』の文字を傍書すべし但各種取交ぜ開封に差出せば三十匁迄郵稅二錢也、但他の用事の文句を記す可らず。

○投稿は必ず自家の作物たるべきこと若し剽竊の疑あるものは入賞無效とす

○入賞者は寫眞を發表前に通知を受けたる時は差支なき限り送付あれ用濟の上返送す。

○投稿は一切返附せず又不足未納稅は受取らず。但收入印紙を用ふ可らず。

○入賞者へ懸賞品送付は發表一ヶ月後たること。

（以上）

發行所（投稿受付所）

東京市京橋區中橋大鋸町

（電話本局六〇七番）

女子文壇社

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

有効保險 前代未發 秘傳奇術

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰門の爛れを治する法●消渇を必治する法●頭癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清眞にする法●齒痛即治藥製法●髮の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●鼻汗治法●白髮を染る法●毛髮の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●抜毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法●女を閨屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時服む特効藥●避食の仙術●神速に精力を强む法●即座隱身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●記憶力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●墨字夜光の奇術●老人終身黴取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●服瞞を治する法●黃疳を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下瘡を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを抜く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡を治する法●虎列拉病豫治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●麥酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏蚊帳洗濯新法●髮の汚染を落す新法●新しき鍋釜の錆氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

全壹冊正價郵稅共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館商店

生殖機病特効新劑……(獨逸新輸入藥)

內服 ヨヒンビン

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能(即ち陰萎病)陽物無力 腎虛神經衰弱 遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力、生殖器腦弱、手淫に起因する諸病、早老者、精液精蟲缺乏、不妊娠、冷症 快美減少及び短小者等に用ひ輕症は四五劑頑症は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を達せしむるに天下無比 可驚奇効ある最新發見藥也 精力を増進し生殖器を強健にして勃興淫慾を著しく發動せしめ人生の最大快樂を得んと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効如電光 世にありふれたる誇大奇言を臚列する内地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に質に就て承合せば明白なり

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九十錢 郵券弍割増

輸入一手 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

世界無比の 最新發明藥 あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまづ、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾弍劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用弍割増し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす)着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

洋畫講義録

洋畫講義録は水彩畫を始め[illegible]肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

繪畫講習録

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

東京市麻布飯倉四丁目
大日本繪畫講習會

三大博士

發明 神經衰弱貧血頭痛ヒステリー陰痿等通俗的症候解説療法攝生法依ト見的里根治藥詳説の雜誌をハガキて申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長醫家實驗廿七名の不思議の効果を確認せる全治報告根治療法詳説の雜誌を救濟の爲め無代進呈ハガキて申込め

東京京橋越前堀
樂天堂藥房

男ちぢれくせ毛赤毛

は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料熱授誓て美髪にして差上げます

東京 麻布區材木町
岩阪

造花

編物 摘ミ 瓶細工
材料器具販賣

弊堂ノ特色ハ誠實ト勉強ヲ主トシ物品ノ精選ト價格ノ低廉ニアリ定價表御入用ノ方ハ御申越次第郵送ス

東京神田今川小路一六
九段坂下電車通俎橋際
精華堂

色黒 にきび 吹出 好評嘖々

たるクヴルーの最新療法にて全治せし故同病困難者へ郵券三錢送れば誓て全治美人の幸福を與へます

東京下谷區初音町四の十四女子美術學校前
長田

女子文壇の廣告によりお申込の節は其旨御書添を乞ふ

（明治三十四年創刊）懸賞雜誌

最も實益ある文章雜誌を紹介す

秀才文壇

毎月一日十五日發行

四月十月定期増刊

八卷十六十七號發行

- ◉卷頭……文壇諸大家
- ○短篇小說……德田秋聲選
- ◉新體詩……馬塲孤蝶選
- ○美文
- ◉評論文
- ○新口語詩……小川未明選
- ◉寫生文……高濱虛子選
- ○小品文
- ◉評論文……矢部白雨選
- ○和歌……尾上柴舟・前田夕暮選
- ◉俳句……虛子選
- ○漢詩……虛舟選
- ◉スケッチ……服部愿夫選

正價

一册郵稅共金十一錢 ◉六册前金六十三錢 ◉十三册増刊共前金一圓四十錢 ◉廿六册増刊二回共前金二圓九十五錢

（定期増刊一冊二十錢宛）

第三卷第八號

少年之友

益ます大發展

▲美麗口繪▼

- ○海中の大怪物……服部愿夫畫
- ○少年繪手本……古洞、宗方筆

例に依り面白く習ひやすき繪澤山あります

△記事△

- ◉妖怪宮（二勇少年の大冒險）……白雨
- ○世界第一の聖書……記者
- ◉珍らしき動物……はくう
- ○動物植物採集旅行（續）……藤道
- ◉狸退治……李隱
- ○氷の御殿……野火
- ◉八月の日記……記者
- ○少年巡査……秋畝生

此の外になほ懸賞文の發表あり

▲少年文壇▼

○普通文○日記文○短詩○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ

▲無比廉價▼

一册金五錢 郵稅五厘 ○六册郵稅共前金廿七錢○十二册前金五拾四錢

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂（振替口座壹九五五番）

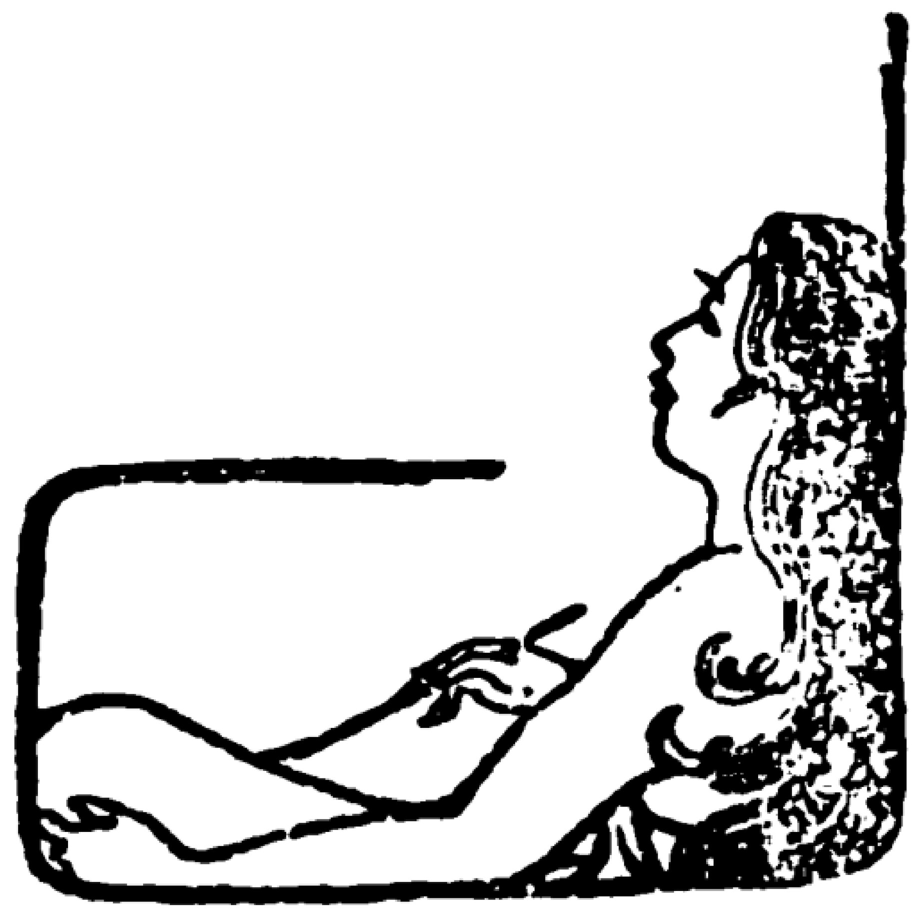
賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

（戊の四）

英　文

（第四年第八回）

女子英學塾講師 河 井 道 子



Choshi

A. You disappeared immediately after the examination. Where have you ben?

B. A godess of fortune took me to Choshi.

A. Choshi? Did you see any whales?

B. Not whales, but I have seen many things better than whales and sardines.

A. Is there any thing more famous than they in Choshi?

B. It seems to me that you do not know anything about geography. Did you pass its examination?

A. I do not know my marks yet, but geography is one of my weakest points.

B. I'am sorry for you, and yet I myself is a very poor scholar of it. Look at this postal card! Is it not a beautiful lighthouse on the cliff?

銚　子

甲. 試驗が濟むや否や影を御隱くしになりましたが，何處へ御出でになりましたか？

乙. 福の神が私を銚子に伴れて行つて與れました。

甲. 銚子？鯨を御覽になりましたか？

乙. 否，鯨や鰯等より，遙に結構なものを見ました。

甲. 銚子には外に何か有名なものが御座いますの？

乙. 地誌を少しも御存知無い樣に見えます。其で試驗に御及第ですか？

甲. 未だ成績は知りませんが，地理は私の弱點の一つです。

乙. 御氣の毒です事，併し其樣に申たとて私も知らないのです. 此繪端書を御覽なさいまし。崖上の燈臺は立派じやありませんか？

旅情

醉茗

私は今、旅の人です、家も、事業も、世の中も忘れて、只旅の情が面白く動いてゆくばかりです、私の情はひろ／＼とした常陸平の草の上に漂ふて居ます、私は詩を歌ひたくなりました、若い女に言葉を掛たくなりました、折から祇園祭で、村の若衆は太皷を叩いて盆踊の稽古です、月は夢のやうに森を離れてゆきます、花が空中に躍つてゐるやうな太皷の調に連れて、音頭取る囃し聲は手に取るやうに聞えてきます、庭一ぱいの月に下り立つとお才が栗の木の下に洗濯して居ますから、二言三言夜雨の平生を問ひました、多くは語りませんけれど、お才の眼には露がきら／＼と輝いて居ます。夏にしては凉しい晩です。太皷の音が又一しきり高くなつてゆきますと、美くしい聲の中には女も交つてゐるやうです。私は見に行かうかと思ひましたけれど、興を妨げても面白くないと控へました。私は今美くしい詩を歌ふて居るやうに思ひますが、言葉にはなりません、私は只、魂の浮いてゆくまゝに、騰波の淡海の水の上でも、筑波の山の絶頂でも、旅の情に任せたいのです。椽柱に凭れたまゝ夜雨は一言もない、今夜も寂に月の沈むのを待つてゐるのでせう、沈んで行く月を見て僅に慰める心があるのでせう。私は今、冥想の人を醒ましたくありません、私は今、晝の點火を見て居るのか知れませんけれど、夢のやうな光が好きです、旅のやうな世の中が好きです、上りかけの月の色が好きです。けれども月は段々白く冴えてゆきます、微かに雲が懸ると、又雲を出ます。盆踊歌は漸く寂しくなつて來ました、花瓣が落るのでせう、野は深き眠りに入らうとしてゐます、私も眠らうと思ひます、起きて居ても、眠つてゐても同じ事ですもの、寂しくなれば眠るまでゞす、私の旅には何の不安もないのです、歸らうとも思はず、行かうとも思はず、おやすみなさいと云ふ、只、明日も旅なれかしと願ひながら（筑波の麓なる夜雨の宅にて、河井醉茗）

美文

編輯局選



▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は罫紙、一人一作に限る事、投書締切は每月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

【天】○流星のあと

和歌山　岸みどり

御姉さん早く出ていらしやい赤いものとんでよとの妹のこゑに私はすぐ出て行きました、ほらあの白いうねうねは今のもののあとよ、西を見れば青い空に白色をおびた細い通り跡とも思はれるものがうね〳〵と淡路の島におちる五六間上にエス字形に中央にかゝつて居ました、時は明治四十一年五月廿一日の午後六時四十分、場所は和歌山市の西北一里ばかりはなれた村なのです背の明星はもう姿をあらはして居る五位鷺が六羽後になり先になりして東の方へとんで行く、五位のよめ入り朝行つて晩よといふ子供の聲がかすかに聞えた見渡せば淡路千光寺山脈はいよ〳〵紫に空は一つの山線を境に、オレンヂ色をとかしたかのようにまだらになつて上にうすく消えて居つた、御姉さんあのあとを御覧よ丁度ぼうふりの尾をはやしたようねえと妹が言ふ、そうねあの尾をとつてしまつたらエスといふ字なのよと敎へてやると妹は只エス〳〵と繰かへして云つて居る、私は何だらうとしきりに考へて居る、其處へ隣の叔父さんが來ました、今晩はとあいさつすると、おぢさん、おちまへのこゑで今晩はといふ、丸子さんさつきの天火を見ましたけ、いゑ見ませんてしたのよ、あれ天火つていふのですか、地に落るのですか、へイ〳〵落ちますとも、おちたら大變ださうてす家におちると火事が出るといふし又天火がとぶと凶變があると昔からの傳りてがすよ、えッほんとうまあ恐ろしい事ねとんで落ちると火事がゆくしその上凶變が添へ物とはずゐ分氣味のわるい火ですね、叔父さんどの邊におちましたでしやうか、そうさナ山陽道か瀨戸內海位だナ、私は日本海へおちたと思ひますがどうですかと言ふと叔父さんはうなづいて笑つて居る、何事かを諷するように、今まで默つて居つた芳ちやんは不意にねえちやんまゆが出來てよと叫んだ、と見るとまゆが二つ出來て居る、まゆ消えて點となりだん〳〵となくなつてしまつた、明星は尙一層輝いてこゝそこには星の影も見せて何ともいへない風が吹いて來る、小さい螢が前をとび交ふて居りました、その後大坂朝日新聞には流星が瀨戸內海におちたとの記事が出た、私の豫言は全くはづれてしまひました。

初めの書き出しは實に好い、最も流星の流れたあとを見ると云ふ事柄が纏つて居るからでもあらうけれど、文章も興が乘つて隙間がない、けれども隣の叔父さんが來てから後の文章は、初めから見るとずつと力がない、後半を作りなほしたら完全な作になるであらう（評）

地

○松露取

大阪府豊能郡池田町　寺部君子

花子さんが「まあ行て御覽、其は面白いのよ、ポコッと割れて有る處を、一寸掻くと、ほろ〳〵と白いのが出ますの、可い香りが仕て」とのお話。一度行て見たい見たいと思ふて居た矢先とて、最う立ても居られず、お隣の民子さんを誘して、其明の日皐月山へ松露取りに出掛た。兄樣は既う遲いから、今頃に何有る物かと、仰有たけど、松露は年中有ると聞て居るから、無い事も無からうと、來て見ると、花子樣の仰有た通り、松の根元なんぞが、ほかつと割れて居る、其處此處に掻き散した跡が有る、最う澤山に有る樣な氣持がして、そは〳〵する。「民子樣此處に有るのです」と知た顏「然う好い香が仕ます事ね、松茸が出來てるんじや有りませんでせうか」「今頃に」「ても餘り松茸の可い香が仕ますから、茸狩に來て居る樣ですわ」「實際ね」と語り乍根氣能く土をほじる、爪の先が痛くなる、併し松露は一つも無いから嫌になつて來た　すると民子樣が頓狂聲に「有りましたよ」と「エヽ、何處にです」側へ行て其跡を掻くと又一つ「私も」其時の嬉さ「あら此處にも、此處にも」と面白相に澤山拾ふて被在る、私は有りかけると有る物だと思ひ乍「まあ、那麼に見せて頂戴」見ると色が黑い「あら兎のふん見た樣ですわ」「あらッと前き拾ふた眞物の迄一緒にバッと捨てゝ、兩手を振て被居る、顏見合せて「ホヽヽ」と思はずお腹を抱へた。勝手分らず、無暗に歩いたので、足が痛んで來た、そろ〳〵歸りませうとて、山を下りて、茶店で休んで居ると、其家の娘さんが「松露なら、此の上に一月程前に澤山出ました」と謂ふ、惜い事を仕た、もつと早く來れば好つたと思ふた。歸て風呂敷を開けて見ると、松露が四個、しめじが三本、（小さい小さいのが）穗歐が一たば。

松露は取れなくても、此れを讀むと面白さうなこと（評）

入

○流れし花

石狩　西部秋江

なつかしく一日として忘るゝ隙なきは同窓の友なり、片時も我が机の上より離しゝためしなきこの寫眞は其のなつかしき親友が俤にてこれこそは思ひ出て多き紀念なれ、指を屈すればもう四と年の昔、我等同窓廿一名はいとも仲睦じく校中の手本よと諸先生にも愛でら

れたるが、そが中にこのうつし繪の三人りは殊にわりなき仲にて羨む者さへありけらし、一人憂ふれば三人共に憂ひ、一人樂しき事あらば三人共に、喜びもたのしみも共にして時々は師の君に笑はれたる事さへありたるを、あゝ今は甲斐なし。思ひかへせば前々よりの約束なりしならん。ある時學校の歸り道に三人が手にするその花を小川に暇やらんとて、夫にしても此の後はこの花の如く離れじと、三本の花を三人が黑髮の痛さを忘れて、ぬき取り、そをもて束ね流したるをあなあはれ、其の花はあゝ花は見る見るうちに西と東に別れたり三人は思はず打ち伏しぬ。



向ふ岸（天賞）

青森縣三戸二日町松太方　松尾ちよ子

しばらくしてかゝる事の何んのその、あてにはならじと、思ひ返し、又々共に進むべき前途の語ひに餘念なく樂しみの裡に我が家には歸りたるが、今はあだ事にあらず遂に其の花の如く三人は別れて世の浪に流るゝ身とはなりつるなり、寫繪の裏にはなつかしの師の君が三人を歌ひ給

ひて

秋の江に咲き亂れたる女郎花
　　操たゞしく色まさりけり

かゝる歌さへあるを其の女郎花の君は古郷の庭に咲きみだれ、操の君は學の道にいよゝ色まさり、我れは色もなく花もなき、深山の秋の江、たゞ雁の便りもたらすをのみ待つ身なり。雁の渡るみ空の遠きよりも遠くなりしあはれ三人の寫眞よ。

古い型にはまつた文章だから、今のハイカラな分子の多い文章を好む人には、多くの興を與へないかも知れないけれど、花が流して三人の行末を占ふ件は無限の感あり（評）

秀逸

○柿の花

本所　田中久子

柿の花の白いのが闇に物寂しう散る夕てご在ました。兄樣と私と高い御書院のお椽から細い足をぶらんと下げて、夫の散るのを見てをりましたが。散る……、散る……、楓、梧桐の葉末を渡つて二人の足にも冷い夕風に、ほとり、ほとり、と暗い土の上へ間無く散つてまゐります。

其時私はたしか八つ、兄樣は二つ優りの十てしたが、「坊ちやまには惜しい」と當院の和尙樣も被仰つた程な、お色の白い、溫和しい、優しい方でご在ました。

母樣は今でも時々「若くて死ぬるは何處か違ふのだね」と被仰てはお泣きなさいます。

其時も兄樣は短い筒のお袖で私の肩をしつかり抱いて居て下さいましたが、「姉樣はお嫁に行くんだつて」「お嫁さん？」喫驚して訊くと「うむ」と云つて何だか俯向いて入らしつた樣でした。「お嫁さんて、なあに」と又訊くと「お嫁さんてはね、他所のお家へ行ちまふの、可哀さうだねえ」。

夫から二人は暫くだまつてお庭許り見てをりました。木立の奧から冷い風が吹いて來て裾を拂ひ袖を拂つて、少し許り持て居た桃色の毛糸の端が、兄樣の方へ流れて指へまつはりました。二人はだまつた儘……。聽てうしろの御書院の中に人のけはひがしますと、急に塗骨のお障子が明く成つて二人の影……、お頭の圓いのとおかぶろのと二つ、ぴつたりくつ着いた小さいのが……下からすつと淡く出て濃くなるとぴつたり、肩の邊りで止つて寫りました。二人とも見返つて、莞爾して、云ひ合はしたやうにお椽へ上ると手をつないて、一散にお部屋の方へ走りました。

お椽を出つてすぐ、十疊の暗いお座敷を通して五疊のお茶の間としてあるお室と間の、腰ぶすまの明いお障子をふと見ますと……、亂れた島田の毛を震はせて、切髮の母のお肩へよつて姉樣の泣いてゐらつしやるお姿がうつつてをります。つと立ち止つた兄樣は私の袖

を引いてすぐ又あとへ戻りました。お椽は暗い。私は兄様に引かれ乍ら長いお廊下を、御書院から御本堂から、ぐる〳〵其夜はまはつてをりました、私は譯も知らぬおそろしさに只だまつて居りました、兄様もだまつて……。今はみんな夢て御座います。父様と姉様と兄様お位牌を祭るために、今は母様と私と只二人、矢つぱり當院のお室を借りて暗い中に昔の夢を操り返して居ます。やがて又、あの柿の花の散る宵がまゐりませうけれど昔の夢の返る時はいつの世にかご在ませう……。

全體が幻のやうて、夢のやうて……（評）

○臨終

麹町　野村光子

今宵いとゞ靜けくも夜は更けて待ち詫びし人よりの玉章も來らず昨夕書棚の上に挿まれし美人草は友が寫し系を掠めてはやも其幾ひらを散らし果てつ、ろうたき姿に咲き出てゝ如何に其命の短きよと疾病に腦む身はそと胸を押えて泣きぬ頰に亂るゝ後れ毛を搔き上ぐる指の細りの我身ながら慘ましき程やせて人に捨てられし身は寂寥に耐えぬ思のやる瀬なく我魂は宿るべき地も無く斯くてこそ何處にか迷ひ行かんとはすなる鈍色濃き幽冥の淵か、黑雲渦く凄寂の高嶺か……。日に增し疾病のいや增していまは永かるまじき處女の齡を唯懊惱に煩悶に冷き臥床の中に終らんとはすなるあゝ死の蔭の身に迫る時臨終の帳を開けて死の境に入り穩やかに醒めぬ眠に就く其時其所に慰安の場所は設けられて我身は心しづかに來るべき友をぞ待たん苦悶憂愁に腦む我身を死の蔭は疾く掩ひて慰安の境に運ばずや燃ゆるばかりの愛も溢るゝばかりの情も友の爲に捧げ果てゝいまは冷き肉塊の幽に吐く吐息と共に此世に殘るのみいかで死の使は疾く來りてそが鋭利なる刄に我魂の緒を斷ち切らざる我身の愛や情や再び燃え出てず冷き血の唯血脈を流るのみ世の人の慄き恐る死や我身はいとゞ慕し永遠の我魂の住家には紫深き筑波の方死の領の中に、逝くべき時は近づきて臨終の蔭も身に迫りぬなつかし君がみ名呼びて微笑てぞ我は永久に眠らん。

情餘りて雜しぶろ、今一層明々白々に自己を告白するに如かず（評）

○髮の形

京都市　大森はる

妾、お隣の靜子様とは一つ歲下たなのですがお互に氣が合ふので幼い頃から姉妹の樣にして戴きまして髮の結ひ樣は何時も同じ風に結ふて居りました靜子さんが二〇三卷の頃は妾も二〇三卷に結ひ、妾の島田髷の時は靜子さんも島田に結ふて居られましたが去月の末靜子樣にはお婿さんが出來ました、其後は何んだか妾、：

…以前の様になくつてね、それに此頃では獅子様は太きな丸髷に結ふて赤い鹿の子を掛けて居られますが。此眞似斗りは、妾は未だ……。

寸戯、人を殺すもの（評）

○もじずり

群馬縣　中里東雲

五月雨晴れたる頃、野に咲き出づる愛らしき草あり、細く短き葉の中より莖長く出でゝ、白と桃色とのしぼりなる花、其先の方に巻きつきたるやうに咲く、故郷にてはもじずりと名づけて、常に見なけたるが、なつかしければ、大類の學校の庭にありしをもらひ來て、植ゑたる事もあれども、今年は根さへ絶えけん、咲きもいでず、ひて子の君を訪ひたりしに、小さき瓶にさしたるが、書棚に乘りてあり何と云ふぞと問ひしに、こゝにてももじずりと答ふ、一花貰ひてかへらんと思ひしに、いとま告げたるは夕暮れにて、忘れおきたる口惜しさよ。

又問ひたるに、ふるさとにても文字ずりなりといふ、歌の團居に招かれたりし安藤の庭にも、咲きゐたれば折しも降り出でたる雨の、水晶の數珠などみだしたるやうにかゝりしさまこそ忘られね。

本田といふ家に此頃ゆけば、あはびの貝がらに植ゑた

るが机の上にあり、あたりは汝れぬ猫さへうらやましく思はるゝは、我のみか。

古意ありてゆかし（評）

○轉宅

市中　上土井定子

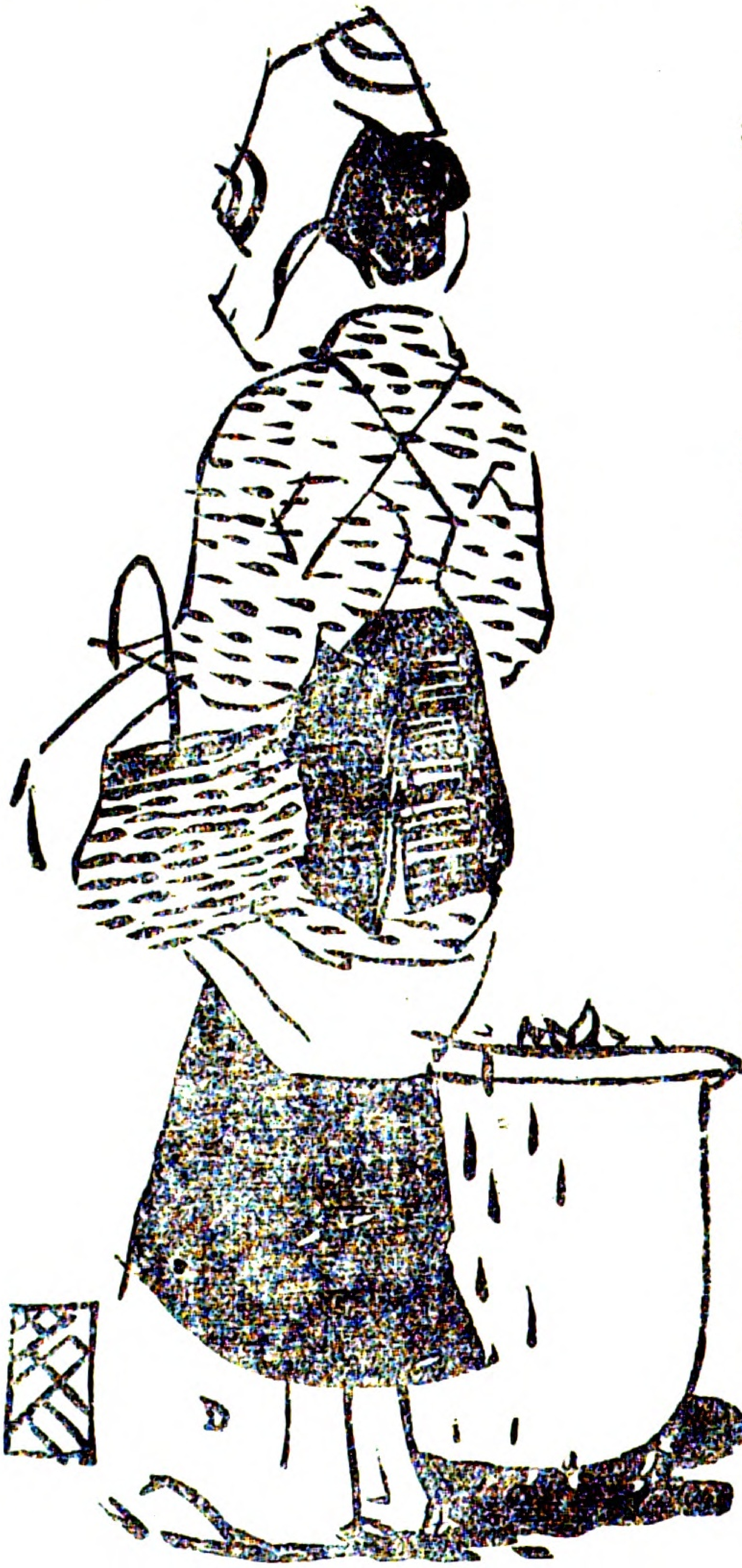
隣室に響く七時の點鈴にモシ／＼お早う御座いますよと…婦人の聲に驚きアッと云ひつゝゴスと跳ね起きたる主人公、兩眼を摩擦りながらまだ寢足らぬやうな大欠伸一つ、最愛の坊をベットの上に殘して水道端に行きぬ、婦人は裏に驅け表に馳せて道具調集にいとまなし小道具は空箱に詰められ、衣服は行李に入れられて今哉轉宅の用意半は調ひね。折柄馬車の音裏口に止まりて、程もなう入り來しは銅の如き色の逞しき男二人、お早う支度が出來ましたか、猫撫聲の婦人のいらへに彼等は打笑みつゝからめられたる荷を片ッ端より抱へ出す物に拔目なき主人公は塵も殘さじとかき集めてもう何もないかと見廻る傍に身は錆び鞘は折れて遺恨三年坊が三才兒童軍の將となりて奮闘したる軍刀と人形の首一つベットの下には小さき古靴が轉がつて見るからに物淋しかりき。

主人公は力なき聲にて坊を起せベットを出せばもう仕舞よ恩愛深き親の心はベットの上の身一つに注がれても運ばねばならぬ際となりて…坊や／＼と肩を搖れ

どもいつもに早き今朝の夢のさめ兼てすや〳〵眠つてゐる、母は起よと抱き起せば、坊は漸く目を見開き空となりし室内を疑ひて何するのと問ひぬ、轉宅……轉宅と聞いたる坊の目には涙含みていやよ〳〵と泣き出しぬ、母は母が負ふて行かうと背を向ければ聞かばこそ聲の限りに泣き叫ぶも道理、半年の故郷として通學の友と夕べまで廣いヤードへ遊びしに、今朝の夢の醒むるや、轉宅武夫さん移るのかと花ちやんに問はれて更に袖を分つの悲しさを子供心に秘め兼て降りしきる一と時雨に母の胸裡を濡しつらん、やう〳〵坊をなだめて濁りたる聲を絞りて、では皆さん遊びにお出よと離別の語を殘して立ち出てんとする時、そろりと落ちぬ無花果の老葉一つ。

昔は天竺の宿がへと云ふ諺もあつた。今は布哇の引越を紙上で知るやうになつた、但し此文布哇らしい特色を缺くもつと正直に四國の風俗人情を巨細に書くとおもしろからう。（評）

麹町區土手三番町二　前田たみ子



茶摘み　（地賞）

○口繪

本所　秋山欣子

私は、袴の塵を手拭でハタ〳〵と拂つて、上框へ腰をグツタリと下した、この邊には珍らしい無邪氣な十八位いの女（此峠の茶屋の娘でせう？）が汲んでくれたしぶ茶を二口三口、漸と人心地つくと、妙なもので喝を覺ゑるのが今迄より烈しいのです兄樣に申しますと、ハヽヽヽと大笑なすつて、

「桃様は謎が甘いよ實際、ハヽヽ姉さん此孃様が何か水菓子をつて御注文ですよ、」つて仰つしやる、「水蜜桃が冷して御座いますが、」と優しい「オーベリーグード、」案内頼む、」つてもうせつかちに立かける、皆笑ふ、私も一寸すねくれて見たが、矢張喰べたい心に負けて、默つて二人に従いて茶屋の後へ出る、と、額を覆ふ様な断崖、其裾に、かきつや水百合で垣をなした三坪位の池があります、初夏の午さがり吐息かすけく面垂れる翠葉を小波に浮べて、涼しい、懐かしい、晴碧の色を湛えて居ます、女は振りむいて莞爾した、向の岩と對つて物言ひたそうに突き出て居る一枚石の上にしやがんで、眞白な手をのべると、ザヽヽーと渦を捲いて百合の花陰から見る／＼すが／＼しい若竹の籠、蓋を取ると、まあ、眞紅に熟した水蜜桃がスーと蒼い水を透して浮き上る、「素的つ」突然兄様が頓狂な聲をなさる、美に打たれたとてもいふんてせうか私は何にもいへませんてした、女は大粒なのを細い指先で小器用に剝いてくれる、ホタ／＼と眞珠の様な露の垂れるのをほてつた口にいれ乍ら二人は振仰いで上を見ました、絶えず清水のタラ／＼と傳つてる平滑な岩には白い小さな苔の花が一面に咲いて、しめじめと浸み入る様な香を空に溶かしてゝ、つゝ立つた様な岩の夾々に、金色の雲の魂が浮いてる様にパッと明るいのは霧島の後咲き、「鶺鴒でも居やうものならすつかりだなあ、」つて兄様は鞄取つた肩をお探りになる「鶺鴒なんかより、そこに桃剝いてる人が、」つて私は小い聲で、女はひよつと振向いて「さ、も一ついかゞ」と濟ましたもの、新藁で結んだ洗髮がハラリと撫肩へかゝつて、透けて見える襟足が眞白です。

今の先、麓で逢つた白雨が晴れたのか、一しきり太陽が烈しく照つて、思ひ出した様につく／＼ぼうしが啼き出した、と、女はついと立つて桃もつ手をそゝけた鬢の邊へかざしたが、ふりむきざま「アレ虹が虹が」。

これは去年の夏休に、兄様とスケッチ旅行しました、その紀行文の初頁へ綴ぢ込んだ口繪の説明です。

筆を弄ぶと云ふ嫌きはあるが、何しろ才筆縦横、向ふ處敵なしと云つたさまである（評）

○小品二片

上野　服部絢子

一、櫻

今授業中である。教師の後に付いて一齊に『我等は』なんて云ふ聲や、オルガンに交る女生徒の金切聲の唱歌などが教室の方からきこえて來る。ガランとした廣い運動場を圍んで土堤に添うて植ゑ並べて有る櫻が今散る處である、ドンヨリした乳色の空に滿つる琥珀の様な春日の光の中に、雲の様に簇がつて居る花が雪の

様に散る。有るか無きかの風にもともすればハラ〳〵と慌だしく散る。花の蔭に立てば、足元迄一しきりバーッと散つて來て又ヒラ〳〵と風に舞ひ上つては又静に地に沈んで行く花の人をそゝのかす樣な散り方が如何にも面白い。花を浴び乍ら足元の地に敷いてある生徒のざれ書を見る、頭からすぐ手足の生えた人間の繪など見て居ると急に十年前の自分達の事などが目に浮いて來る。花の中に白い蝶が飛んで居る。

二、春月

御祭は夜に入つて終へた。餘興の果ての大酒盛りも退宴て、嚴めしい甲冑扮裝の人がさも草臥れたげな足どりて醉ひざれ言を云ひつゝ歸つて行く、見物がぞろぞろと痕いてゆく、ふと向うから、此もどこかの御酌の醉ひつぶれてともあらう一人の踊り子が大きな男に負はれて二三人に介抱され乍ら來る、細い首を男の肩ごしに投げて溶けた樣になつて居る嬌艶な舞衣姿が夜乍ら人目を牽く男の胸に長く垂れた友禪の花染模樣の袖と白い繊い手、ガク〳〵して居る骱抜けさうな大きな花かんざし、さては負うて居る大男の髯づら、其等が美しい宵の町の灯、――立て並べた御神燈、内のさゞめきの燈火等の一所になつて一つ夢でも見て居る樣に溶けて流れて居る俤影――をチラ〳〵と浴びて來るのが丁度不意に繪からでも脱け出て來たものゝ樣に思はしめる、見物がどよめく、甲冑の一人などは「弱蟲が」とか何とか言ひつゝ無遠慮に顔を覗き込まうとする、男はすた〳〵と足早に行きすぎる、甲冑が追ふ、逃げる、其次々と群衆の袖をくゞつて逃げて行くらしい人の背の踊り子の後ろ影。勿論朧月夜で有る。京都に住んで居た或る春の事。

なまめかしさと、にぎやかさと、おぼろ月夜の繪を見るやうに描いてある。（評）

○師のおもかげ

日本橋　吉田さく

私は毎日裁縫終へると少しづゝ編物をして居ましたがちりもつもれば山とやら今日はとう〳〵出來上りましたので、早速なつかしい先生のお寫眞とり出して入れました、紫のわくに白の裝り黄色のリボンダイヤ玉をつけたのが殊のほか引立て見へる、其れを机の上にをき少し下て靜に見ますとやさしげな目美しく長い眉品よく高い鼻、しまつたお口許には微かに笑をふくんで、卵形の中から洋裝の半身をあらはしてゐらつしやるのがあたかも浮て見へるよう、私は思はず涙をながした。數へて見れば早五年前空には一點の雲もない小春日、教室では皆さんが泣いて居る、先生も涙をおふきになつて、「皆さんもう泣いて下さるな、五年經ては必ず歸て來ます、其時分にはどんなにかはるでしよう ねえ、

てすがお手紙はきつと下さい、「其お聲は今も耳に殘て居ますが再びきく事は出來ません、これが永のお別れてした、先生はさぞ殘念に思召すでしよう、かね〴〵お望の洋行、かの地へお着きになるがいなや瓦斯ておなくなりなされたとやら思へばゆめのよう、私は昨年青山へ行てお年を見ておきました惜むべき才學を以て、無事にお歸り遊ばしたら名高い教育家と成て世の爲め人のためおつくしなされたにちがひない、其お心を思へば、いつも意氣揚々としてお話なさつたさまが目に浮ぶ、私は自分の學なく、筆拙きがうらめしくせめてはお情深きお敎へぶりなりと書殘したい事と、生前お好み遊ばした白ばら一輪たむけて机に向へばにつこり美しくお笑ひなされたおもかげが幻のように、微にひゞく琴の音妹のさらへる葛蒲ゆかたが靜に靜にうつゝのように聞へる。

女らしく、品の好い文章（評）

○春の海

深川　井上秀子

今日は學校も半日てありますので午後の二時ごろ御門の方て私より年二つ上の雪ちやんが秀ちやんとよぶ聲がしたので行ば雪ちやんは月島へ行くとの事て有りましたから私も洋傘を持つて月島へ行きましてれんげつみながらおともない小川をいくつとなく渡つて小高いをかに上つて海の方へ行きました海まではまだ二三町有りますニ人はつかれた足をひきずりながら歩いて行きますとかたはらの川はつりぶねがとぶ〴〵浮てゐます其そばに立ふだが有ります雪ちやんごらんなさいなんてしようと見ましたが一つ字がわかりません「雪ちやんあれなんと云ふ字でしよう」雪ちやんも分らないんてす二人はそんなものに目もあてないでどんどん行ます「雪ちやんもうすぐね」「あらまだあつてよ隨ぶん」といつてだまりましたよつぽどくたびれたんてしようよ又少し行ます内さあほんとにつきました「雪ちやんついてよどこにすはりませうか」「あゝ秀ちやんあすこがいゝわ」と二人は岸の波うちぎはにこしをおろしましたそして波のゆた〳〵と岸を打ちますのを見て居りました波はしきりなしにどん〳〵と石にあたつてくだけます有樣がまるてたきのようてす「秀ちやん海の景色がまるで布をしいたようね」「ほんとね雪ちやんあそこごらんなさい鳥が二つ三つ四つとんていつてよまるで烏の樣ねそしてあのほかけ舟が水鳥の樣ね」といつてると雪ちやんが「秀ちやん今日はいゝ天氣てすからかずさ峯がよくみへてよあれがおだいばよねゝゝ（ね）秀ちやんこゝは海てもすなぢてないから貝がないから詮らないわね」と二人は一生けんめいなにかはなしをしてゐる内波はしきりにどたん〳〵といつてはごみを岸に上てゐます二人の話しは一寸とぎれ

ましたすると雪ちやんはきゆうに秀ちやん歸りませうといひましたからいつまで見てもなごりはつきませんておそくならない内に歸りました。

何でもないことか知れないが、此文章を秀逸に擧げた所以は少しも摸倣がなく、見た事、爲た事を有りのまゝに書いてあるからです(評)

○春のひかり　丹波　美和たき子

石屋（人賞）

けふは土曜なので、ほかの級ではおひるからは授業もなし、お掃除の生徒も歸つてしまつて、校内はまことに靜かなもの、新築校舍の方から絶えず聞える金槌の音も時にとつては眠い樣、三十分の鐘は今しなつた。

五年には襦袢の脇縫六年にはペプロンのギヤダと、それぞれおまち針も見てやつたしまづ、一安心と窓から外を眺めると、春の日長にたいくつしてか、鷄がアアとあくびをした。櫻の花びらがちら〳〵と四五片散る。ふと。元勤めし學校の事を想ひ起す、あゝ。元の生徒!!あの學校は土曜日の午後も授業があつたが、今頃何敎はつてるだらう、去年は、裁縫の受持なんてなかつたので、毎日の體操がつらくて耍なんか、よく、裏の遊園地へつれていつて、唱歌ですました事もあつたが。

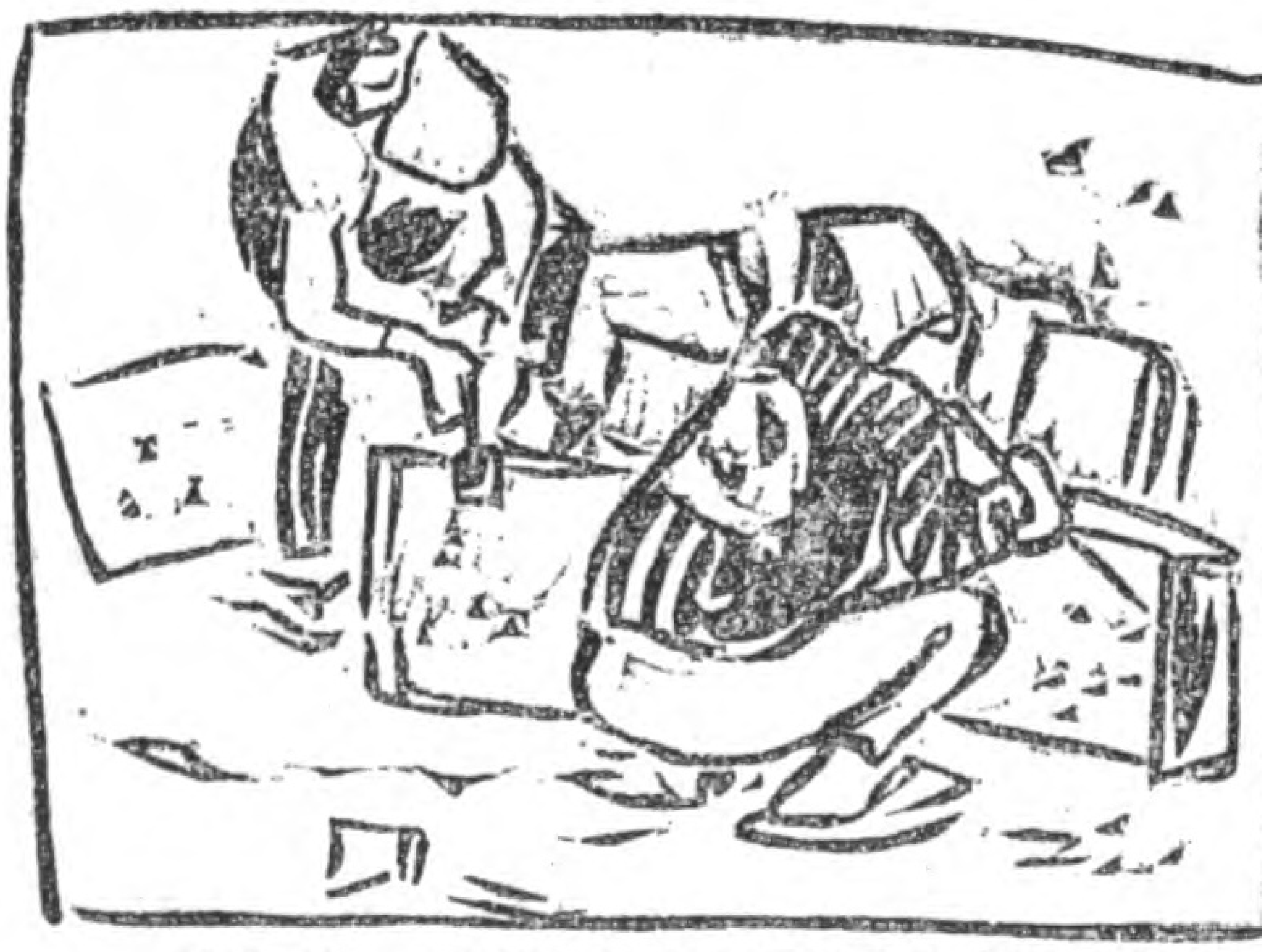
突如。「先生ッ」と後から呼ぶ。

「ハッハイ」夢の境から醒めたやう。

「なんです」といへば「ギヤダ」が出來ましたと見せてゐる。時計を見れば二分前。五六人もきた。一々見てゐると、廊下の寂寞をやぶつて終のリンがなる。

「おしまひなさい」を聞いて、がたがたとしまふ音。

「先生あすはどこをしてまゐりましようか」と、學校内では純然たる標準語。「この頃はお蠶で忙しいでしようから、あすは止めましよう」といふ、後れてゐるので、日曜には二時間分程してくる樣にしてゐるのであるが。禮もした。かた〳〵と、机を片付ける音を背にして室を出た。生徒も後からぞろ〳〵とついて出る。平和な一日の勤めもすんだ。春の光はこころよい。



牛込區市ケ谷久富町六〇藤澤方　佐野貞子

○今宵　兵庫　中田かつ子

一

美しい殘照が青い海の面を彩つて岩屋の白壁にきらきらと光つて居たのが消えると、やがて天の女神が織り

なした薄絹の樣な夕霞が、靜かに……靜かに無限の秘密を包みながら何處からか塵の世を蔽ひ初めた。

乾坤はもはや濛！幽！暗！

二

月は淡路の山高く離れた。一時は暗かつた山、森、岸、海、島は更に微妙の光を帶びて、夢のやうな色彩をはなつ。

白絹を引き裂いて投げた樣な浪は足元に碎ける、松風の響は小さい浪の音にかよふて、丁度三保の松原の宵のまゝを老松の梢に琵琶かきならし玉ふと云ふ天女の樂の樣。けれども今宵ばかし、妾の心は常の明石潟ではなかつた。

三

もう今宵限り此處へは來まい――想へば想ふ程悲しい、怨めしい、恨みてある、涙てある。

毎夜々々此濱邊を彷徨ふたのは月を見る爲めてもなかつた、波の音を聞く爲めてもなかつた、はた又松風の曲にあこがれるためてもなかつた――噫唯兄上の無事のかへりの一日も早かれと願ふてのみてあつたのてある。てももう仇てある――そのしたはしい兄上は支那海の邊りてはかなき露と――どうしても妾は誠のこととは――。

四

この松の根てあつた、去年の夏休の或夕暮兄上と此濱邊を彷徨ふた時、共にしばしが間海の眺めにあこがれたのは。

おゝ月は其時の光と同じてある、浪も昔ながらによせて居る、松風もかはらぬ響にかよふて居る、唯見る人のかはらてあらぬを――。

夏とは云へ海吹く風のぞんと一切り身に泌み渡るのをおぼへた。

五

踊らう、家には老いたる母もあるのであると立ち止つた足をふみ出して又振り返る、折梢流星一つ長い尾を曳いて北にきえた、兄上のみ靈のそれてあらうか。

岩屋の燈臺幽かに明又滅。

○朝飯

伊賀　伏見貞子

日曜と云ふと、いつも目を醒ますのが、八時頃だが昨夜は、少し調べ物があつて遲くなつたので、眼が開いたのは、もう九時過ぎ頃、美しい日光が滴たる樣な淺い綠色の葉の隙間を漏れて、さうして障子の、硝子を透して、机の上の小さい鏡にパッと反射して、更に、床脇の壁に菱形に映つてゐる。

井戸端て顏を洗つて、ほつれ毛を、なて附けながら、臺所へ來て見ると、もう皆朝飯の跡を片付けて、自分

のお膳だけ、淋しそうにお櫃の傍に置いてある、板の間の火鉢には鐵瓶がチンチン涼しい音を立てゝゐる、玉猫が坐蒲團の上にチョコナンと坐つてゐる、疊の處へ引きずり出して自分が坐ると、這度は膝の上に這い上つた。さうして喉をゴロ〳〵鳴らし出した。ガサと、表の方で、新聞を投り込んだ音がする、裏口から弟がは入つて來た。

『姉さんの寢坊やあーい……』

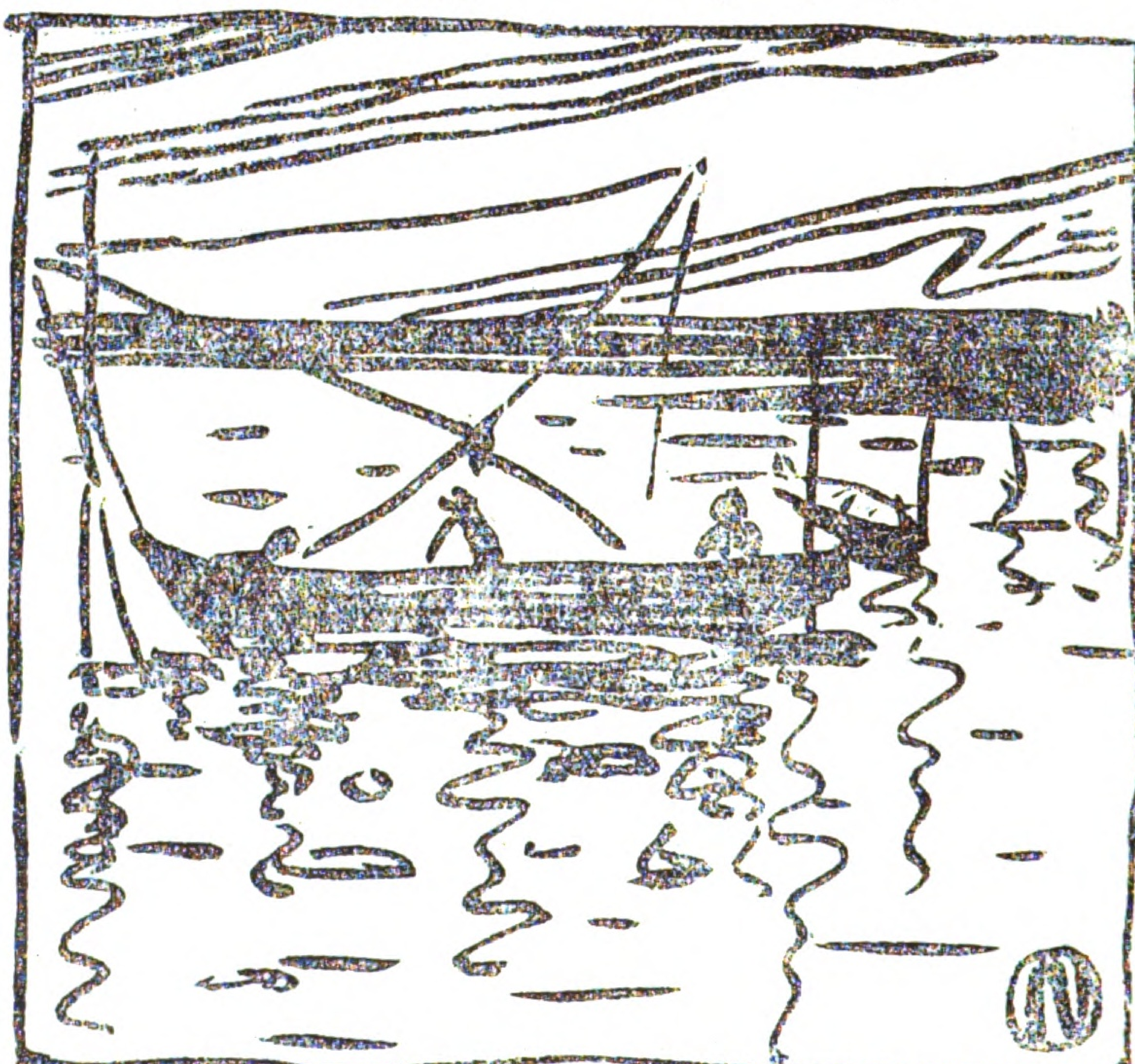
と云つて、棒切れを持つて、そこらを叩き廻す、と玉は吃驚して、膝から飛び降りたが、疊一疊程逃げただけで、背後を向いて、逃げようか什麼しやう？と云ふ樣な顏をする、白い口鬚がピク〳〵動く。

『信ちやん！姉さんに新聞持つて來てお呉れな……え、信ちやんは好い兒だねえ。』

『やあい自分で取りに立つのが、うるさいから、あんな、おぺんちやら云つてらア！やあーい！』

と、云ひ捨てゝプイと表の方へ出て行つて了ふ、やつと安心した玉は、また、のそ〳〵膝に上つた、お汁の冷たのと、不味さうなお漬物とを眺めながら箸を取つた時には、ねぢのゆるんだ時計が、眠むさうに玄關で十時を打つた。

夕の海　　南多摩郡　中島縫子



○歸路

大宮町　紫紘子

嫌な工場の仕事に比べてその工場の仕事が終つて家に歸る樂といふものは

又格別の樂しみてあります、それは丁度學校へいらつしやるお孃さんたちが、その學校からお歸りになるそれよりも尚一層樂しいやうに思はれます、私が歸つて來る途中で澤山の袴をはいた女學生さんたちに逢ふ度毎にさう思ひます、若し私にお父さんがありましたらあんな嫌な工場へなんか行くんではないのに、あゝ今はどうしても駄目ですだからあきらめて居ります、こんな事を思ひながら歸へつて來まするど不圖思ひつきました、それはかれこれ十日前からの事でしやう？いつも形にはまつた樣に定つて所で逢ふ十八九になる中學生さんがあります、丁度いつもの所へ來ました向ふの方から例の絹セルの洋服を着て眞白なハンカチーフを持ちながら私の方を向いてやつて來ました、私は何となく變な恥しいやうな氣がしましてうつむきました、そして洋傘で顔を隱して通りぬけました、丁度その時夕日がはいらうとして彼の方の顔をひどくさしましたが彼の方は私の顔をみたでしやうか、あゝなぜ私は彼の方に遇ふと顔を赤くしたり隱したりうつむいたりするのでしやう?!

若し私が袴をはいた女學生だつたならどうてすかわかりませんが今のこの身ではあゝ、私はまだ十七の少女てすもの、それはそうとあの方はどうして私をよく瞶めて行くのでしやう？あゝ早く歸つて懷しいお母さんのお顔をみませうと思つて路を急ぎました、路で生垣の廻してある家で琴の調べが何となくあはれに聞えました、どんな御方がひいて居るのでしやう慕はしの家につきましてほつと一息！あゝ私はいつ迄もこんな生活を續けるのでせう？あゝ。

◎登高

韓國　淸島千里子

見渡す山々は黑く鮮かに錦江の流れ淸く黃なる菜の花靑き麥畑廣く連なる田のおもと是等の配合が實に美しい右の方は錦江の河續きで朝鮮舟が二ッ追手に帆かけて見る間に通り過ぎると向ふの方から城崎丸が黑い煙を吐いて進んで來る後に續いて白帆が二つ三つ見え初めてだん／＼大きくなつて近づく空を擘して白い鶴が七八羽通つて行くまるで夢心地で見て居ると山の後方に姿をかくして仕舞ふ風もないのに靜かな波をうつて黃金の海に黃色い蝶々が漂よふて居る。

眼下に集まる江景市中北村の朝鮮婦人が頭から白布を被つて大きな深い笠をきてすみの方を行く後から三ッ組のお下げにした四十位の男が通る……學校が退けたのか白い生徒が何か笑しい言葉を使つて居る中には帽子をきた十四五のも見えるあれでも妻があるのだらうか……然し女生徒は一人も居ない考えると婦人は實に可愛想だ——少さい部屋一ッが自己の天地で學校も無論行けない想えば遙の日本から海山越えて來た私は世界中が己の天地ですもの此の上の幸福はあらうかとシミジミ思ひが胸に浮ぶ。

折から撞出す江景寺の鐘の音は遠き彼方の森に淡れゆく妾は急いで丘を降りた。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定 新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は乙種の規定に據る。

[天]

○鮒の王樣

伊豆國須崎 小澤香芽子

早瀬川の川上に一の瀧、二の瀧、三の瀧と三つの瀧かありました。三の瀧の下に大きな靜かな淵がありまして其の淵には昔から鮒の王樣が住むで居て澤山の家來がありました。

すると春の初に一匹の鯉が下の方から川を上つて來ましたから鮒の王樣が「これ〳〵鯉殿、貴樣は此の方の住んで居る場所へ來て何をする積りだ、貴樣は體は大きくても此處へ來た以上は此方の家來になるのだ」と云ひますと鯉が「家來にして下されば私は喜んで貴下の御言付を守ります」と云つて、家來になつて、每日鮒の王樣の命令に從つて居りました。

けれども鯉は暇さへあれば、何う云ふ解か早い瀨の所へ行つては岩角から落ちて來る沫の中へ泳ぎ入つては流され、泳ぎ入つては流されして居ります。十日と經ち、十五日と過ぎますが鯉は鱗が取れても、早瀨へ行く事を止めません、來た時には奇麗だつた鯉も遂には見苦くなりました。鮒の家來共は不思議に思つて、馬鹿者だの狂者だのつて罵つて居ります内に鯉は何處へ行たのやら行衛不明になつてしまひました。

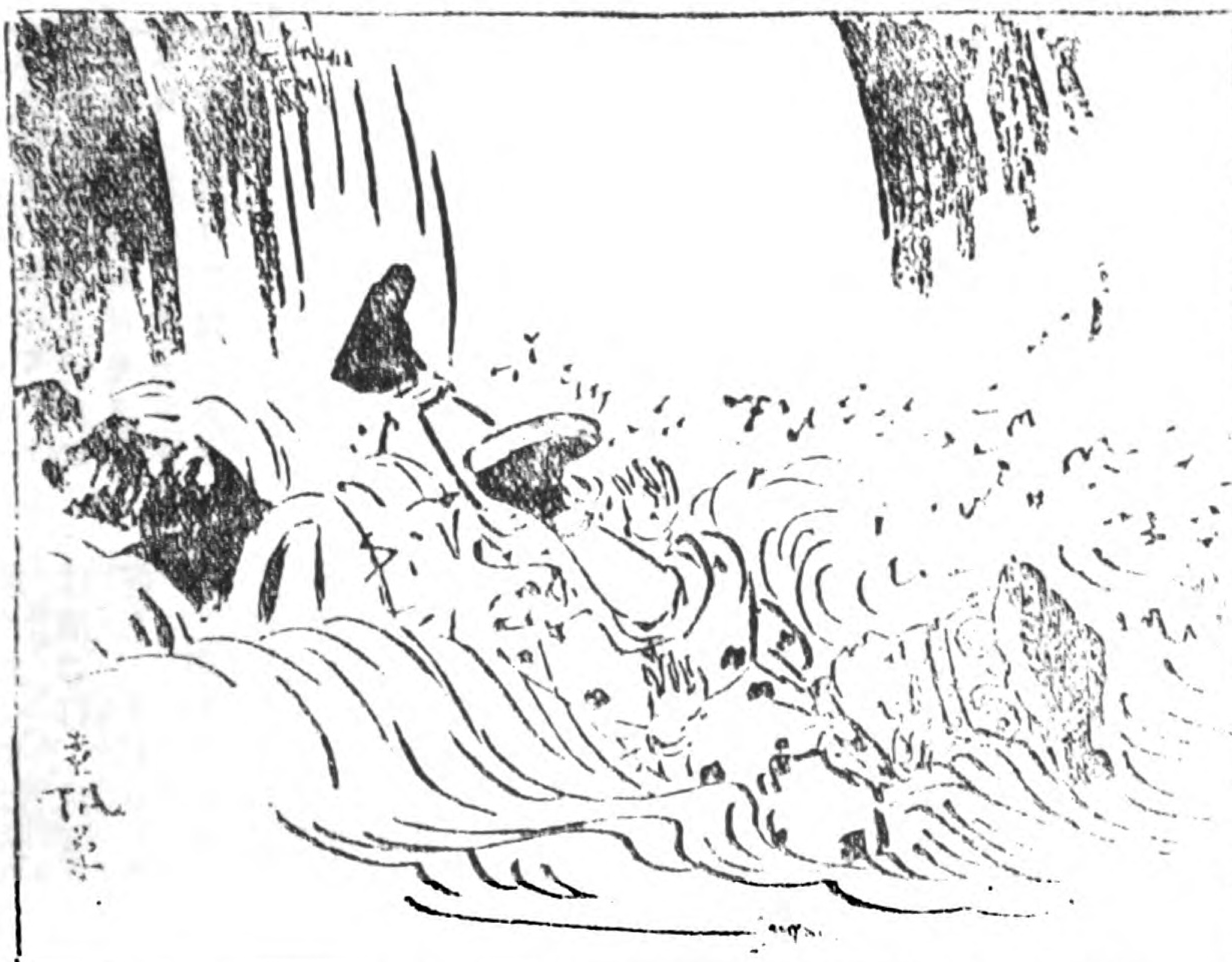
鯉が居なくなつてから二ヶ月も經つて、梅雨時に大水出がすると、上の方から一尾の鮒が體は傷だらけになつて流れて來ました。すると大勢家來共が集つて、色色と懷抱してやつと元氣を付けて休ませたり滋養物を食べさせたりして、元の體になつたので家來になりました、して二三日居る內に其の鮒が斯云ふ話しをしました「一の瀧の上には立派な瀧上宮といふ御殿があつて其の王樣は近頃來た鯉に位を讓られました。」

之を聞いて鮒の王樣は驚いて「其の鯉奴は此の方の家來だつたがどういふ解で王樣になつたのだ。」と問ひますと鮒が「それは三の瀧から順々に一の瀧迄上つたから其の御褒美です。」と云ひましたから鮒の王樣は又喫驚して、

「あんな大きな體の鯉がどうして瀧など昇れたのだらう」と獨語を云つて「此の方が行つた前にも家來になつて居たのだから、今度も屹度家來になるだらう、鯉に上れる位の瀧なら己れにも上れる」と早合點して、早速身仕度をして三の瀧の直下に行きました。行つて見ると上るどころかどうしてどうして瀧の勢が非常なもので渦の中へ卷き込まれて、息をすることも出來ず這々の體で逃げて來ました。

それで、鯉共は鯉が早瀬へ行つて迴らうとして怪我をしても止めなかつたのは瀧上りの稽古であつたといふことを悟りましたとさ。めでたし〳〵。

（評）瀧昇りの稽古と云ひ鯉の上樣と云ひ全篇を通じて好個の教訓談頗る面白く感じられます。



地

◎利口な娘と愚な娘

熊本市黒分町一番地　近野春子

夕飯が濟むと、いつも、お婆樣が色々なお話を、聞かせて下さいます。今夜も弟が、お話の催促をすると「數樣のお好なお話は明日、今夜は、姉樣にだよ」と云つて、こんなお話をなすつて下さいました。

ある所に、お美代と云つて大變感心な娘が居ました利口な性質なので、裁縫作法から手習其他の遊戲迄何一つとして、人より優れてゐないものはありませんでしたが、殊に心根が優しい女なので、決して、自分の才能を誇る樣な事はありませんでした。

けれども、埋れても、玉は矢張玉です。段々近所の評判になりました。

或る日の事、お美代樣のお宅に、お客が二三人いらつしやつて、お座敷では酒宴が始まりました。お美代樣はお母樣と一緒に、そのお接待をしてゐましたが、もうそろ〳〵暮れかゝるので、洋燈を、とりに立ちました。處が、どうした機會か、座敷の次の間で、足元が暗かつた爲か、誤つて、疊の上に置いてあつた硯箱に躓いて、箱は踏くだき、身は仰向樣に倒れました。此の物音に、お客樣は、皆目を圓くして見てゐます。大抵の女なら、どんなにか、騷ぐでしよう、だが、お美代樣は、靜かに座り直して、さて皆樣にその粗忽を詫びた末、こんな歌を作りました。「何事もかくべき筈の硯箱ふみかいたとて耻になるまじ。」ふみかくは、文書くとも、踏みかくともなるのです。あゝ何と甘い歌ではありませんか、お客樣も、その當意即妙に感心して了ひまして、此娘の名は、益々高くなりました。

こゝにまた、お美代樣の御隣りに、お藤と云ふ娘がゐましたが、これはまた、大層な莫連な女で、さう出來もせぬ事まで、自分より外に、上手はない樣に、大きな顏をしてゐました。こんな人に限つて、よく人の褒められるのを嫉むものですね。日頃お美代樣の評判のよいのが、癪に障つてならないのにもつてきて、歌の一件で、一層その名が高くなつたから、もう堪りません

「フン、それ位の事、誰でも出來るわ……褒むる人の心が可笑しいや。」と冷笑つてゐました。

今日はお藤さんの誕生日で、近所の誰彼が、お祝ひに來て、種々の世間話の末、お美代樣の噂が出ました皆感心々々といつて、褒めぬ人とてはありません。お藤のお母樣までが「どうです。少しは美代樣を手本になさい。」と云つて聞かせなさいます。とお藤はつと立つて次の間に出るより早く、故意と脛もあらはに、仰向に打つ倒れて、自分の腿の邊を、ガシ〳〵搔き作ら大聲揚げて「何事もかくべき筈の爪なれば、腿をかいても耻になるまじ」。と歌ひつゝ鼻うごめかして、立ち上りました。自分では、一生懸命上出來の積りでしたらうが、近所の人は、餘りの禮儀も知らぬ、馬鹿らしい仕業に、不興な顏して、歸つて了ひました。

お藤は、お美代樣のまねをして、大變な耻をかいたのでした。

(評) 眞似の仕損じこれに類する話は少くありませんが文章も手蹟も

なか〳〵よく出來て居ました。

【入】○あさ蜘蛛

ことぶき町　惠女

幸は今年九つ、音無しくつて虫けら一つ殺した事もなひ、それは々々同情深い娘、二つの年、鏡池の一本松の根本に捨てられた幸を、可哀相と思し召して拾ひ上げ八年の間手塩にかけてくれた母様が、どうした事か、つひ一月許り前からはめつきりお心が變りなすつて、口でこそは幸子さんと云ふけれど、實はどんなにくいのやら、酷く〳〵使ふのです。幸は餘の悲しさにかくれて泣いた事もあつたが、根が温順な幸故、なんでもハイ〳〵とよく云ふ事をきいてせつ〳〵と働いてゐた。

或る日の事、幸は例の樣に雑巾を持つて井端へ參りますと、昨夜雨が降つたのでバケツには水が一ぱい、其の中に少さい蜘蛛が一疋苦しんでゐましたから情深い幸はすぐに掬ひ上げ、露のない樣な木の上にソツクリ移してやりました。過日婆やが朝蜘蛛を見ると喜事があるしらせだと云つたから、きつと母樣が優しくしてくれるのかもしれないと一人で考へてゐた幸は、其日床に就いてから今日の事を繰返して見たが、やつぱり昨日と同じだつたので、婆やがいつたのはうそなのかしらと、思ふうち晝のつかれてグツスリ眠つてしまひました。すると間もなく後の扉がガチンと開いたと思ふと枕元で、幸子樣々々々と呼ぶものがあります、今頃私を呼ぶのは誰だらうと夢心地できいて居りますと又、幸子樣々々々とよびますから(ハーイ)と云て目を開きますと、不思議々々々、此處は廣い野原なのです、そして自分の前には、白衣をつけた天女が立つてゐてニコ〳〵笑ひながら、「幸子さん、私は今朝の蜘蛛てすが先程は危い命をお救ひ下さいまして誠に有難うございました私眞實は女神の侍女てす、私達は毎日女神の仰せにより蜘蛛に身をかへ、惡い虫共を平げに下界に行のてす」「して其女神のゐらつしやる處はどこなの」それは幸子樣、向ふの山の上にほんのりと桃色がかつた雲が見えませう、あれが椿のお宮と申しまして女神は彼處にゐらつしやるのてすそして先程の事をすつかり申上ましたら、それは感心早くお伴れ申せと、固く仰せつかりましたのでお迎ひに參りましたと云ふので

す、幸は椿のお宮とき〻何とはなしになつかしさ嬉しさは胸一ぱい。「では早く伴ていつて下さい」と申ました。この時天女は、さらばお伴れ申さう、と云つて天を仰ぎ何やら口の中に唱へますと、忽ち向ふの桃色がかつた雲の方から、フツワリ〱と美麗な絲で編んだ、ハンモック舞ひ下りました。サこれへお乗り遊ばせと云つて天女も幸と一所に乗りますと、又フワリ〱上り始めました、やがて椿の花で飾つた立派なご門の前に着きますと、アラ不思議、天女がかき消す樣に見えなくなつたと同時にドーンとすさまじい音がしました、すると不思議々々、花のご門は消え去つて目前にあらはれたのは一面の大鏡、小鏡――さて幸はどうしたらよからうと泣きくづれてゐるうちフと眞正面の大鏡に二つの顔がみつけました、一つは勿論自分の顔、一つはそれによく似た顔、アッと思ふ間に大鏡はバーンと二つに割れました、丁度此時五色の扉をさつと開いて中から出てきたのは先程の天女です。「どうもおまち遠樣、どうぞこちらへ」とみちびかれしは、白、赤、桃色などの椿の花で美しくかざり立てた御殿、お玄關には綾の羽衣を召した見るから氣崇いお方がゐらしつて玉をふる樣なみ聲で、「オヽそなたは幸ではないか、今は何をつつもうそなたの母は私です、そなたを御殿におきたきは濱の眞砂のかず〱つきねど、神の規則にそむかれぬ悲しさ、そなたは下界の人故に、こゝにゐてはかへつてそなたの爲にならぬによつて、とく〱下界に歸り、父にまみえ、母に仕へて一日もはやく成人なされよ、これこの玉は善惡さだめと云つて、善い事をすれば黄金色に輝き惡い事をすれば赤い色になるもの、これをそなたに遣す程に必ず〱わるい事はせぬ樣にと仰せられて、

運動會の見物

牛込　佐野貞子



消え〳〵水晶の玉を眞白いみ手から幸の手にわたされました。幸は只もう夢かと許り、いつ迄も〳〵こゝにゐたいのは山々ですが、性來悧巧な幸は始めてお目にかゝつた母樣のみ言葉をよくきゝわけて、いさぎよく實家にかへり、前よりも尚一層心をこめて父樣、母樣に仕へましたから、さすがの意地わるも、十日二十日と立つうちに、やさしい幸の心根にはつひに同化されて、今では親子もろとも樂しく暮して居りますとさ。めでたし〳〵。

（評）今回の應募者中には之に似た話が至つて多くありますがいづれも平凡なるものばかり其中でこの一篇がやゝ變つて居ります。

○石芋

千葉縣　高木芳江子

今こそ香取の浦は見渡すかぎり廣々としたる平野なれども、まだ香取の浦の開けぬ頃、下總の山の中に、芝美といふ池がありました、そして其村にお浪といつて顏形のよい一寸見てはいかにもよさそうな一人の娘がありました、この娘は、一人で暮らして居りましたが、中々の慾深者で、お深と云ふ綽名をつけられ、仲間はづれにされてをりました。

ある日の暮れ頃お浪は芝美の池で一生懸命に芋を洗つて居ると、同じ年頃の垢のついた着物をきた女の乞食が通りかゝりて、芋を乞ひました、慾深のお浪は「この芋は石芋だから食べられない。」といひましたけれどもかの女は何卒惠んでくれと乞ふて、立ちません、しかしお浪はふりむきもしないで慾芋を洗ひ終へて家に歸り、晩のご馳走にと急々と芋の皮をむき、鍋に入れて煮れ共煮れ共芋は石の樣に堅く、煮えぬので、お浪は大いに怒り芝美の池へ持つて行つて、池の中へ投げすてました。すると不思議なとには、石の如く堅く硬かつた芋は輕く浮びて小人の如くなり、聲を揃えて、

慾深お浪：：慾深お浪。芋を乞ふたは日蓮さーま、
お前の慾のふーかいを。癩さんとした日蓮さまを、
石芋とだーまして。芋をくれぬはお前の損、
われ〳〵石芋となーりしは。日蓮さまのお言ひつけ、
食はれぬのはお前のバーチ。」

と謡ひました。

それを聞いた慾深のお浪は、居ても立つても居られず傍らにあつた棒をとつて池の深いのも少しもかまはずその小人を打たんとして、池の中へ飛びこみ、そのまま水の底ふかく沈んで、悲慘な最期を遂げましたとさ。

（評）この口碑は弘法芋の話に似て居ますが口碑研究の上から見て甚だ趣味があります。

和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は丙種に據る。

天

心いま夜より醒めぬあまたゝびおびえて泣きし夢をまた見ず

安房　露子女

地

わが罪のすべてをまたはかたはしをつぐなはんとし立ちけりされど

香川縣高松市西通町三九九　香川育江

人

思はるゝ人も戀せぬ人の子も寂しげにある秋の雨の日

磯田ちかつる

秀逸

○　青森縣　馬場ちよ子

戀人よ君が心は夕月のすがたに似たりかげによらまし

○　福島縣　松本眞子

月の夜は海に黄金の橋かけて天少女まつわだつみの神

○　伊藤賤子

おぼらかに雨の玉琴搔きならす音としおもふ森の夕立

○　神田　小倉雅子

君を得し日は一國の王となる心となりて天地を見る

○　巣鴨　鹿子花江

山姫の御手にとらせる白銀の梭のさまなし鮎の子のぼる

○　福井縣　片山千里

美しき磁の盃にいと甘き香あふるゝ水持てまゐる

○　兵庫縣　富士田章子

須磨の浦朝な〳〵の濱ありき淡路の島に面なれぬわれ

○　安房　内木美代子

消えやらぬおんうつり香ぞうらめしきかつぎし衣はぬぎてすつれど

○　山口縣　葉守淑子

藤の花春逝く水の欄による人うつくしき京の雨かな

○　新潟縣　一葉子

さしのぼる旭にうつる蜻蛉の瑠璃の羽衣うつくしきかな

○　千葉縣　高木芳江子

すぎの木の幾千代經しか香取なる神の森こそ神さびにけれ

○　富山縣　しらみね

白川女花よぶ聲は近うして花かごかすむ加茂川の橋

○　陸奥　吉田はな子

ありし日のみ髪のたけを思はずや百合の花見る尼君よ

○　伊豆　堀井りゑ子

立ち迷ふ天城の山の朝霧に太古の野さへおもほゆわれは

○　水戸　重子

雨晴れて小蝶とぶなり春の庭牡丹は散りてあとなけれども

○　淺草　百瀬白蓮女

白妙の羽衣かろく胡蝶舞ふ夕にたまふ金のかんざし

○　日向　鶴丸輝子

あか／＼と沈む夕日の海にして鯨はありぬいとおほらかに

○　岐阜縣　日野歌子

卯月盡いつしかきたり君が家に牡丹くづるゝ夕べとなりぬ

○　近江　大角うた子

天にさく大白蓮の花びらの下界に落ちし山の湖

○　上總　山口以久子

いとさやにそよぐ若葉を吹く風に目さめにけらしあかつきの君

○　大阪　山内溪子

千人の少女に似たる牡丹には皆燭つけぬゆく春の殿

○　上總　春枝子

巨鐘はいともさびしき音たてゝやがて秋野にひろごりてゆく

○　鹿児島　俊子

白き額うなだれふして五月雨にさめ／＼となく薔薇の花よ

○　芝　八重子

春姫の小袿の糸の地に生ひし若草ふめばよき音のする

○　上毛　須藤あさ子

朝霧は皆逃げゆきぬ日の神が放つ黄金の征矢に射られて

○　安房　池田次子

ふるさとはつゝみの柳うちなびき春雨かすむ日とぞこひしき

○　長野縣　野中泰子

花あやめ白とむらさき交り咲く池にとなりぬひな罌粟のはな

○　三重縣　杉田たか子

草むせるわが住む小家をあかつきの霧はたちこめてけるかな

○　滋賀縣　池田芳子

死よしぞけ老もひれ伏せ息ひてふもの知らぬ駒ましぐらに駛す

○　香川縣　向取信子

すべて町銅鑼打つ中に玉琴の一かきの音と君が聲きく

○　讃岐　吉良静子

山村の木立に小雨たそがれて野にこほろぎの啼く夕かな

○　備前　依田美代子

要もなき過ぎこし方の憧れに日ねもす額をもたげぬ人よ

○黄昏の風に牡丹の花ちりて蝶の眠りのさめにける哉

下野　手塚妙子

○山清水庭にひきたる里住の君が家こそこひしかりけり

長野　小林かつの

○思ふことはむとするにあらねども君にまみえて胸をどるかな

盛岡　四戸節子

○花ゆたに道をうづめてわが胸はつゝみうつなりよろこびの座に

千葉縣　小倉すみ

○君とわれ別し路に百合咲くやあざみひらくやふるさとの野

大阪　山内溪子

○わが少女蠶飼なしつる虫はみな球となりけり白銀いろに

千葉縣　吉岡菊子

○母君の手づからたまふ白妙の衣をきれば夏は涼しき

山口縣　吉田美代子

夏の宵　大阪　四戸政江子



○あはれなる胡蝶のむくろまつるとてわが妹は墓つくりゐぬ

根室　白[illegible]

○満月の光りに文を認めて戀しき友に送らむわれは

山口縣　小野本貞子

○庭もせに星の精なる紫のみけしの君の花あやめさく

横濱　荒井とく

○蟲の音にそゞろ戀しき夢を見て秋の一夜をあかしぬるかな

下總　鈴木はる子

○露と花今朝なかぎりに泣きもゐぬ露は野原へ花は御墓へ

陸奥　ふみ子

○憧憬の十九の年も半ば過ぎ今や我世の夏來りける

牛込　近藤傚文子

○花とならば君と我とは幸あらむ一つの根して水に咲くべく

常陸　酒井貞子

○夏くれば園生の木々の梢より野山につゞきわかみどりして

茨城　秋山秀子

○夕ぐれやみ寺の鐘の二ツ目にほろりと散りぬ木れんの花

南葛飾　紫[illegible]子

○衣洗ふわがえ少女の黒髪になり〳〵かゝる青柳の糸

下谷　[illegible]子

○心枯れ戀の火枯れあゝ遂に空となるべきわれ〳〵の戀

日本橋　松岡[illegible]子

○わが通ひ路月は見えれどしら〳〵とうの花さけり川ぞひにして

兵庫縣　清[illegible]子

○　巢鴨　片岡比良惠

梅雨霽れや柳のかげに傘ほせる朝目すゞしき川添の家
○　千葉縣　三森ゆき

鐘鳴りぬ日輪西にかたむきて門の折戸に君思ふ時
○　福井縣　吉田歌子

菖蒲咲く里の小川の五月雨にわれ馬洗ふ小傘をさして
○　靜岡　中村三千代

美しく清く貴き我姉によく似る花の名をとひにけり
○　越後　原　つれを

すぎし世をおもひ見ぬ世をまたおもふ悲しき胸に鐘響くかな
○　茨城縣　山下百合子

君と行く朝の森かげ日はさしてこぼるるものか白樫の花
○　信濃　駒澤ひろ子

君が家と我が家の間の紫の山にほのめく夏の夜の月
○　大阪　田中れん子

曉星の落ちて化しては花とさく白百合なればいともたふとき
○　伊豆　高木喜代子

春風はわれの浮べし征舟を君立つ岸の柳によせぬ
○　伊豆　小澤香芽子

何となく物憂き秋の夕にゝ勇ましく鳴く蟲の聲かな
○　鹿兒島　山下敏枝

海涼し玉の濱寄り白銀の月は昇りぬ舟の底に
○　信濃　安坂富美子

雛棚の古き雛の一つ一つ代々の御親の面しのばるゝ
○　秋田縣　佐々木良子

過てり我過てりかくばかり罪りの世に戀をせしかな
○　長野市　小林藤子

京を西へ松原三里日は暮れて見かへる方に淀の水ゆく
○　下野　梅澤哲子

ゞ地にたゞ一つなる日はおちて我が胸のその常闇となる
○　熊本縣　金子片枝子

ましろなるしゝむら思ひ紅ひの血しほおもひぬのろひの心
○　安房　伊藤こう子

わが山の青葉より見ぬ糸のごと白き大河の末の細りを
○　橫須賀　佐藤花月

身にしみて哀の聲も深かきかな雁なき渡る夕暮の空
○　京都　段谷のぶ子

ひんがしの山のみ寺の鐘鳴りて京の街みな霧の中なり
○　熊本市　近野春子

亡き母の魂祀るとて佛前にはらから集ひしめやかに居ぬ
○　群馬縣　森田とし子

ひばりとぶ野にたゞづめば何となくこひしき人の呼ぶかとぞ思ふ
○　下野　黒須琴子

神のます高き御國にさく花のちりみだれてや雪と降るらん
○　京都　しづ枝

あめつちに黒雲湧きて夏の海龍とびかひぬすさまじき朝
○　上野　津久井照子

水樓や鼓打つ子の袖搖れて夕月涼し蓮の香の風
○　本所　秋山欣子

胸といふ園に培ふ花の香に馴れよる醜の鳥を逐はゞや
○　新潟縣　山田みさほ

憂へつゝひとりみ空を眺むれば星は笑ひてわれをなぐさむ
○　群馬縣　梅　枝

朝ぼらけ駒に打乘り野を行けば鶯なけりなつかしきかな
○　尾張　むらさき子

一もとの青柳長う糸垂れて渡呼ぶ聲のどかなる里
○　濱　女

美しき神の境をはぐれ來し魂にも似ずや蟋蟀のなく
○　峽　よし子

なげきつゝ此の世を去りし兄君の靈魂に似たり曉のほし
○　若狹　津田紗汀

天上に神のかなづる琴の音をきくとしおぼゆ君こふる時

埼玉縣　みやまぐさ

○兄の家母なきちごのたはむれに物言ふ様を涙して見ぬ
京城　ゆかり女

○夕顔の花にむすべる白露をかゞみとすらむ月姫の君
安房　涼み舟子

○山吹の花散りかゝる古井戸に河鹿なくなり玉川の里
丹後　小倉桃花

○鐘の音は湖渡りかなたなる大野の原にうすれゆくかな
下總　高木智香子

○旅人の宿かる頃や夕がほの花はましろにたわ／＼とさく
鳥取縣　桑本きさ子

○春の音は少女の胸にこだますとわれはおもひぬ君が見る時
南葛飾　ほたる草

○君ゐます西をながむる夕ぐれの青葉にちかき茜雲かな
上毛　元子

○木の本にゆきにし人をしのぶればこぼるゝまつの雫つめたき
上總　松崎かつ子

○手にもてる花の名たづね幼子にわらはるゝまで老ひにけるかも
信濃　あい

○思ひてのかなしき夕人知れずおばしまによりおん歌ずしぬ
長野縣　内山けさよ

○幾少女絵日傘さして立てるごと美くしきかなひなげしの花
神戸市　岡本靈子

○うすくこく海原遠く暮れ初めておつる千鳥の影の小さき
栃木縣　高山かれ子

○逝きませる母のめでたる花あやめいざ手向けまし白と紫
安房　高梨蕗子

○蓮の葉にたまれる水に月の輪のうつりて涼し夏の夜の家
相模　鍋田節子

○我戀は夕立はれし水ぎはのあやめに似たる紫にして
丹後　神田春子

○なにとなう君のきまさむ心地して窓に灯置きぬ嫂遠の家の
播磨　おみな子

○あさあらしさと吹きいりて藤波のかゝりしもやのかげもとゞめず
石見　中村富江

○夏きぬと告げてなくにもあらねどもそれかとぞしる郭公かな
相模　濱田紺子

○春雨の俄に晴れて廣き野に面白ふ舞ふいろ／＼の蝶
安房　月岡一枝子

○ひなの子が桃われ髮に花させば蝶ぞとびかふこひしきさまに
岩代　梨花

○おもむろに夕ぐれつぐる鐘なりぬ今更のごと人のこひしき
信濃　伊藤利子

○夏木立うす紫にたゝへたる池をへだてゝ時鳥なく
伊賀　山村龍子

○ふたたびは思はじ見じと自らの誓へど悲しまぼろしの君
常陸　はま子

○ぬるての木松の老樹に日の白み夜ぞあけにけれ秋山の家
伯耆　佐伯くに子

○相見ては默し勝ちなる君とわれ少き息の音も迎ふまで
三河　森田春子

○姫君のみぐしおろして結ばれし庵たづれぬ水無月のころ
陸奥　吉田はな子

○みちのくの岩城の山のこと／＼く圍く旅に春の行くかな
伯耆　佐伯くに子

○かへり行く君が姿の影も消え我が立つ丘に霧かゝるかな
豐能郡　寺部君子

○夜の森の葉と葉とすれぬ覽の神のさゝめきとしも心おのゝく
新潟縣　川崎良枝子

○いつしかと培れたる戀草の花咲く日なりおぼつかなくも
岩代　花阪文

○菩提樹の若葉そよ風はら／＼と銀の雨ふるおん寺の晝

○　千葉縣　千木松　花月
五月雨や思ひ疲れてとろ〳〵とひろさへ見ゆる夢の君かな
○　大阪市　登　喜子
常磐なる松は今なほ立るなり君と相見し夏の日の丘
○　神奈川　磯部　しげ子
若葉山沖の白帆のほの見えてそゞろあるきのすゞしき夕
○　本鄕　朝井　松子
黒き雲低うおほひてわだつみは旅にぞあれぬ龍天にゆく
○　石狩　竹田　もと
たらちねの御魂やかけり見ますらむ大和をみなの道にまよはじ
○　賀茂の里　江　舟女
額垂れし髪のもつれ毛指にまき夢の香たどる少女子を見し
○　豐後　瀬川　小百合
遠ざかる船にゐませるたらちねの名殘りぞのこる雲の一ひら
○　丹後　み　れ子
姫百合の影を宿せる谷水に夕我顔そとうつしみぬ
○　仙臺　富　美江子
朝夕に愛でし小池の花あやめ誰が手折りけんあともあらなく
○　な　み子
しのび音になくほとゝぎすなれもまた戀のおもひにたへがたきとや
○　福井縣　吉田　梅子
卯の花の白き戸にいて夕ぐれを野に風きけば人の戀しき
○　豐後　小川　稲子
亡き人の後忍ばれて幻影にさむれば小き秋の灯ぞある
○　奈良縣　田村　みどり
くまもなき月の光に見上ぐれば高くたふときおん寺の塔
○　大阪　木村　花子
白川の少女やさしみ此の朝も姫百合召しぬあるじの君は
○　泉南郡　金田　芳子
天風に高空翔ける雲すぎて四つの絃の音すとおもふ
○　神戸　櫻井　白蘭

寂しらに鳥鳴き渡りにび色のうすき島見ゆ北の夕海
○　新潟　丹藤　春子
古鄕に君はきにけり我庭の手植なでしこしらつゆぞおく
○　三重縣　北村　初子
さがみのや江ノ子の海辺に妹と遠にたゞよふ船歌ふかな
○　越後　河島　和歌波女
心ありて聴けば身に沁む心なくきけど身にしむ秋の夜の風
○　茨城縣　永井　誠子
みづうみは朝霧こめて夢の如木の間にうかぶ箱根山かな
○　大分縣　遊の舎　操子
おこたかに社の前にぬかづけるかんなぎにちる山ざくらばな
○　茨城縣　大久保　をさむ
沖の帆を染めし夕映うすらぎて月に漂ふ信太の浮島
○　大阪市　若宮　八重子
春雨の幾千條の絲の糸露よびけよき音に鳴らむ
○　群馬縣　中里　東雲
朝風や春の海行く帆の七つ一つ一つに霞むをかしさ
○　香川縣　山地　繁利子
道の辺に殘れる露と思ひしは春の野辺なるすずしろの花
○　野町　角　杏子
あゝひと日君を見ぬ日ぞかなしさの胸に生ふ木を風どよもしぬ
○　近江　大角　うた子
河鹿きく絽蚊帳の中に月さして青葉薫ずる甲州の宿
○　熊本縣　田山　豐子
道標昔の柴のおもひでを我にささぐや故鄕の道
○　岡山市　池田　芳子
かゝる夜はまろきの舟にうちのりて星の女神や海をこゆらむ
○　秋田縣　今野　泉子
遠くとも君さへ心かはらずばまた見むと云ひわかれぬされど
○　筑前　田中　とよ子
君思ふ又君われを思ふらんかくはたのめどことたらぬかな

○京都　村上きよ子
紅さうび手折る少女のこゝろ根を母しるらむか春の雨の日

○石狩　元子
故郷は櫻散るらん行く春を蝦夷に雪飛ぶ樣を見る哉

○大阪　山内溪子
宵月のもとに笛ふき君とわれ相行く
岸の葉ざくらの道

○千葉縣　吉田白菊
夏の帝彩の繪筆にかきたまふ天の繪
卷か夕榮の雲

○駒山　笛浦子
胸に秘めし謡えうらみを笛にこめて
わがふく夜を村雨ぞふる

○伊豫　曉子
露ふるふ小とり美くし雨はれて柿の
こずゑに虹かかるとき

○福井縣　羅子
山里の垣根ににほふ夕顔に細く匪け
り夕ぐれの露

○奈良　武林夙子
魂まよふ沈のけぶりの一搖ぎ庭の山
茶花風なきに散る

○山城　森川靜子
清き瀨の月うつくしき夕ぐれの野に
われきゝぬ山ほとゝぎす

○神戸　靜代ともへ
春のきて庭のさくらのさくごとに袖しぼりけりともなおもへば

○沼津　渡邊とよを
戀君の身に幸あれと我はたゞよろづの神にいのりさゝぐる

○愛知縣　鈴木しげ子
夕がほにわがしをり戸はとざされぬ今宵の月は東屋に見む



無心　　名古屋　寺澤信子

○岩代　花蹊女
夏の日や陣に立ちたる若武者の母衣のやうなる雲の居るかな

○阿波　西野花葵
日は西に柑子の色の雲映えて夏の磯邊は今暮んとす

○山城　文子
柴のいほ尾花なびかす秋風に山の小
鹿によたゞなくわれ

○佐渡　谷川桂月子
君が家は此頃遂に見えずして青葉若
葉に時鳥なく

○磐城　酒井信子
あかつきの夢ははかなくさめけるを
かゞみにゑめるわれはづかしき

○下谷　無名子
祇王祇女君こひますや朝露のこぼる
る道に花つみたまふ

○岩代　すゞ子
蕨の根あさる翁の肩しろし松葉こぼ
るゝ山かげにして

○豐後　阿南しのぶ
月影の凉しく宿る草村に聲もさやか
にくひなしなく夜

○西多摩　森田しま子
我髮の後ろ引かるゝ心地してまた顧
みぬふるさとの丘

○岐阜　泉しげ子
森かげのねむの花ちる雨にぬれ君はきましぬ夏の夕ぐれ

○下野　瀧澤秀子
雨雲は羽黒の山に舞ひ洒きて麓七村夕立ぞする

○伊豫　福井蘇美子
ほの白き菜の花道の薄月夜うたをうたひぬ君とこの子と

愛知縣　永田舞鶴子

○天人のくだると見えし靄の原いろ衣見えて漂う消えゆく
芝　八代八重

○枯野行けば亡びの穴の地に潛れて吾を待つごとき神無月かな
大阪　大神美枝子

○春風に桃われ姿美くしき君は十六なでしこの花
土佐　美枝子

○木の葉ちる峯の嵐の音にしもをじかなくねもまじるあはれさ
樺太島　にしき木

○忘られぬおもひでとしもなりにける辛き運命を語りしその日
下總　神田くれなゐ子

○夕闇はわびしや君が疑の御使のごとわれを圍れば
青森縣　久保石子

○草むらの白百合手折るをとめ子は美しきかな袖に風ふく
岐阜　泉しげ子

○若ければ夢をわれ見ぬ黒瞳人顔白く戀によき國
日向　甲斐玉歌子

○美くしき人を戀うなる少女とも彌生の空の風かをりふく
大阪市　古川紫雲

○紫の組房長く神の御手落ちてゆるぐや藤波の花
若狹　早水園玉

○すゞしうも朝の風ふき古池に藻の花ゆらぐ夏ともなりぬ
尾張　小笠原秋波子

○見ゆるもの皆なつかしや菜の花に蝶のとび交ふ春の夕暮。
上毛　納尾子

○昨日今日秘めんにたへぬわが想あゝいかにして君に告げまし
若狹　田中貞子

○よべの雨に崩えし若草あたらしき香さへ色さへなつかしきかな
静岡縣　孤讀女

○いくそたび父にいかられ母上になだめられしもきかざりきわれ
大阪市　坪谷良枝

○君と我袂別ちし其宵ゝ月かげ清く水清よかりき
若狹　山田てつえふ

○わが什を初めて見たる日の心地せちに覺ゆれ木犀の花
函館　藤本鳥羽子

○海原に月の漂ふ心地して君を想ひぬおぼつかなくも
徳島縣　野道子

○庭の風に藤の花ぶさ影ゆれてやすらひし蝶そと飛び行きぬ
岡崎　不二子

○兄逝てこゝに三年の夏は來ぬ窗開く今宵われくるほしき
紀伊　木下はる子

○鳥歌ひ花咲く春に逢ひぬれば思ひ絶えたる人もこそおもへ
神戸　みなしご

○美しき繪巻を見しと思ふかな都はなれしひなの少女は
福井市　長谷川英尾

○節句の日や緋桃の花に歌そへて琴のおん師に參らせぬわれ
奈良縣　花井みれ

○眞帆あげて逆のぼりゆく木曾川のながれの水に夏の月うく
静岡縣　河村咲子

○彼の君と語りし去年の日となりぬ想ひ出多き水の音かな
羽前　益屋まさ子

○稲妻のひとひらめきに宵闇の野のあなたなる君が家も見ぬ
群馬縣　須藤みどり子

○ほとゝぎすほのかに鳴きてしら〳〵と花より明けぬ卯の花の里
福岡　兒島八重子

○あふち咲くかげにいこひて旅人のつかれやすむる野のまひろかな
相摸　佐藤花子

○夕月や小艇駛させて五六人籠の鮎焼く都人かな
周防　静枝子

○うす絹に玉をつゝめる心地しぬおぼろ月夜に君こしを見て
福岡　福田靜月子

○春雨のそぼ降る夕亡き君をまぼろしに見て涙ぬぐひつ

○三重縣　松本幸枝子
磯づたひ涼しき月の影のもとひらふも嬉しわすれな貝を

○大阪市　梅女
紙燭してしばしわが立つ渡殿に木犀かをる薄月夜かな

○熊本　江添ちじ子
杉の森苔の小道を一人ゆけば小さき社に白鳩のとぶ

○神田　杉本朝子
今日見るは昨夜にもまさる夏の月君と逍遙ふ菩提樹の影

○千葉縣　吉田やす子
さくら散る夕靜けき山里の御寺の鐘ぞたふとかりけれ

○秋田縣　加藤うん子
鐘の音は遠き野こえて里にきて我身寂しくあれよとし鳴る

○若鮎
春の月われらが夢の青じほとうづ卷く中にやすらひてあり

○德島縣　よし野
一聲に笠傾けし甲斐もなくまた啼かぬかな山ほとゝぎす

○岩手縣　横澤きよ
三日月のほのかに青き森かげの小田になくなる夕蛙かな

○長崎　溪花女
音もせば消えむばかりの淡色に朝の月ある湖添の森

○常陸　立花芳香
よろこびに耐えぬさまして青葉姫舞ひぬ踊りぬ風吹くまゝに

○長崎縣　葉山やえ子
大わだを行きかふ船はふく風の心ひとつにまかすと云へど

一つ家　大阪　しげ子



○大阪　今西こゆき
遠つ世の囁き聞きぬ森の道こずえの風と水のせせらぎ

○豊後　菅原芳子
ほととぎす卯の花めぐる野のはてのわが古里の眼に見ゆるかな

○若狹　瀧本なみ子
秋姫の玉のかひなの輪にくまむ瑠璃色よろし朝顔の花

○相摸　伊藤英子
わが里は相摸の國の果のはて境川に鮎子くむ里

○赤坂　川島千鶴子
玉笹にこぼるゝ露も黄ににほひ今ぞさかりの山吹の花

○日本橋　東條桂子
鐘の音のひとつひとつにもや晴れて青葉のなかに山門見ゆる

○豊後　菅原芳子
千よろずの雷落つる音としも遠き暴風の海の波きく

○福岡縣　笠間きの
誰が爲めにかくは床しく匂ふらん主なき菴の白薔薇の花

○攝津　瀧本清香
別れ來て何かなしくもあられども人の命のさだまらぬゆゑ

○奈良縣　福西田鶴子
やむ君の慰めにひく箏の音に心止むらん空行く雲も

○滋賀　磨志緒
月の夜や故郷しのぶ人きけと一聲なのる山ほととぎす

○上總　森婦美子
亡き母の面影に似てなつかしきしら菊にふる秋の村雨

短篇小說

小栗風葉先生選



△規定　純潔清新なる短篇小説を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

天

○隣り合ひ

本所區外手町六十一番地　田中久子

掻巻を胸の邊り迄そつと掛けて上げて、私はすぐ椽へ出た、糸さんはよく眠つてゐる。

雨霽りの眩しい位に明るい日だ。桃の葉や、柘榴の葉が水々しい色に輝いて、六月の初めは氣持がいゝ。

私はいつまでも惘然椽先へ立つてゐると、垣の下からちよい／＼と草箒の先が覗く。そして小さな青い草へ柔い泥を塗り付けては夫を押し倒して引込む、と又すぐ先の方へ出て同じ如にする、垣の外を掃いてらつしやる叔母さんには中の草が見えないのだと、思つてゐるうちにガチャンと強くバケツを置いたやうな音がした。

「雨が霽りましたら直もうお暑い位ですねえ」皺枯れた齒の無い人の如な聲である。「さよですよ」と云つて叔母さんは僻て、コト／＼履物を石の角へ打ちつけて入被る。隣の格子のカラリとあく音、雑巾を絞る如な音、續いてゴシ／＼格子を拭いてゐるらしい音がする。「どうも雨が降りますと格子が汚れましてねえ」

「ほんにねー―もうから年を老りますと一つでも用を減らしたい位なんですから」と云つて厭な氣持の起る聲て笑つた、そして直、「もう代りさへ出來ませば明日にもお暇を頂く心意に成つてをりますんですよ‥‥悴がやつとまあ、家を持ちましたから」「おやまあ、夫はおやあもう結構ですね」「へえ。十九に成ります妹と二人して居ますんですよ、早く歸つて來て貰ひたいつて待つてますんですけれどね、此方がさう行かないものですから‥‥あなた、今はもう中々、若い者も奉公するのては少ないんですからねえ」「さうでせうねえ戰争から此方、色んな内職が出來ましたから」「夫もねえ、お給金次第ですよ、私なんざあ只もう食べさせて頂きさへすりやいゝと思つて居ましたんですからねえ中々どうして若い者があなた、」と高聲に賤しい笑ひ方をした「私の娘なんざあ小さい頃から縫箔やへやつとゝ

いたものですから、今ぢやもう一人で立派に生活てゆける腕が出來ましてねえ、總領の方も十一から大工さんへ年季を入れさせたものですから、二人共ちつともお金かけずてどうにか彼うにかなりましたんですよ」得意さうに嗄れ聲で笑ふ。

「もうあなたも御安心ですよねえ」と叔母樣の聲に泌泌羨しさうだつた。「ですからもう此麼業をして居なくともどうにか食べさせて貰へますから早く歸りたいと思つてね……。夫おや阿母さんの歸るまで仕方がないからつてねあなた、妹が御飯の仕度をして兄を出して了ふと自分で裁縫を習ひに出掛けますんですよ、今



は縫箔の方は閑ですから……あゝ、」とさも嬉しさうに一息に喋り續けて了つた。

「本當に羨しい」と云つて叔母さんは又履物の音をコト〳〵させて入被る。

糸さんの聲がしたと思つて振り返ると眠つてゐると思ふのに目をパッチリあいてゐた。

「あら、眠つてたんぢやないの？」と枕元へ座ると、頭をふり乍ら「厭な母さんだ。」と險しい目付をして壁の上の叔父さんの大きな寫眞を見入つてゐる。私はうるささうな前髮の毛を指で搔き上げて上げ乍ら「誰なの？」「お隣りの婆やよいつもあの話ばつかり」と力を入て此方へ向き「夫りやあ

ね憎つたらしい婆さんなの、自然に曲がらうとする腰を無理に曲げまいとするものでね、それやあ可笑な形、そして手をかう」と後へまはさうとしたのが旨く行かないので、後へかう突張つてひよこ〳〵歩いてるのよ、それやあ可笑な形。」「さうホヽヽ、其婆さんなら見てよ私も」「さう憎つたらしい顏でせう」と糸さんは小氣味よささうに笑つた。一昨日私が此家へ來る時一足先に門をは入つたのが其婆さんに違ひ無い、糸さんの云ふ如に風呂敷を持つた手を後へ突張つて、歩き難さうだつた、白い方が多い髮を下の方へ小さく丸髷にして、よくは見なかつたけれど顎の骨の四角に張つた大きな顏、何でも口をうすくきつと一の字に結んでゐたやうだつた、私の前をひよこ〳〵歩いて、垣の上から庚申薔薇の濃い小さな花が幾つも覗いてゐるお隣の家の格子をは入つた。

小さい其丸髷を思ひ出して可笑しく成つたので「ホヽ」とづれた掻卷を又胸迄引上げてあげる、「お金をつかはないて子供を成人させたのが何てえらいてせう、ねえ久さん。幾度云ふ事だか知れないのよ、家の兄妹も丁度年が同じだのに未だ皆勉强なんぞして居るものだから、必と意氣地が無いと思つてるんだわね」と糸さんは枕元に積んである洋書を自烈たさうに上目て見た其處へ椽から叔母さんが上つてゐらしつた。何氣ない風に鳥渡糸さんを見て茶の間へ通らうとなすつたが糸さんが險しい目をして見て居たので、「あの婆さんの話はきまつてるね」と言譯らしく云つて「餘程嬉れしいとみえるんだねえ。」糸さんは厭な顏をしてだまつてくるりと彼方を向いて了つた。隣りの格子では、まだガチヤ〳〵バケツの音がしてゐる。

何事にも低い所に滿足して、其身を無上な幸福者と信じて居る。然う云つた婆が世間にはよくある。幾干ても趣味理想と云ふやうなものに憧れて居る若い人の目からは、此程醜い、淺ましい、忌々しい惡い者は無い。一篇は此間の消息を寫したものだ。そして成功して居る。輕い筆づかひも手に入つて居る。（評）

地

○女氣

靜岡縣　きし女

私は五六間先からサツサと足を早めて祉殿の横手の椽に腰を下した。後れて來た數男樣は私の前に突立つて身動きもしない。私は星を數へ始めた。『冷淡だなア』泌々いつて數男樣は腰を下した。ひどく接近いて並んだので左の肱が痛い、數男さんは右手を私の膝の上に置て左手で自分の腮を支へながら深い思ひに沈ん

て居る。私は今夜は雖然と片をつけねばならぬと思つた。『利さん！君は僕を男妾にしたんだねッ』『男妾？』私は此語が異樣に聞へたので、こう鸚鵡返しに言て數男さんを見た。闇に四ッの瞳がピッタリ合つてそして動かぬ。『わからない？男妾つて云のは女の任意になる男をいふんだ。丁度僕を見りア好い僕が好い手本だ僕の如な意氣地なしの馬鹿野郎が得て男妾になるんだ否！されるんだ當世の女にはね利さんの如な筆や口でサンザ巧事いつてお腹の中で嘲笑つてゐる奴が澤山あるよ其樣奴はね男の狂ふのが面白くつてならないんだ宛然人間ぢアない獸だ！アニマルだ!!』數男さんは闇の中から石を拾つて力任せに地面へ打つけた。石はコチンと音を立てヽガサッと叢の中へ撥返つた。其時私は左樣いへば自分もアニマルでない事もないと思つた。けれども自分の心情を巧みに讀み終せた數男さんが癪に障つてならぬ。これは嘘にも反抗いて遣らねば胸がすかぬ。『男妾つてまあ其樣のけれど私何時貴郎を男妾あつかひしました？氣も知らないで……いゝのよ私いいわ……澤山お苛め下さい』『だつて左樣ぢアないか！あれ程僕等の戀の意味ある事や靈の悠久な事を語り合ひながら第三者の言葉位で直ぐこれなんだもの、實に女心なんて分らんものはないなア！』『分らない事無いわ一寸も無いわ！だから私理由をわけてお謝言したぢアありませんか、どうせどうせ遂げられない愛なら今のうちにつて……』『それが分らないといふんだ戀の神髓に觸れた者なら、懸命の覺悟は屹度持つてゐるよ、それになんだ！こんな微細な障害に變心するつて!!』『だつてそりア……』『宜しッ！もう聞かん!!』數男さんはすつと立ち上つた。葉を洩る月影を浴びて凄い程顏が青い。泪の跡も瞭然と見える。私は何がなし可憐と思つた。と渤然と血潮の煮りを覺えて云ひ知らず懷かしく又名殘惜しく思はれた。『アッ一寸！私が惡かつた。』泪が我知らず流れ出るので手早く顏に袂を當てながら『そんなに怒らないかつていヽわ。私が惡かつた。惡かつたわ。』數男さんは再腰を下した。アーと吐息を長くついて泣いてゐる。私も無暗に泣いた。『分らん！實に分らん！』數男さんは再立つた。そしてよろよろと一尺ばかり退つて腰掛けた。私は愈々悲しくなつて縋り寄つてこう言た『私此度こそ神かけて誓ひます！今夜の事は水に流してね、其樣怒らなくもいヽわ私が惡かつたんです。何卒何卒ゆるして下さいな？いけなくつて？』と數男さんの膝へうつ伏した。數男さ

んは私の背へ熱い熱い呼吸をかけながら『屹度！利さん!!』と重い調子でいつた。『え〻』『ぢア利さん死位の覺悟はあるんだね？』『え？』『この愛がね如何してもね、遂げられない時には、何時でもどんな時でも死ねるんだらうねつていふこと！』ハッと思つて、私は嫌惡と恐怖の情に思はず身内を戰かした『死ねる？』『ええ』幽かに言つたが悔恨の泪がハラ〳〵と落ちた。そして良心の痛罵の叫に堪へられないで聲を立て〻身を震はして泣いた。『利さん！最早分つた全然分つたよ僕うれしい!!』ア、數男さんは此泪を誤解してゐる誤解してゐる。

ツルゲネフに見るやうな强い女性を書いたものだ。好んで男子を弄ぶが、弄ばうとして弄ぶては無い、愛したいから愛する棄てたいから棄てると云ふ極く情熱的な、しかも意の强い、拘りの無い女。唯多情なのは醜てあるが、是には寧ろ犯し難い女性の威嚴がある、ブラウドがある。然し此作は其れを書いて充分成功しては居ない。所謂複雜な心理を寫し餘して、曖昧な辭句でごまかして居る、終の方の「良心の痛罵の叫」なぞが其れだ。「此泪を誤解して居る。誤解して居る」の齊終は甚く振つて居る。（評）

【人】○墓道

山梨縣　井上笹波

九十九折程てもないが坂が急なので、病後—二回喀血した—の私は息がせいて胸苦しい。道傍の青草の上へ腰を下してホッと息をついた。人並でもない體で此樣な處迄來るてはなかつたが英子樣が近い間八王子へ嫁す事について、別れにと今日宅を訪れて呉れた。近頃になく氣分が好かつたので、見送りながら村はづれ迄來ると、序に私の姉の墓參りをして行きたいとの英子樣の望み淋しい山道を只二人きりてはと躊躇して居る矢先へ、散步歸りのお隣りの靜夫樣にヒョックリ出合たので、好都合と夕立上りの露多い草道を三人て、私は足の進むに任せ坂を上つて此處迄來は來たが、どうも胸が苦しい。力のない咳はかぎりもなく出て、全身は汗ビッショリになつた。

五步許り先に行く英子樣は、直ぐ駈け戻つて「何處か苦しいの？」「イ〻エ其樣でもないわ」「でも顏が眞青よ、歸りませうか？」「何い〻のよ斯うして居れば直ぐによくなるわ、貴孃お先きにいらしつて頂戴な」「でも貴孃一人殘して何だか私心配だわ」「大丈夫よ私だつて其樣なに衰弱して居るんぢやないから」と少しムッとして横を向く刹那、心の奥に閃めくものがあつた。何故斯う僻むだらう、餘り云ひ過ぎたと氣が付いて、私は前とは打つて變つた樣、自らも其病的な心理狀態を

怪みながら「眞實に其樣なに苦しかないのよ私後から直ぐ行くわ。此處て見えてよあれ櫻の木があるてせうあの蔭だわ、ねえ貴孃は先にゐらしつて頂戴姉樣も今日はどんなに喜ぶてせう」「左樣ねえちや私失禮してよ快い樣ならゐらつしやいな」雪駄の音輕く登る姿を私はつくづく見送つて又息をついだ。

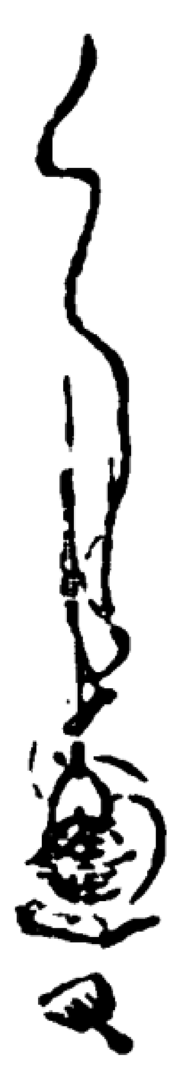
嗚呼遺傳!!私は亡き母や姉から正しく其血を受けついだのだ。今日此處へ來たのは我が近き將來に行く冥府の、旅立ちの道分けを自分てして居るのではあるまいかと思はれる、四邊の茫々たる草の中の數多の墓は、小さい野石を其標に誰のやら分らぬのが澤山ある中には生の歡樂を歌つて、人生に執着した人もあらう。或は不運に泣いて生の不安を覺り、我れと我身を殺した人もあるだらうが、私は其中の何れに當るだらう。私の病は不治てある、總ての人から嫌惡せらるる身てある子孫に遺傳させて一生の薄命に終らすべき細胞は體の至る處に宿つて居る。あゝ私には結婚の資格がないと自覺した時には耐らなくなつて寧そと思ふ事もあるが、現在の今の心てはやはり死にたくない、死と云ふ聲をきくだに大なる恐怖を覺へるのである。姉は十九て死んだ、私は姉のその年てある、一昨年からの病魔は血をも肉をも食みつくして、枯木にも譬へ樣か骨と皮計りのこの體。あゝ青春は束の間の夢てあつた。落ちんとする夕日に痩せた姿は益々長く草原に影を印して、亂れたる髮、肩のおとろへ。私は袂て眼を覆つた。菫が香ふと思ふと「御氣分はどんな？眩暈てもするの？」英子樣は何時か私の前に小腰を屈めて、顏を覗き込む、其後に立つてる靜夫樣は眉をひそめて「どんなてす……大層惡いおやないんてすか」私は袂を急いて取つて後毛をかき上げながら「休んだせいかもう快いの。登らうかと思つたけれど又歸りが案じられてね……」と誰にともなく云つて淋しく笑つた。

道巾が狹いので二人てさへ並んでは歩けない、私は足が重いから、強いて二人を先にしたオリーブの傘の下から少し上氣したる英子樣の横顏は丸髷の束髮から斜にすいて、熟した林檎の樣に美しい。「石があるから危なくつてよ」振り返つた帶際の乳房ムッチリと。幾人かの緣兒があれを吸つて英子樣は健な母と云はれるだらう、私は病人が有つてる一種の悲哀と云ふよりも云ひ難い感じ、羨ましいむしろ嫉ましい氣がした。

眞先きに行く靜夫樣は立止まつて、何やら禾本科の草の葉を取つて笛を拵へて居る傍に黄色い小さな花があつ

たので近よつて私が取らうとすると、「夫れ毒ですよキンポーゲです」「毒？毒なら私食べますわ、私など死んだつて誰も泣いて呉れる者など一人もないんですもの」と自分ながら聲がはずんだ。英子樣は何か云はうとした樣子だつたが又逆つてはと思ふたか無語で居た「英子樣と云ふ親友があるぢやありませんか」と云つて靜夫樣はワーツルの曲か何か吹き乍ら歩き出した。私はそれには答へ樣ともせず今度は八重葎を一株むしり取つて風車の樣な形した毛の多い葉を、靜夫さんの背中へ貼り付けた。子供の時はよく斯うして紋付だと云つたものだ。靜夫樣は振り返つて「惡戯をすると許さんぞッ」。聲のみ尖らして私を睨んだ其眼には、限りない優しい情がこもつて居る樣に、心の底へ映つた。英子樣は始終美しい笑みを恥かしさうにハンカチでかくして居たが、今私と顔を見合せると二人は何となくホヽヽと聲を立てヽ笑つた。

あゝ遺傳なぞと大袈裟に言はないと、佳い作だ。病人が持つ一種の反感も知て此女を可憐にして、何所迄も同情のある書方、殊に終の所には涙があつた。然し文章は拙い方である。（評）



〔秀逸〕

○隣の夫婦

伊豆　高木喜代子

妾の隣の夫婦は何時も離縁談計り持ち出すのだ。妾も途半月許り以前に來たので、事情の發端等は些少も知らぬが、何でも四五回は聞いた、所謂三日にあげずといふのだらう。

今日もさうだ、主婦さんが何か裏の緣近くて裁縫してたらしい、其側に横に長くなつて、夫といふ三十五六の蓄髯の一寸した銀行員風ともいふ男が、婦の方へ顔を向けて暫く默つてたのだ。

丁度今日は日曜だ、六月の日は流石に炎暑い、倦怠勝だ。

『おい何うだ何時まで斯うしてたつて結局のつくものでもない。……畢竟思ひ切つてせい〳〵と別れて了つた方が、お互に將來のためにもよい。

『そうさねえ、どうせ一生は同棲に居られる譯でもなし……』

至つて雜作なく、日常茶飯の事でも語り合ふ樣だ、兩人は平時も仲は非常によいのだ、只だ言はゞ退屈しのぎにこんな事言ふ位にしか過ぎぬ、思ふに好いた好か

れた同志の馴合夫婦だ。が一生連添ふといふ事はお互に出來ぬと思つてるらしい、それを二人が考慮へゐてもない。

否閑餘の時などにはよく考へ出しては、お互に思ひ切つて別れようといふが前後を沒却して好いた好かれた當時の匂が殘つてる。

其當時の色は褪めて了つても、氣儘を繼續けて來た男女は、到底離緣ぬ如うの堅い、氣儘といふもつれが、ほぐれぬのだ。女から、貴郎何時までも斯うしてた處でお互に年を嵩う計りて、すえ始終望がないんですから……といふ時もある、男も實際そうだ何時までたつても同じ事だ思切りが第一だといふ、何時でも男女がとつかへ引つかへ同じような事を繰りかへしてるのだ。結局、氣儘といふ事を助長さして行くのて、よそう／＼て、よす時はなく日を送つてるのだらう。否中々離緣ときはないのだ。

只だ男も女も退屈しのぎの言ひ草が、口ぐせになつて了つた如うな譯合だ。今日らのそれも或はそんなものだらう。



お稽古　大坂　今四こゆき

惚合つて一緒になつた夫婦が、段々馴れ合つて來るとお互に我儘も出る、珍しくも無くなつて、つひ折に觸れて話を持ち出す。が、思切つて別れる事も出來ぬ。そんな事で此頃は此別れ話が茶話のやうに繰返されて居ると云ふ夫婦を書いたものだが、掘りが淺かつた爲めに暢氣な夫婦になつて了つた。深く味つて書くと、底に哀愁のある好い取材である。(評)

○地藏渡

大阪　西戸政江

妾は餘りの事に夢中で家を出た。

なぜあんなに御變りなすつたらう、嫁いだ當座は春！春！とそれはもう人前では恥しいほどやさしく親切にして下さつたのに此の頃のあの仕打なさけない水くさい事ばかり、なぜあんなに御變りなすつたらう。

餘りの事に夢中に家を飛出して知らず〱走つた、と、氣のついたときはなずかしい地藏渡しへ來てをつた、此の河を渡つて拾町程行けば我家!! 闇で向ふは見えないが何となくなつかしい。

與作の家からはかすかに火の氣が戸のすき間から洩れて與作の爺さんは蚊いぶしの向ふの方に眞裸の儘大の字に寢て何か鼻歌を謡ふて居る、自分の身に引きくらべて與作の身の上が羨ましい、妾は入口の戸によつて「御爺さん」と呼んだが聞えないのか起きない。

「御爺さん」と今度は少し高う呼んだ與作は喫驚したやうに、

「オーイ誰ぞい」と一寸頭を上げたなり中々起きさうもない「妾……妾だよ御苦勞だがね渡して御呉れよ」

「御奧樣てがしたか」と直ぐ立つて來る氣合暫くして戸を開けた、いぶかしさうに妾の顏をジロ〱眺める

「御苦勞だがね」

與作は、

「今頃歸るとは何ちゆことだ奧樣もう遲いだよ御前さま西光寺の鐘はとうになつたしどんな用事だか知らねいけんど今夜は御止しなさいよ」

妾はあはてゝ、

「御爺さんあの今夜は是非歸らんならんからね、御生だから渡して御呉れよ」

「そらあ御前さま渡すのは何でもないけんど御前さま今夜はえらう顏色が惡いだ何んだか今夜はおかしいな何か變つた用事でも出來たか」

「あの今夜は一寸急ぐのだからね御生だから」

やつとのことに與作が承合つてくれたのでホッと一息した。

「御出てなせいよ」さきに立つてだら〱の堤を下へ

下りる妾も後ろについてやがて舟に乘つた與作は竿をとつて輕く一寸蘆葉を突くとユラ〳〵と舟は水に少さな波紋を畫いてサラ〳〵と水は岸をなぶる。

與作は竿を艪にかへて「御前さまえらう顏色が惡いてさあ、どこか惡いだか？」

與作の問ふのも無理はなからう口惜しい、情ない今更ら旦那樣の仕打がうらめしい。

「ホヽ、妾、妾の顏色がそんなに惡い…‥？」

「えゝ惡いてさあ」と大きくうなづいて、

「お前さまも不幸にあつちへ嫁つしやつて間なしに實母樣はなくなるし親一人子一人の大切な身體だ用心しなせいよ御父樣も餘んまり強え方じやありましねい大切に孝行してお上げなせいや」

と與作はいつしかしんみりと艪押ぐ手も機械的に御留守勝であつたが突然アハヽヽと高笑ひして「つまらねい話して御免なせい」

「あの爺さん園さんはやつぱり御機嫌よろしいの？」

「アヽ園の女郎か時々泣いて戻つて來やがるが直ぐ追掃つて歸しまさあ…氣儘者のいつも云つてやりまさあ、たつた一人の亭主の機嫌がとれねいかつて、よその娘つ子は姑や小姑とうるさい鬼のやうな處でも辛棒するに…ていつも言つてきかしてやるんでさあ奧樣なんざ旦那樣と二人きりで結搆な身分でさあ御父樣も喜んで、御坐らつしやるだんべい」

いつの間にか舟は流れて對岸の堤は黑く川上から川下へ長蛇の如く橫はつて見える。

どんと舟をつけて、

「あぶねい御靜かに」

「御苦勞でしたね」

岸へ上つた涼しい風のソヨ〳〵と身にしむと始めて妾は自分の身に返つた、と。今更自分のはしたない今の行爲に、たゞ〳〵悔ゆるばかりである。

ほんに與作の云ふ通りだ、妾はなぜこんなに氣儘者だらう、なぜ家を飛出した悋氣は女のたしなむところとかねて聞て居りながら…思へば嫁ぐ前、御父樣や御母樣の「世には鬼のやうな姑や小姑のある家へ嫁く人さへあるにそれを思へば御前は果報者よ、必ず嫌な顏して戻つては呉れるな」と情けこめての強意見に「御言葉の程は必ず御守り申しますと誓つた言葉をなぜ忘れたのであらう。

とそれからそれへと空想は空想を生んで果ては老い先き短い殊に御病身の御父樣の事を考へては矢も立かた

まらない。
覺へず立ち止まつた。
短さ夏の夜は更けて泣く虫の音も絶え〳〵に我村のあたりかすかに灯の光、露を慕ひの螢一つ音もなく闇をぬふて行く。
妾は今我家近くへ歸つたが實家へは寄らずに半里餘を廻り途して再び嫁した家へと歸るのである。

此人の筆は非常に熟錬して居る。描寫にもソツが無い。然し地藏渡を渡つた所で反省の念を起すと云ふ仕組が些と拵へ物の感があつた。(評)

○家路

小石川　岡本喜代

朧月夜に、さつさと家路を刻みながら、春や昔、と同僚は語り始めた。
「私はこれでも其時分のハイカラでね、頭を鬘のやうに撫で附けて、薄化粧したものだそれを隣家の娘達が連さんは綺麗だ〳〵と噂するので嬉しくて堪らず、子供心さね十七だつたよ。
私がまだアメリカにゐた時、姉さんから、――世話になつてゐた家の娘で、弟の樣に可愛がつてくれた人さ。――毎時云はれるので、或朝石鹼ですつかり頸や顏を洗つて、挨拶に行くと、
「おゝ、綺麗になりました。今日は手でお洗ひだね。何時でもお前は口でばつかりお洗ひだけれど、口で洗つたのは耳には綺麗に聞えても、目には矢張綺麗に見えません。」などゝ、云はれ〳〵したが、いくら洗つても洗つても、毛唐から見ると、地肌の黑いのが恥しくてね、今考へると馬鹿な話さ。白粉を塗けるやうになつたのぢや。」
「成程、お若い時の美しさが偲ばれますよ。」
「否もう、」
同僚は黃い顏を翁の面にして緣の切れた山を一寸冠り直した。
「爾う成つては終ですなはゝゝゝ。」
「何？頭かえ、禿頭は致方がないわ。今云ふた隣家の娘な。」
「えゝ、それ〳〵。」
「お君と云ふのが十八で、姉さん〳〵と云はれてゐたが、隱居をお祖父さんと云はない所を見ると、何うも眞實の姉妹ではないらしい。隱居の妾だつたらうよ。犬が所好でね、ビスと云ふのを大層可愛がつてゐた。それと私が仲善しさ。何時か此樣な事もあつたよ。」
老爺め、記憶に芽を吹いたわ、言葉も繁らう、花も咲

から。

春まだ淺く、水も濁らず、情を泛ぶる花の香も漂はず。心を動す鳥の音も流れず。森や、祠く、山や、雲や、土橋の邊に柳を煙らす旅商人も、畔道を行く翁媼も、藪も藁屋も淡彩て濃墨を用ひてない。夢の樣な野徑を蓮さんはお君と二人、絢れつ縺れつ散歩してゐると、

（姉さァん。）

遠くから聲を延して妹が呼び掛けた。顧眄ると、來たくわ隱居が。布袋の樣に莞爾しながら、

「ヤア仲が善いな。」

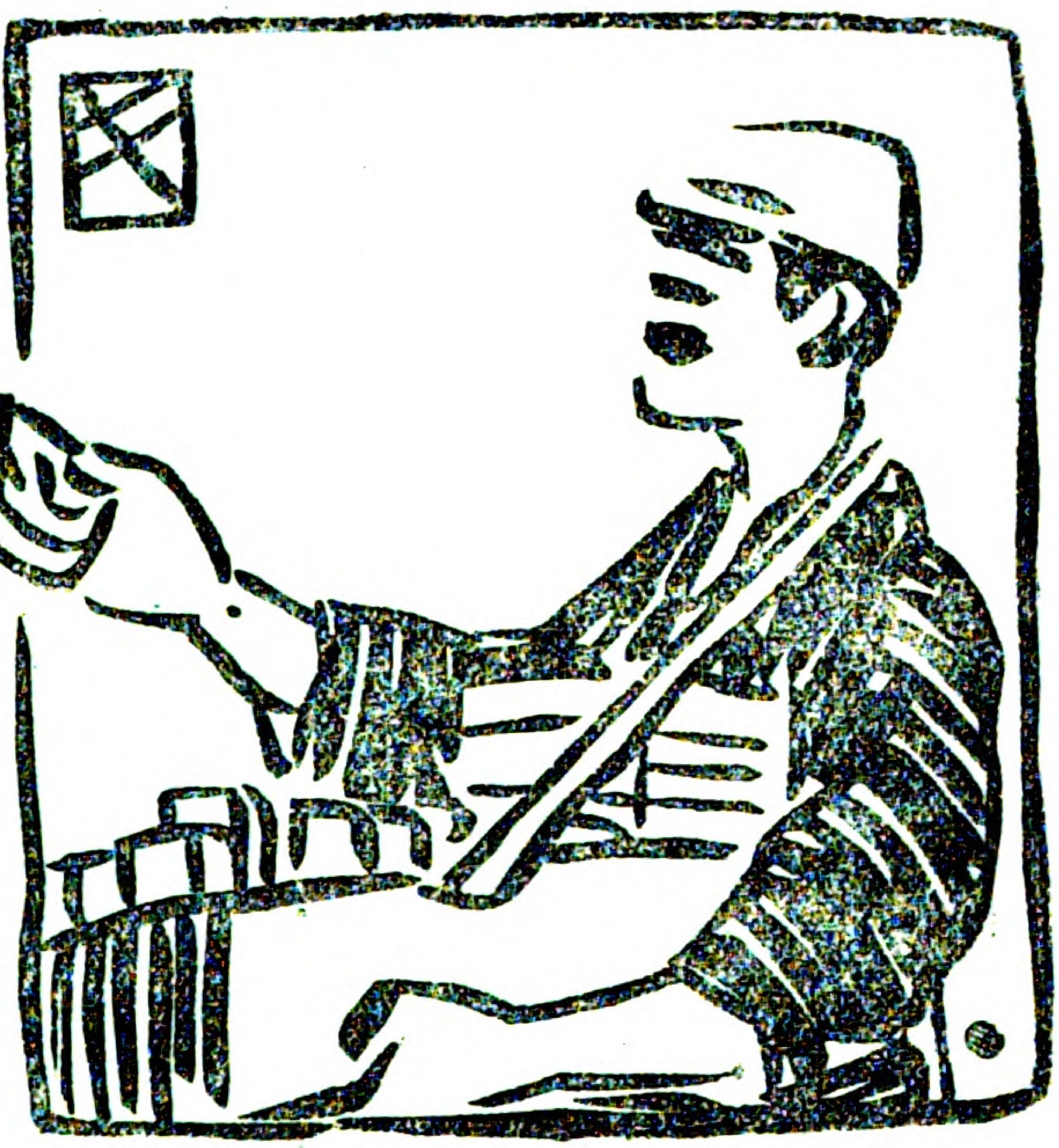
一聲鼓膜を衝くと、蓮さんの身體は毬の樣に彈むだ。

「はッ〳〵可いわ逃げんでも可いわ。恥しいと見える、はッ〳〵〳〵。」

隱居の笑聲に押出されて、蓮さんは轉る樣に走つた。

寳　子

名古屋　きよし



それから二三日遊びにも行かなかつたが、戀しくなつて、柴垣から密乎隙見をすると、莊然夕暮の空を眺めてゐたお君の妹が眼慧く見附けて、

「アラ蓮さん、何うしたの？妾今遊びに行かうと思つたの。何故來なかつたの？」

「お祖父さんは？」

「居てよ。先日何うして彼樣に逃げたの？」

「逃げはしない。」

「だつて餘程可笑しかつたわ。」

笑聲を急に落して、

「姉さんもう居なくつてよ。」

「何處へ行つたの？」

「昨宵ね、默つてピスと一緒に東京の叔母さん處へ行つ了つたの。」

「何うして？何時歸るんだ。

「何時だか分らない。」
「君ちやんが居なけりや滿らない。」
「アラ、歸るの。蓮さんが歸つて了つちや、妾倚滿らないわ。ねッ一緒に遊びませうよ。」
と、甘える樣に云ふ。
「妹も却々可愛い子だつたよ。お君は何うしたか。」
同僚は更に語り續ける。
「それから私は復アメリカへ行つたので、高島田や、お太皷に結んだ帶を忘れて了つたが、二年許彼地に居て歸つて來たのは、さうさ何月だつたか、暑い時分だつたよ。朝早く番町を通ると、邸の鐵の門の内から、突如犬が飛附いて、眼を熌して頻に尾を掉るぢやないか、能く視るとピスだ。
「お、此處にゐたのか。久しく遇はなかつたなア。」
頭を撫てゝ遣ると、ズボンの裾を咬へて、門の内へ引ずり込まうとする。お君が若しや此處に、と思つたが跫音が近いて、口笛が聞えた。ピスは飛んで行つた。怪しい者と見られちやならんと急いで通り過ぎたので、誰の邸だつたか、も一度尋ねて見ようと思つて、それぎり尋ねもしなかつた。
妻を有つてから始終貧乏ばかりしてゐるが、彼の時分の事を願ふと、氣がのび〳〵するよ。」
同僚は足度も若やいだが、數す步行けば右と左へ例の樣に別れなければならぬ。賑かな町の燈を載せた生温い風がすうつと耳を掠めた。
「君なんざ之からだが、男も女も思はぬ者が夫婦に成つて、臭骸相抱いて慕ふ人を夢みるのぢや。」
同僚は呟く樣に云つて、
「お君は何うしたか。もう好い婆さんに成つたらうよはゝゝとんだ馬鹿話をしたね。左樣なら。」
と、右へ曲つた。

男も女も思はぬ者が夫婦になつて、臭骸相抱いて慕ふ人を夢みるのだ、と云ふ中心思想は面白い。が一篇の話は是丈の深い想を頭かせるには餘り輕くボンヤリして居る。（評）

附言　今回懸賞小説中に千葉縣山武郡成東町字片町松ケ枝浪江（無論僞名ならん）なる者の「男の子、女の子」と題する一篇あり、這は二三年前撰者が雜誌「新潮」の爲めに起稿せし短篇を全然剽竊せしものにて、而かも題名まで同一なり、悪戯か、無恥か、剽竊も斯の如きは寧ろ滑稽なり



日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切每月十五日、懸賞品は乙種規定に據る。

天　○子守の三日

福島縣河沼郡野澤　泉　花枝

五月三十一日日曜、朝より十時頃迄は、貞夫室內にて繪本など見て遊び、稍飽きて戶外に出でよといふ。カーキ色の水兵帽に釦止の赤靴穿かせ、手を携へていづ。遠くも行かで道ゆく人の誰彼見て喜ぶ態無邪氣也齡二年と六ケ月、今智識慾隆なる時代にやあらむ、見る人來る人每に指して『あれは誰？これは誰？』と聽く事頻也。快く敎ふるに然も會得したるらしく首肯するも愛らし。されど中には、全く見知らぬ人の傍近く通るを憚る術も知らずに尋ねらるゝ時、其人に對し何となく氣の毒にて、頓に言ひ出でんやうもなくてそゞろに耳熱する心地せらる。かゝる折努めて心を他に外らさしめんとの苦心、事に當りてならでは、なかなかに思ひ至るまじく思ひぬ。

六月一日月曜。午後になり日稍暑し。木蔭に小石など弄びて遊ばしむ。三時頃顏のみ知れる隣村學校の年若き女敎員、中形の單衣に紫袴の裾輕く通れるを、貞夫疾く見つけて『花嫁々々。』と呼ぶ。冴えて張ある鈴の音の如き聲のきこえやせんと制すれども肯かで猶も再三度呼ぶ。女の君輕く微笑みて過ぐ。後見送れる貞夫の、聽て、『お父樣に花嫁買つて貰ふの!!』

夜團欒の席に此事語りて一家皆笑ひ興じぬ。

六月二日火曜。天晴れたれば洗濯し乍ら見守る。坊もせむといふ。金盥に水汲みて與ふれば、喜びて手など入れて獨興がり遊ぶ。一寸裏方へ廻れる折水音烈しくきこゆるに、『衣裳洗濯するでないよ好兒だから。』とすかせば『でない。』と答ふ『何を洗濯してゐるの？』と尋ねれば『木！洗濯。』といふ。何やらんと往きて見るに、二尺許りの棒にて水を弄べるなりき。

漏れきこえてや、臺所にて母樣迄笑ひ給ふ聲す。實に愛らしく無邪氣なるは小兒なるよ。

（評）謹嚴の筆一分の隙を見ず。

地　○初夏日記

本鄉　朝井千とせ

一日。晴。濺々たる音を夢の樣に聽いては居たが、大分烈しく降つたと見えて、新芽をふいた落葉松から、

緑の雫を含むす石燈籠に、ぽたりぽたりと雫を落して居る。昨日琴さんが褒めて下さつた芍藥は、僅の蕾と黄色の蘂を殘した計て、眞紅の花瓣は、びつしより濡れた地面へ惜し氣も無く散つて居る。吁かうと知つたら、傘でも差し掛て置くのて有つたが、……こんな事てはとても花守は出來まい。五六日前に蒔いた朝顔は十三本芽を出したが、あの雨て種がほう〳〵に轉げ出て居る。夫を竹箆て丁寧に埋めて居ると「茄子の苗や―胡瓜の苗、千成瓢簞絲瓜の苗」銀鈴を振る如な凛とした聲で餘韻長く……若聲に蔭有らば、月澄む夕べ小窓に通ふ白梅のそれて有らう、又色有りとせば、浮世の埃に汚れぬ溪谷を流るゝ淡綠の水で有らうか、いつも乍ら私は恍惚と聞きほれて了ふ。

二日。曇。三月程前に發入つたお隣のお嫁さんが、お姑樣との折合が惡いとかて、大層もめて居る樣子、と今朝聞いたお曇の咄が、妙に氣に成つて好な本もさつぱり氣乘が仕無い、ていつの間にか茫然考へ込て了ふ……とあのふくやかな頰がこつそり削げて、淡紅した樣なお色が蒼褪め、纖いお手を帶の間に挾んて、夕顏棚の下で遠くの御兩親をお慕ひ成さる時が來はせまいかと思ふと、夫が他人とも覺えられず、ついほろ〳〵と涙が零れる、マア私はどう仕たのだらう馬鹿らしいと、我乍ら可笑く成て又本に眼を移す。けれ共矢張何やら悲しい淋しい、切は儚い感想がひしと迫つて來て、現在宿命に泣いて發入る國さんや愛さんの事迄に想ひ及んでは、きりなく涙が出る。吁女はどうでも辛い境遇に立つべく生れて居るのかしら、私も聽ては？と胸は千々に亂れ〳〵て、果は何が何やら、譯が分ら無く成つて了つた。吁こんな厭な日には勉强も出來まいとバイオリンを取るなり弓をあて糸を引き締めるとバチッと一筋切れた。

あゝ何んだか、じれつたい日。身の措きどころがないやう。

（評）げに茄實の聲は初夏の部の詩の一なり。

【人】

○磯日記

本所區緑町一ノ三一　秋山欣子

八月十日。瀨を早み、岩にせかるゝ那珂の流に、棹さしてより二時あまり、馴れし小舟を海門橋に乘りすてて祝町より車を驅り乍らも汀路を徒足にて、と別れたる兄上達を羨みしが夕暮平磯の町に入る、大きやかなる海水帽冠りて行く子等見ては、我も明日よりはとうれし、東樓に入る。

夜十三夜の月廣椽にさし入りて夜氣水の如く流る。

十一日。明けやらぬ間に母上と二人貝拾ひに行く。脛を洗ふて、蒼う〳〵のたくる浪は、かなた、乳母懐

の巖角に、白けて落つる月を破いて、潮の香高う、千鳥も啼かず、櫓の音もせず、我歌ふ海の歌いつになく朗なり。

書絹のべし如き沙上にこぼれては、花ともまがふ櫻貝に暫與やれば、程もなう、月光うすれ、雲動き、淡紅紗もて包まれたらんが如き海づら、水蒸氣騰る事頻りなり。

貝拾ふ手を留めてみやれば海のはて、見え分かぬ程に生れし薔薇色の光、すはといふ間にいよゝ伸びて、大いなる白環を畫きつゝ波より峰、巓より陸に閃めき、大洗の渚、ざんざめく濤聲高うなりぬ。

磯て名所はね―、大洗樣よ―、かすかながら透る佳き聲す。あはれいづこ、松魚の獵に行く船か、百尋沖の暗きより濡苫のまゝ入る船か。

松が見えますほの〴〵と。こたびは遥かに。

磯前岩の後ろより紅炎むら〳〵と立騰るや、燁々たる曙光十方に輝き、もやを破り雲を劈き、天地兩斷、み

水車　豐橋　白井津奈子



るるみ十寸の紅輪は、渺々たる萬里の波上に躍りぬ。朝鴉一群、露帶びし翼に朝の大氣を破りて、海原遠く啼き渡りゆく。母上を顧て黑岩に登れば、鮑取る翁の巖角下る見え、烏賊釣ると朝の海を船出する勇ましの水夫が磯ぶし、潮風に和しては、呂律整へて高う低う、

三十五反の帆を捲きあげてね――

櫓拍子揃へていそがず、亂れず。

あすは仙臺、石の卷―宿に歸れば兄上等はよべの勞か、いまだ夢圓なりき。夜、宿より琴三味等借りて、千鳥を物す。父上は尺八、庭近き浪の聲のともすれば聞えぬ程。

（評）水聲の鋒の綫にそよせかへす波の音きく心地こそすれ

秀逸

○日記

鹿兒島　露萩子

五月十七日。晴。日曜なれど、當會社は休日なきなり、

況して我は下女兼事務員、外出などは思もよらざれど暇なりしまゝ、午後「夏すがた」求めに行き從姉の許に立ち寄りしに、花樣へ文認め與れとの事にて、歸宅せしは五時、をば樣の御顏付變れる樣に、おど〳〵と掃除にかゝれば、生憎や掛物の紐切るゝ、心弱き身の涙のみ溢るゝに、何古いのだから、との主の御言葉、嬉さ限りなかりき。夜は何事も忘れて「夏すがた」に親しむ。風强し、梅の實しきりに落つ、警報思ひ合されて明日の氣遣はるゝよ。

五月十八日。晴。思ひ懸けなき快晴澄みたる空に隣家の五月鯉は、ふくれかへりて踊れり。をば樣の機たつに我は横繰りつゝ、ふと亡き姉樣を思ふ、山里なればつゝじ過ぎては手向の花もなかるべし、近からば朝毎引き續く花賣の撫子、求めて參らせんに、五里を馬の脊にてはおもひもよらぬことなるべし。集金人來られて加治木地方は共濟保險の好景氣なる由話さるるに、さらば反對運動も益なし揖宿へこそと思ひ立たせられては片時も止まぬ主の御氣性、明朝の一番よりとなり慣れ居ても兎角落し物ありて叱らるゝに二人は夜更くる迄彼是と荷造りす、寢過さぬ樣と祈りつゝ臥床に入りしは十二時十分。

五月十九日。晴。機嫌能く旅立ちなされしは、我が來し以來初めてなり。亦責任は重くなりたれど、氣樂らしく感ず。支社より新被保人のカード番號通知し來る集金は、貳拾圓五拾錢也をば樣に渡す。夕方入湯歸りを舊友吉野樣に逢ひしに、お目出度う、と意味ありげの御微笑、腹立たしかりしも昨日迄の我身を思へば、さすがに保險會社の事務員よと君の誤解を正す勇氣もなく別れたり、何事も家の爲と思へど胸せまりて食事も得せず早く寢ねぬ。

（評）侮りがたき下女兼事務員の君の縁哉。

○入院の日　長野　胡蝶子

五月九日。昨夜よりの熱下らずしてしかも咽喉の痛き心地すれば、苦しき身をやう〳〵車にて病院へ參る。醫士の君の「ジフテリーの疑ひがあるから、今血清注射をしてあげます、そしてよく調べて置くから五時頃誰かおよこしなさい」と仰せ給ふにいとゞ胸とゞろきて何となく涙ぐまれぬ。歸る途すがらも此事母上に申し上げなばいかに驚き給ふべしなど思ひて。

午後も熱は下らざりき。突然、四時頃病院より、診査の上確なるヂフテリーと認めたれば、今すぐ入院する方よろしとの使にて、皆々驚き、妾は亂れたる髮かき上げもせで悲しみの胸を抱きて車に乘りぬ。

「長い事はないてせうから決して心配しないで一日も早く治つて下さいよ」と母上の仰せ給ふに、はや涙ぐみて「ハイては行つて參ります」とのみ後は涙にとゞめられて。家を出てたるは、はや黄昏の暮の深く閉ざ

されて、戸々に燈火のつく頃なりき。逝く春の淋しさは病める此胸にひし／＼と迫りぬ。

胸塞がる如き藥の香に醉ひつゝ長き廊下を傳ふて導かれしは、人の厭ふ傳染病室なるに、悲しさ、淋しさはいや增したるが、眞白き床に臥して間もなく五十路近くの優しげなる附添婦來りて何くれとなく慰め吳れたるにいとゞ心强うなりぬ。九時半頃看護婦の回診もすみて、あたりはいと靜かに時々幽かなる呻き聲の聞ゆるにわらは何とも云へぬ悲しき思ひのして目は冴え、一時二時の音も聞きぬ。

夢うつゝとなりし時突然！暗を破りて亂打せる半鐘の音、續きて響く善光寺の鐘！。にはかに院内は騷しうなりて「どこで御ざいませう」の聲はあなた、こなたに聞えぬ。とみると火氣は焰々として西北の方に!!!。

（評）わざと飾らざる處却て情深きをおぼゆ。

○梅雨日誌　　長野縣　勝　子

六月十一日。昨日よりの雨今朝は小降になりぬ。櫻の君訪はれたまふ。四方山の話に打興じつゝ、此頃の憂さも雨と共にはれて、時の移るも覺えず。午後は歌よまんとて短册など取出だす。おのれ、

　枇杷の實も色づきそめて五月雨の
　　ふる日も近くなりにけるかな

とよみしに、櫻の君、名所を知るのみが歌よみの能にもあるまじなど笑ひたまへど、わからず。五月雨は君の目のあたりに來りたるには非ずやとのたまはせたるにて、はじめて解しぬ。實に今日は入梅なりけり。

十二日。細雨濛々。垣根の牽牛花のぶること寸餘。

十三日。けふも、

　幼子が持てる飴武者鉾先きの
　　にぶりがちなる五月雨のころ

　五月雨に庭の池水あふれいてゝ
　　おもはぬかたに魚ぞ遊べる

十四日。雨ふらず遲咲きの躑躅くさりて、新芽の間に殘れる、あはれ。胡瓜畑には、麥藁などしきたる茄子の五寸ばかりになるに、早や竹そへたるもゆかし。

十五日。天氣なれば野外に散策を試む。このもかのもの麥生、皆かりつくしたるあとに、夏大豆の早や一尺許りにも伸びて、綠の波うたせて、亘る風いと涼し。若葉かげすゞしき下に莚しきて遊ぶ里の子、紫陽花咲ける垣根に草の葉食ふ猫の子何れか畫中のものたらざらん。

　紫陽花のいつとも知らずうつろひし。

（評）この文また紫陽花にくらぶべし。

○三日々記　　長野縣　内山けさよ

六月三日。水曜。天保時代の遺風去りやらぬ山家の事

とて、日數も舊暦、今日は端午の節句なり。朝まだきより空晴れて。をちこちに見ゆる鯉幟の、花と粧りし靑葉に交りて、日頃淋しき我里も今日のみは流石賑やかなり。妾が家にても兄様が、初子、武坊の節句にて、庭に飾りし品々の、風になびきて音あるも、さほどうるさげならず。

風にひらひら赤白黒と、なびく五月の鯉幟

節句禮者のそれらしき、駒下駄輕う未だうら若き男女のふたり、羞らひ勝に語り行くうしろ姿の惜らしうも羨まし。

嫁御美くし優しい姿、蝶も慕ひて後を追ふ。

夜菖蒲湯に心清めて、孤燈の許に縫物すれど何事にも趣味うすき我身には、只譯もなう幼かりし俤の胸に浮びて、暫し默想に夜を更かしぬ。

丸く四角に心のまゝに、萎の此世をして見たい。

六月四日。木曜。遠く松林あたりにて啼くならん閑古鳥、山鳩の聲、折々響く梭の音、靑葉を渡れる朝風に心地よく微かなり、午前弟の單衣を裁つ。梅花散る去年の四月始め、松本なる女子師範に入らせられし清子様より健在なる便りに添へて、み手になりし過去の歴史と題せる詩集一巻、封じ越しぬ。あゝ又しても思ひ出の種に胸躍る。

友の便りは嬉しいけれど、お返しする身が恥かしい

六月五日。金曜。今迄母様一人にてせられし蠶飼も今日よりは妾がお手傳、朝より野良へ桑摘みに行く。太陽の高うなるに連れて松蟬の聲頻りなり。黄ばみ初めたる大麥、花盛りなる小麥、靑き桑畑のところどころに見ゆる白き手拭、丸きすげ笠のあたりより、節おもしろきひな唄の數へる樣に聞ゆるも又興多し。げに田舍なる哉。

麥は色づく早苗はのびる、妾しやいつ頃花が咲く

（評）山村の景趣やゝ巧に書かれたり。

○花嫁日記

霞湖南　香芳子

◎

朝の大氣は恐ろしく靜かて、まだ何處の家でも起きたけはひがない。有明の月が筑波の嶺にぼんやりと殘つてゐます。

私は夜の秘密の神が亂した黒髪を整へやうと水鏡の井戸を覗くと、昨日結つたばかりの高島田の根が少しゆるんで、紅い飾りが横に曲つてゐるのです。

いろいろなことが思ひ出されて恥かしい、ぼうつとする、頬がほてる、只わけもなくはらからがなつかしい。朝風が後毛嬲りつそよげば、桐花が一輪こぼれて、水に映つてゐる私の影が亂れました（朝の一節）

◎

軒の風鈴が夕風にそよいで、涼しい音を立てゐる。

月の光が、青葉の間からほのさして、そのしたゝりが青い。

「今歸つたよ」快活な調子で言はれると、私は嬉しいやうな恥かしいやうな「お歸りなさい」も口の內「あのすぐ御飯にしますか‥それと‥‥も」恥かしうて後が出ぬ。頰から耳かけてぽうつとほてるのですもの。何故斯う恥かしいのだらうと思ふて見る。分らぬ。矢張り恥しい。(夕の一節)

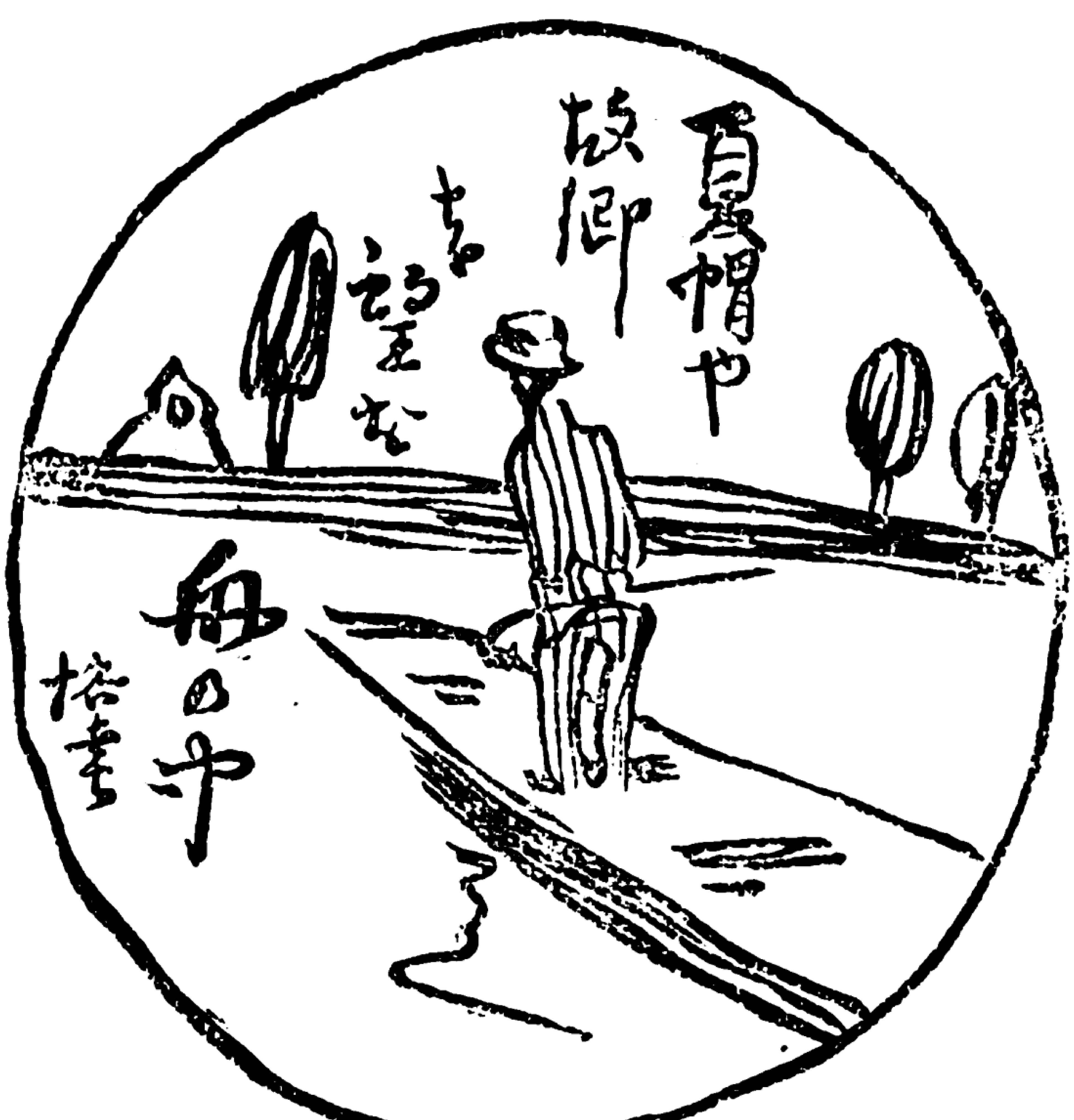
(評) 何と評してよきやら、只妹脊の契の長へに幸あれかしとのみ。

○花賣の一日

埼玉縣　船津ゆかり

六月四日。昨夜おそかつたので今朝思はず寢過す。傾いた軒からさし込む朝日に驚いてとび起きると、最う母樣は御飯をたいてお了ひになる。父樣は今日麥刈にお用ひなさる鎌を磨いでゐらつしやる。私も急いで筧の水で顏を洗つて髮を揃へて、御飯もそこ〳〵、昨日取つておいた花を籠に入れて、いつもの樣に町へ行く。父樣と道迄御一處に、朝露踏み乍ら宿を通り越して町に來た。私は最うなれてゐるから一寸も恥しくも何ともない。いつもの樣に大聲で賣つて歩く。何所のお宅も明日お節句だといふので、皆菖蒲を買つて下さる。いつも買つて頂く立派な石の御門の前迄來ると、長い〳〵敷石をカラコロ〳〵と優しい下駄の音と共に、呼んだのは此家のお小間遣のお光さん。「はい」といつて籠を下すと、「今日はお嬢樣が亡くなられた御母上樣の御命日なので、皆買ふてやれとのお言葉、殘てゐるのを皆おいて行つて」との事、おいとしやお嬢樣は御母樣にお別れ遊してか、今迄は何も御不足のない好い御身分、口には出さないが一日でもあの樣にとお羨み申したが、矢張この樣な御苦しみもお有り遊ばすのかと思ふと悲くつて、多分のお代を頂いた御禮も忘れて、汚れた縞の前垂は涙でしとゞにぬれて了つた。家へ歸つて母樣にこの事をお話しした、

村境の渡し　豐多摩郡　渡邊良子



母樣は人事でないとお泣きになつた、やがて父樣も野良からお歸りになる、母樣のお心づくしの夕餉に親子三人樂しくすまして床に入つた。私共は何はなくともかうして親子三人揃つて居るのは何より幸、姫樣もきつとどんな小さな家でも母樣と御一緒だつたらと、お思ひ遊すだらう、今頃はお自分のお部屋で泣き明かしておいで遊ばすかあゝお氣の毒な。

（評）やさしき花賣少女かな。

○日記の一節

大阪市　木村花子

六月一日。生垣の朝顏も今朝は五ッ程咲いて、微風に白露が甦へつた樣に落ちる心地のよい朝である。暫らく見とれて居ると、無殘や、六つになる美ちやんが、そつと楓の樣な手を出して、紅い花ばかり摘しつてはにこ〳〵として居る。美ちやんいけませんよと白眼む眞似すると、なぜと云つてもう朝顏の露が可愛らしい二重瞼に移つてホロ〳〵と散る。急いでかけて、嘘や美ちやん好なのをたんと御とりと背中に手をあてゝ顏を覗き込むと、亦以前の笑顏にかへつて、折から新樹を辷べつて來た弱い光に、美くしい頰の露は眞珠のやうに輝いて居る。後てつく〳〵無邪氣さ加減が羨ましくて、思ひ出の日記にありのまゝを綴る。

同二日。椽側に鏡臺を持ち出して髮を梳いて居ると、ばた〳〵と音がして、赤い襷を片手に一をんまひんひん」と片言交りに嬉ぶ義雄の顏が鏡に映つて、一入愛らしいと思つた。西から東に進む眞白い雲の姿が、合せ鏡をした時、遠くに映つて氣が晴々とした。手を洗ひに庭に下りた時、脚夫が郵便と葉書を投げて行つた見れば兄樣の處から江の島寫生其の一として、鉛筆で彩色まで施して隅の方に草書で俳句が認めてある。母樣が御前の理想とか云ふ譜なんだねえと、につこり御笑ひなされた。面白い御言葉だと思ふ。明日は春雄の初端午だから鯉幟を立てるだと、御父樣の御聲がした流し元では下女が柏の葉を洗つて居る。出勤してから昨日の事務の殘りを片付ける。一日面白く過ごす事が出來た。晩、本屋に雜誌を取りに行き、みんなで讀む。臥戸にはいつて、靜かに明日も幸あれと神に讚美を捧げた。

（評）朝顏の露の子供にうつりたる條、おもひつき面白し。

▲日記文の書體（六月應募）

嬉しい書方（丁寧）

福島、泉花枝。茨城、永井愛花。靜岡、貞水。靜岡、菊保與代子。津、越村ふみえ。越後、齋藤富子。熊本、近野春子。磐城、柳沼さめ子。

困つた書方（亂暴）

新潟、岸初子。越後、白樹。紀伊、田中朧月。小石川、よし枝。雄子。東京、きよ子。三河、森田春子。鳥取、夕美子。越後、婦久子。信濃、太田喜志女。

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は乙種の規定に據る

天 ○『憂恨』

岩代 梨花

五月一夜の暗なりし。
魔の吐く息か生ぬるき、
風は吾家を襲ひ來て、
處女のわれをさらひ行き、
麥生の中に捨てければ、
綠の芒の風に吹かるる畑に寐て、
匿れし人を夢みけり。
夏なれど――「生」の眞清水こほり
果て、
肉を吹き巻く寒風や、
世を悶え、漂泊の、
運命いだきてとぼ〳〵と、
夕野を北へ迷ひ行く君の姿を、
狂へる胸に描き見んと、
麥の穗を、拔かんとしたる右の手は、
夫なる人にとらはれぬ。
虛僞の――麥生の床にねしゆゑか、
たゞ北へ行く雲をしたひて泣くの
みに、
ねたみの炎むら〳〵と繪筆も麥も燒
かれつゝ。
あゝわれも亦嫁ぎて七日薄倖の、
黄色なる花の苦味おぼえぬ。

予は君の終にこの詩を作るに至れるをかなしむ、花やかな望みをいだいて「をとめのまちの曲り角」をまがつて行つた人はとうとう黄色の花を見るにいたつた。僞はりの愛、麥生の床、あはれむべきは夢に葬れる戀なるかな。

地 ○物の寂しら

大阪 木村春江

櫛はさしぬ
かみは高まげたか〳〵と
たれに見よとにあらねども
よそほひ立てし秀つ眉を
うつしなれにし大鏡
光に眩れつどひ來し
人幾人か冷笑みては
梅雨晴れ雲の禁思ふ
現ともなきあこがれに
魂うろの胸となりぬ
しかすがに勞れし路の中らより
ふと見かへれば草靑く
花も左右に匂ひぬる
處女の國のとほきかな
十八にして乳を含ます
友とならびて今ぞしる
(われは常少女!
ほこるとすれど)やは胸の
裡を領ずる「物」のさびしら。

六月廿日の夜より順次投稿を閲し來りて、二十八日の夜にはこの一篇の評を缺くのみ

となつたが、この夜自分はわれとわが心を殺さねばならぬ運命に陷つていきどほりては机上に積める投書を一括して火にくべんかとも思ひ、むしろ沈みてはわが生の今宵に終れるかとも思うた。『物の寂しら』は今わが胸に充ちて、ただ風の聲雨の聲、自分に聞ゆるは唇を反らして嘲り笑ふ人の子の聲であつた。

【人】

○朝びらき

信濃　太田喜志女

暗がりに呻きつゝ、
物あせりける吾が夜は明けぬ
珍鳥の朗ら啼き、
光り射す室の裡、
歡樂に倦じたる
手は自づから扉を押して
吾が胸の朝びらき。

見はるかす遠の小野、
紫はかすみに曳きて、
希望の朝日今、
他國の海に——野に山に、

血を吹いて「生」を呼ぶ時、
爪りと赤く——
大空過ぎり立ち迷ふ片雲をば染めぬ。

あゝ彼方かすみの裡よ、
紫は吾が戀ふ色よ、
野守神、み口にふくむ、
紅はほゝ笑みせさば、
たばしりて花とや生れん、
なつかしきかな。
身にまとふ素絹は、
色ぞなき香ぞなき、
いてゆきて露を踏ますまし。
なよら手に摘めし袖に、
香ににほふ青草抱きて、
したゝる紅を染めなかば、
美き影吾れをほゝ笑み愛てん、
うれしきかな。

何日之時可母吾妹子之裳引之容儀朝爾食爾將見、これはそれを反面から歌つたので、

【秀逸】

蓮歩輕く、草の露を踏んで行くとき、曉の花やかなる光は形に目に溢つるであらう。この詩、匿名の下に書を寄せて「父母の許に在る間こそまことに生涯の思ひ出多き時とぞんぜられ候へ、やがて名を更ふるべき少女の身の悲しきは人の上のみならず」とあつた、本當であらうか。

○母の國

信濃　青木花園守

天がける日の金鳥の、
岡によび雲によぶ國、
銀の瑞枝かたむけ
輝きて目映ゆかる國、
翠の野に白雨そゝぎ
ぬか星と花咲ける國、
鳩の群羊の群と
群れて〳〵日を群るゝ國、
玉かざる頸たをやか
玉のくつ、玉のかをり
瞳てき男女の

頭白く戀に美き國、
青海に青潮わきて
木は桂花は白百合
和手まき摺裳をひきて、
戀歌に靈さゝぐ國、
地の上の藝術の國、
戀の國詩歌の國とて
葵もて桂の葉もて
野白合もて額よそふ國。

評者惜らくは睛を點せず、このままにてはしめくくりが無い。葵もて桂の葉もて野百合もて、人皆は花を頭にかざり行くらむなど、とゞめればよかつたと思ふ。

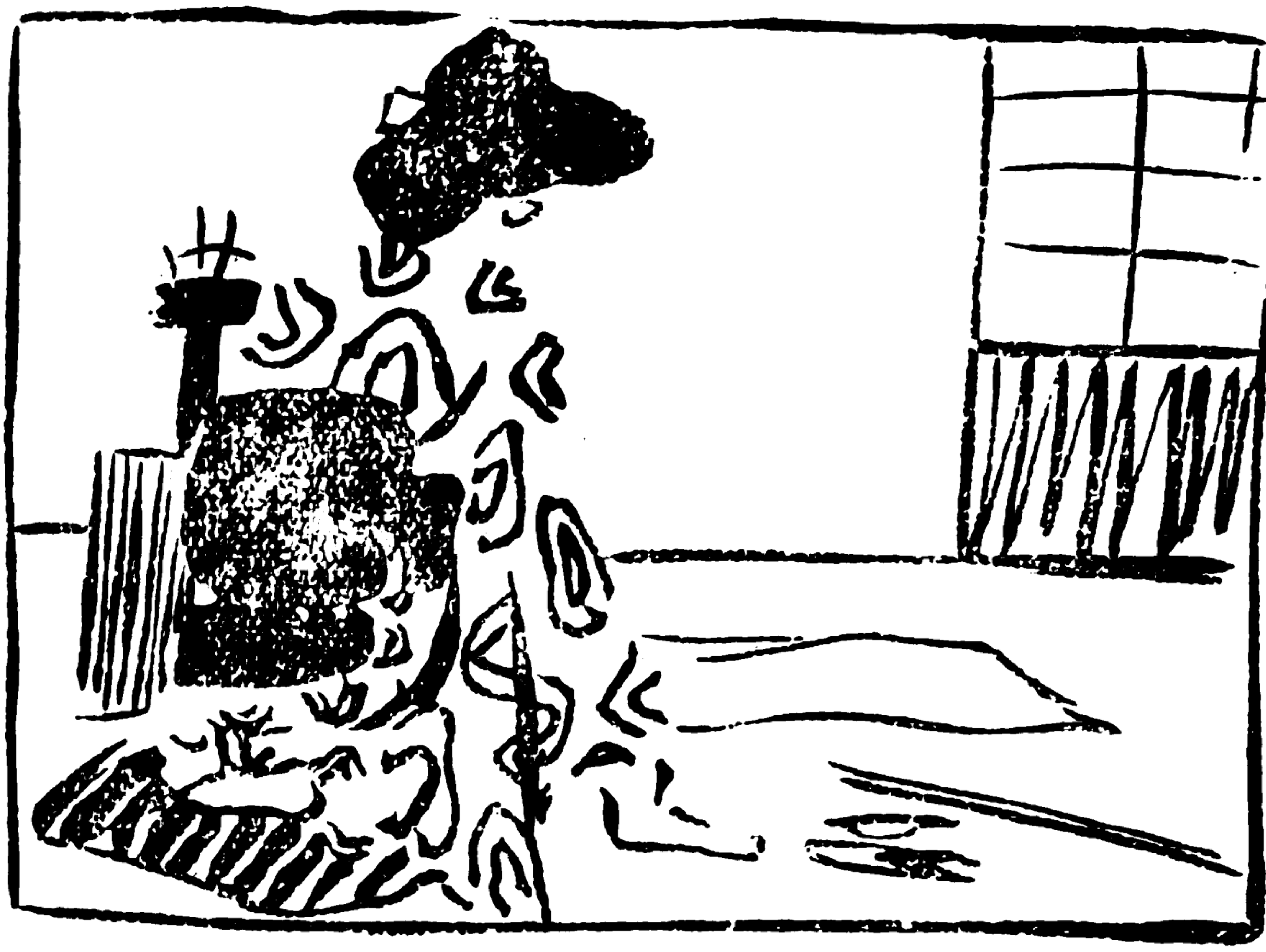
又曰、住所と姓名とを書いて下さらればいけませんよ、青木さんだと分つてるから採つたけれど、て無いと没書にするのだつた。

○母衣蚊帳

和歌山　田中文子

入りてつと緒を引けば
丸う開く母衣蚊帳
地は紺、白くして
あらはせし近江八景

夏　京都　濱部鳳雲女



墨書、濃く淡く
粟津は昔思出の――
比良の暮雪――矢走の歸帆――
と裾をめぐりて…………
上に仰ぐは唐崎の松
左には石山の月澄みて
右には瀬田の橋――
三井寺の鐘こそ枕にひゞかね
堅田の雁は夢に通はん
たき込めし香のかをりや
つり下げし銀鈴のさゝなりに
此宵入る夢をしぞ思ふ

華麗なり、中なる人も美しかるべし

○暗室

徳島縣　小村勝子

ある夕なり――
君はもやわれをば呼びぬ、
暗がりの室の中より――
朽ち果てしわが胸の室、
閉されぬ――扉はかたく。

さてはかくなやみ疲れし、
わが胸の扉のあたり、
聲かれてほのにささやく、
凶者か、われはまどひぬ。

胸苦し——なやみ疲れに、
亂れよる長き黑髪——
梳りてわれは又もや、
うかがひぬ——君のこゑそば。

聲はしぬ暗がりの室——
たへがたき苦痛になやみ、
われはもや又うかがひぬ、
閉されし——胸の暗室。

心痛ふかく郎をまつりて、君が戀はながく新らしきにあらずや、何ぞ「苦痛」といふ。

○朧夜　麹町　野村　光子

風軟う霞立ち迷ふ宵にして
春野路辿る佳き人の
踏みしだきたる若草に
さらと音して露こぼれぬ

打かざす銀扇の燦しるく
純白なる羅衣の上に
はらゝ散る落花のかをり
淡き霞と凝るやいま
いとゆかしさの夜なる哉
柴の折扉洩るゝ琵琶の音に
うつらうつらの嬌態や
ゆかり色濃き綾裳
露ぞ宿りて打しめる
彈ずる調の韻も澄みて
梢の眞中ほのかにも
霞むや嵯峨の春の月

これほどの才藻ありながら、平語以來うたひつくしゝ嵯峨野あたりの月に戀々たるは惜むべし。

○煩悶　岩代　丹藤　はる

夢に生きゆめに斃ふるゝ、
吾がなやみ、畏怖あらじか、
朧空匂ふ虹の高きに、
吾がうれひ、悔ゐはあらじか。

白銀の獵矢をふせつ、
浪こえて魍うかゞふ。
讃ふればさつきのもりの、
さゆり花ほのめく匂ひ。

さもあれやとはの寂しさ、
人しらぬ渦巻くだきて、
たちまどふかなたのなみに、
苦きをや注ぎていでし。

あはれこのむねにひかりの、
匂さし深く彫らばや、
狂ひ立つ戀のいづみに、
あたらしきいのちや湧かむ。

わがなやみさらばこの矢に、
碎くとも射ぬきたらばや、
霧迷ふ野べのをじかの、
亂れはもとはに消えなむ。

堪へやらぬ悶えぞいま、

雲か、あなとほくゆきぬと、
みるまゝに胸の豪なみ、
再びはなどかよせぬる。

これまた童貞のなやみを歌へるもの、あはれむべし。

○金太郎（舞踊大會席上にて）

大阪　今西こゆき

さら〳〵と幕は上りぬ、
背景は山の眺めよ、
かたはらに草家ありて、
よた〳〵と十歳にも滿たぬ、
幼な兒の顯れ出でぬ、
身にあまる大鉞を、
肩にして――。
其時よ後ろの藪に、
ザワ〳〵と筵擦れの音、
一匹の大き黑熊、
續いてはうさぎ山猿、
或はまた小さき男鹿の、
をどり出ぬ――。
（笑顔さやかに
右左――。）
金太郎に扮せる幼兒は、
驚いて肉もワナ〳〵、
聲あげて救ひ呼ばはる、
觀客はドッと笑ひぬ、
「金太郎が熊を恐るゝ、
お可笑や――」と。

ます手ひく手もしなやかに、今佳境なる幼兒がそば一背景だの佳境だのと熟語を使つて水の中へわざ〳〵油をたらしてはいけません、そこが學者たる所以を示したのかも知れないけど。

○夏のあした

田村みどり

朝ぼらけ産土神の
ましませる遠き山根は
走るなる霧にまかれて
さながらに艦のようなり。
その木々はみ艦の「マスト」に
その霧はみ艦のなみに
ことならずその装の
いかめしく何處に行くらむ。
ふき送る風に追はれて
行くさきはこなたの森か
はたかなた相合ふ處は
戰の開ける所か。

霧に卷かれた山を船にたとへたのはよいが、この山は甚近いようでもあり、またはかに遠いようにも見える、造り物だといふのが見え透いていけない。『孔雀船』の作者が大蒲ヶ原の山に分け入りて白雲の間に出沒する巨嶽を歌うて、雲の滿干のみなと一句にして盡したのは流石に巧だと感心される。

○めざめ

濱松町　岸　つぎ子

十重二十重黑の幕垂れ
幾年はその熟睡せし
ぬく〳〵と銷かれ心地に
今魂はつと眸あげぬ。

時あげぬア、明けども
真闇なり何を補ふる
寂寥は突き入るがごと
かつてなきそは飢えしさま。

ふと怪しや跫音のけはひ
すれざまに甘き私語
幕こえてさゆらに香れ
浮べしは密の現象

あな美しと思ひ入るとき
はたさらに『怯』なからめや
光明を戀ひて真闇に呻ぶ
あへていふ我は少女子。

「敢ていふわれは少女子」このような風雅な言葉を使はないで、奇しき現象に慴いた刹那の眞をうたうてほしい。

○紅恨　岐阜　泉　しげ子

花の息吹の流れては
夢と彩なす薄靄や
京は二條の春の宵

紅屋の屋根のおぼろ月
振袖長き京の子が
大皷かゝへて通るらし

雪洞淡き灯によりて
何思出の眉の愁
京に賣られて紅樓の
宴にひゞく小鼓の
さて美しき戀の音を
獨り小さき柔胸の
奥に秘めての三年を
つらや舞姫が戀日記

小路をめぐれば靜かにて
月に音もなう更くる夜の
なよ風ぬるうそよろぎに
灯影とともに小鼓の
籬を洩れて聞ゆれば
誇りがに云ふ浮れ男の
あゝ我が恨得しらんや

宵美しき京にして
猫は默してうづくまる
花に燈籠の影淡く
月はかつぎて朧なり

うはべばかり花やかに繪の具をなすりつけて全景にちつとも意味が無い。月はかつぎて朧なりといふのは花をかついだのか、それとも燈籠をしよつたのか。

○合歡の花　佐渡　本間きよし

合歡の花、あはれこぼる、
風もなきに仄酔ごゝち、
足どり重くとぼ〳〵と、
悔の旅路に露を踏みて——。
たまさかは涙ながらに、
笑めど冷たき奥の匂ひ、
靜かに凪げる水の面に、
漂ふ夢のありや？いま。
逝く雲の愁ひに凍てゝ、
淋しさか、否かはしらず、
あやかしものゝあぎとひて、

もつれゆくなり、迷ひの子。
ほの酔ひ心地、なほ欲りす、
空の洞の旅にして、
合歡の扉は力なく、
ひとみを上げて雲を見上ぬ。

つれなき撰者よと怨むだらうと思ふほど、この人につらく當つたが、其詩は相かはらずおくつて來る、しかし男男氣には感心されるが、てないといふことを證據立て且つ氣取つた詩を作るのをやめない内は自分は嚴として動じない。五丈原先生まだ降參しませんか。

○愛の花

奈良　中富よしみ

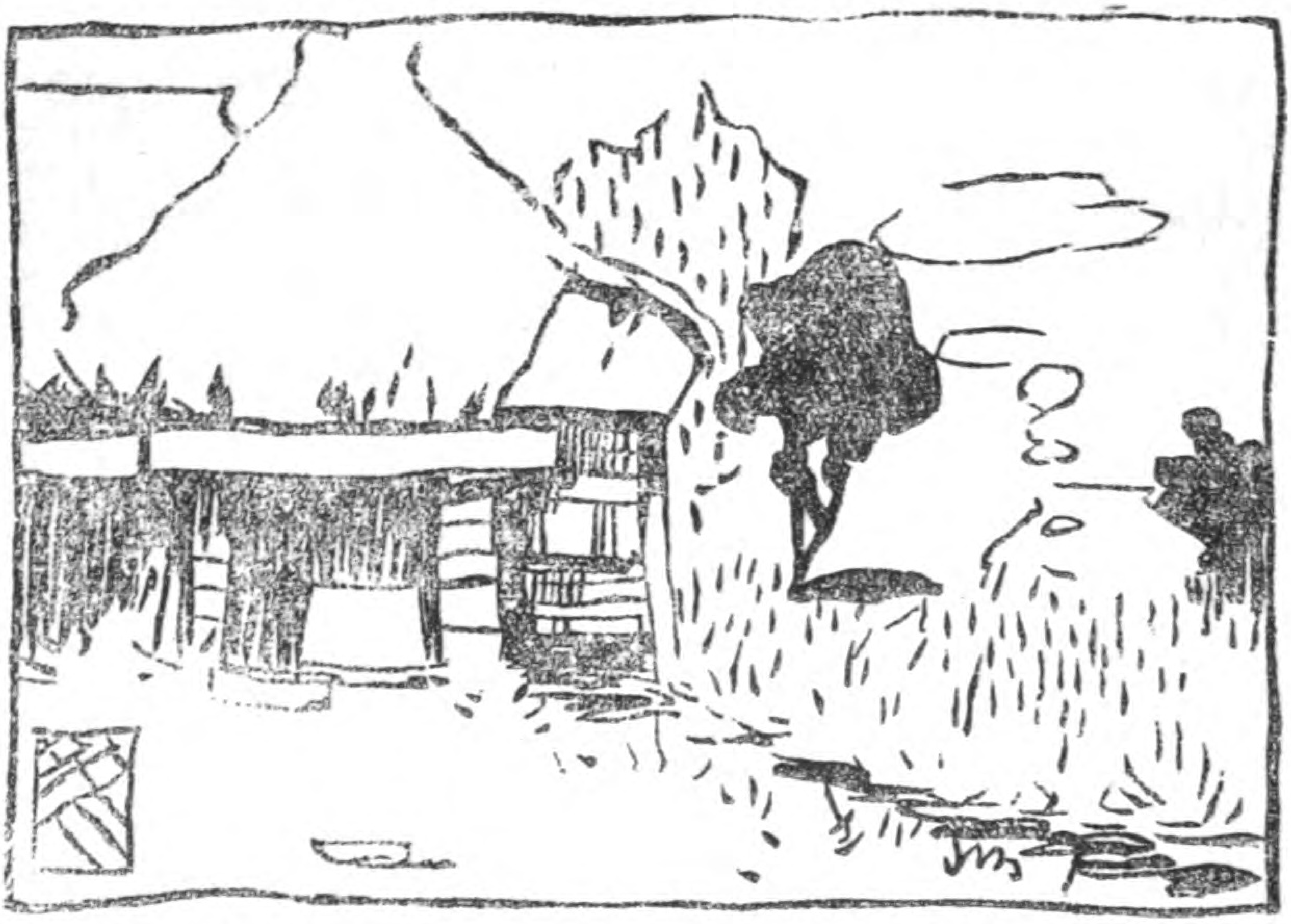
あゝ一度は我胸に
みづ〳〵しくもかぐはしう
とはに散らじと咲き出てし
あはれやさしの愛の花。

散らじの誓何かせん
美き色香も一時よ
花にひそめるうとましの
子房の今ぞゆらぎしを、
かくて子房の太ると
共に衰ふ花瓣よ
香は失せて色はあせ
見る影もなき其の姿。

あゝ清かりし愛の花
あはれもろくも散り果てゝ
かくれひそみしうとましの
子房は遂に實りしを。

だから、結婚するのはおよしなさいましといふのだと言うて、日本國中常に少女ばかりになつてもおかみでこまる。

夏の水車　麹町　前田多美子



○石ぶみ

金澤市　竹田松子

見はてもわかず荒れにたる眞夏
野原に
芽を吹きて幾むらつゞき葉も
繁る
いばらの蔭に湛へしは「愛」の

泉か
途絶えたり草は隠れて流れつゝ。
行き悩みたる旅人のしるべ―木札に
國々の華文字書きしまぼろしを
跡のあとのむき／＼に偲ぶ今はし
ときめきぬ胸は―錆びたる馬沓に。
陽炎ゆるゝ日ざかりの空を仰ぎて
つと取りぬ鑿の一ふり―日は沒れど
覺束なげに蚯蚓這ふあとや今宵の
草枕―常闇辿る夢うつゝ。
あさけの光、日の翼―かくて日ざ
かる
眞夏野に閃めく影はいかづちか
鑿ふるたびに喘ぎつゝ、やゝに讀ま
るゝ
石標は―泉のほとり「愛」の道

木札はどこにかかつてゐるのか、今こつこつとたゝいてる人は何者で石は何になるのか、出來上らぬうちから愛の道をしるべするいしぶみと言ふのもをかしいし、榜示杭をいしぶみとは名づけられまいと思ふ。

○小春の海

岡山　桐本悦子

其大城われは見たりき
うすきりに浮びてあるを。
水の上にわれは見たりき
美しき絹ひるがへし。
珊瑚のおばしまちかく
舞ひ謡ふ清げき人を。

渚を「しよ」と訓んだり、帳に「ちよう」のかなをつけたりしたのを見ると、自分で作つたのだかどうだかとさへ怪しまれる。かりそめにも藝術に心を寄するなら知らなくてはならぬ假名位は學んでいたゞきたい。

○夕ぐれ

伊賀　關本梁子

終日のつとめにあきし
いとよわきわれのこころよ
純色の空のあなたの
くれてゆく灰色雲を
何となうながめてたちぬ。

ありし日のかなしきおもひ
凶夢に見しおもかげの
いとほのにうかびてそすれ
たそがれの影をし見れば
わが頬には涙ぞつたふ。

疵なきもの必しも玉にあらず。

○夏の晝

越後　原つねを

石あつう焼けたる道を、
喘ぎつゝ旅人一人、
はた／＼と扇子せはしく、
過ぎて又人の影なく――
木々の蟬今し鳴きやみ、
草も木も葉を萎み垂れ、
溝川の水涸れ／＼に、
浮び寄る雑魚は息絶え、
風死して聲なき時を、
萬象を壓して獨り、
赫々と擅なる、
威をふるふ晝のたゞら日。

これも住所がかいてない、失敬ぢやないか。自分は中學文壇で、越後原つねをといふ人の頭を光らした鶏冠と「僕は田舍に土百姓をしてる青二才だが諸君手紙をくれ」つてなどの書いてある文とを見た。この「夏の晝」の作者と同一人だとすると、愛嬌がつきる。さらに／＼女めかして假名を書いたのが虫が好かない。これはしかしかんしやくまぎれに當つていふのではない。

新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は乙種に據る。

地　○女の職業

神田區淡路町一ノ一尾立方　駒形すみれ

女は天性人の妻となるべきものであるから別に職業などは覺えなくてもいゝと云ふ人も御座いますが、家計の許す限りは職業を覺えて置くと云ふ事は必要な事であらうと思ひます。古から我が國では女は男に頼るべきものと思ふて、職業など覺ゑ樣とする者はありませんでした。それが段々子孫に傳つて、今日の樣に腦力が發達しなくなつて、職業を輕んずる樣になつたのでありましよう。然しこれからの女の取るべき職業は益々擴張されて、何所の國でも女が男の領分に立ち入つて盛んに其の職を蠶食する樣になるのでありましよう。けれども女には身體上の故障が多いから職業に就くに適しないと云ふ人も御座いますが、男だとて病もあれば、身を損ふ事もあるではありませんか、勿論かよわい女の身で男と對立して行くと云ふ事は無理な事で御座いましよう、けれども獨立して行ける位の職業を覺えて、男の輕侮に對して反抗心位は起してもよろしからうと思ひます。一體女が男に翫弄物視せらるゝのは何故でありましようか？つまり自個の力に依つて立つ丈の職業を知らない爲め、絶對的に男を頼り自然と翫弄物視せらるゝ樣になるのでありましよう。して見れば女だとて自分で獨立して行ける丈の職業があつたならば、男子から輕侮される事もありますまい、また不幸にして夫に先に逝かれたとて、左程の不幸を託たなくてもいゝので御座います。

一體我が國の女は意志が弱くて自分は女であると云ふ觀念を常に心に置いて男に一歩を讓る、從つて世の人も女には同情を表する、其の同情に依賴して仕事をすると云ふ樣に、例へ自分に充分な技倆がありながらそれを發揮する事が出來ないと云ふ事は實に口惜しい事ではありませんか、こんな事では折角起りかけた女の職業も發達もせずに廢れてしまうかと思ひますと、私は實に齒痒いので御座います。それから技術上の作品は人の精神をそれに打込むで始めて立派な物が出來るので御座いますから、よき精神、よき人格を作ると云ふ事も亦必要な事だと思ひます。

女子も此點には餘程氣が着いてきたらしい、職業問題も勿論此點から立脚して見ればなりません(評)

【人】

○小間使日記と經驗

仙臺市北六番丁百九十二番地　原　霜峰

たしか五六年も前でしたらう、讀賣新聞に小間使日記として桂の卷、牡丹の卷と云ふ題で日記文が掲載されてありましたが、華族樣あたりにこんな事はあるまいと、作者が好奇心にかられて單に空想を描たのだらう、殊に文も上手で小間使などにはとても書けるものでないと、全々其事實を否認して居りました所が、私も或事情で某侯爵家に御奉公する事になりました、其れで初めの內は、唯々自分の失態なき樣にとのみに氣が奪はれて、何事にも更に氣が附かずに、一ケ月暮しました然し段々に馴れて仲間の者からも色々な風說や、事實を聞たり、近所の噂も時々には耳に入る、此の樣にして一ケ年計り御務をして充分なる研究と、經驗とを積んで遂ひに御暇を願ひて片山里に歸りました、成程、小間使日記は確かに實狀を描いて居ると云ふ事が初めて解りました、家庭の紊亂！嗚呼、大厦高樓花崗石の雄々しき御門の內、花園に咲き香ふあの美しい草花は何んの爲めにや、妙へなる琴の音は誰が御手によつて御調べにや、都大路を砂烟立て飛ぶ箱馬車の、此等は皆彼等殿方の御一人か、美服、飽食、出づるに馬車、寢るに絹布、榮耀榮華を謳さるゝ殿方が、御家庭は果して如何に、宜なる哉、人爵よりも天爵、寧ろ汲々として晨に星を戴き、夕べに月を背にして歸り、終日の疲勞を親子諸共、食に就き、談笑の裏に寢に就く、此人の囊中黃金はないけれ共堅固なる精神がある、立派なる家屋はないけれ共和氣は藹々として滿ちて居る、美服はないけれ共其軀だからは希望の光りが輝いて居る、神聖なる勞働の馬車は常に彼等を乘せて遠近を驅りつゝある、絹布はないけれ共平和の床は常に延べられてある、樂しい哉、此の家庭！小間使日記の實地を經驗した私は、考へました、人氣の少ない此片山里に居つて、眞に愉快なる眞に樂しい家庭を作るこそ私の望み。

少しかたくろしい處もあるが、事實が面白い(評)

【秀逸】

○愛嬌

大阪府　寺部君子

女に愛嬌は今更申さずともの事ですが、若之を取り去つたならば、花の無い櫻の樣な物で御座いませう。怎麼方でも、多少愛嬌の無い方は有りませんが、知人

とか男子の方には笑顔を見せても、其他にはにこつとも成さらぬ方が多い様で御座い升。何も知らぬ人に迄にこ〳〵と、呆痴が涎を垂した様に仕て居るのが、好いとは思ひませんけど、心持優和く仕て居れば、自然表に現れて、其人品も思ひ遣らるゝ事と存じ升。餘り愛嬌が好いと藝妓の様に卑くなるとて、昂然と澄まし込む人が御座い升が、何も心を高尚に持ても現れる愛嬌は少しも卑く無く返て人から敬愛せらるゝ事と存じ升。

先日汽車の中で、奥様風の人と今一人奥様とも孃様とも付かぬ二人とも立派な装飾をした人が乗て居られました、車中の花と言はぬ計にして居る處へ、なりは左程でも御座いませんが、美くしい人が又二人乗りました、すると先の人が一睨して、フンと言つた様な顔仕て横向きますと、此方も負けず、睨め返しました。恁う成ると美しくても、優淑な處は兎の毛の先程も有りません、此も皆プライドから恁う成る事と存じ升。什うか男女の別なく公平にやさしい心を持て戴き度い物です。虚榮心を捨てゝ、真實淑かな心を持ちたい物と思ひます。

甚だ選者の意を得たるお説です、女は此心掛を持つて居れば屹度幸福てせう。（評）

休みどき　三河　近藤道江



○投稿家論

相模　鍋田靜子

私は不才の身でありますが、女子文壇の投稿家諸孃に就いて一口評を致します。

美文では山田邦子様一等に指を屈せなければなりません。而も本誌の特別誌友としても恥かしくない。

次が田中久子様、青木高子様菊地柳子様、小山仲子様、鹿間久子様の五名です。次がお伽噺、北村光子様が最もお上手でとりどころがうまい。次が井上とし子様、光子様には一だん劣つてゐる。

次が小説今の分では深瀬ます子様が大將で最も老練家

であります。が、いざと云ふ場合にはあはてると云ふ風がある。文壇の花に掲載してある小説を見てもわかります。次が服部貞子様、最も新派小説家であります次が田中久子様であります。次が論文と日記文、之れがと云ふ人がないのが遺憾であります。

此度は新體詩、山田邦子様が本誌の詩人でしよう。次が長曾我部菊子様、河島和歌波様、天似子様、根本松枝様、河野まき子様の五名であります。此度は實用文白浪様の作なら誰れに見せてもほめる。

次が菊笠光子様です。甲種は之れで終へましたが乙種は別に論ずるに足らないでしよう。

まだ甲種の方で有望家が澤山あります。小笠原秋子様熊野ぬい子様、濱部風窓様　森下花子様、依田花園守様、松永しげ子様、秋山欣子様、中村勝子様、曉子様八千代子様などです。

我々は此の女子文壇の名聲をなほ一層高くする事を心得て居らねばなりません。高くするには諸嬢が才筆を振つてよい詩文を投稿するのが必要であります。

此の一口評は私の思つた事だけ述べたので、必ずしも當つて居るとは限りません。違つてゐるのもあるでしよう。又述べたい事は折を見て申します。

先づ穏かな評論で大抵は當つて居ますが、乙種の作家を無視したのは何う云ふ次第です、作物に長短の差こそあれ作る難易に甲乙の差別はありません、大いに乙種作家の爲に其妄を辨ず（評）

○再び田園生活を論ず

紀伊　木下操子

家内總出で麥刈に行つてお晝の御飯に歸つてきましたら嬉しや女子文壇は戸の隙間に挾まれて居つた、で早速開いて目次を繰て見ると新論文中に「農業と投書」と云ふのが目に付いた、私は自分の仲間でも得たやうに嬉しく感じて讀んで見ると、實に驚いた、農業は苦しいから厭だと云はれて居る、それは樂しいとばかりでなからう、時には苦しいこともあらう、けれども其苦しき業務を終へて後始めて樂しいことは來るのである古から「風雪を經ざれば春は來らず」と云つて居る、貞水様も苦辛して作つて投書したらこそ二等當選と云ふ榮譽を得たのであらう、即ち喜びを得たのでしよう何事でも眞の快樂は坐しながら求め得べきものではない、私は決して面白い事を書こう名を賣らうとて投書したのではない、私は飽く迄も田園生活は世界の樂園だと思ふ、若しお疑なれば農商務省でお調になつた統計表をお覽なさい、高齢者の比の一番多いのは農業者である、又徴兵適齢の合格者の比も一番多いのは農業者である、是を以て見ても農業は一番樂しく健康に適して居ると云ふことが分る、元來人間は無病長壽であつてこそ眞の快樂は求められるのである、いくら樂に遊んで居つても藥ばかり飲んで青い顏して一室に籠つ

て居ては少つとも面白くないのである、御覧なさい世界の一等國と云はれて居る英國すら田園生活を奬勵されて居るではないか、兎角世は文明になるに從つて勞働を嫌つて人口は都會に吸收せられるのである、是は一面から云へば商工業の發達した爲であるが我々農業者に取つては決して賀すべき事ではない、是は田舍の勞働賃金を高むるからである、然るに我國今日の狀態は田舍勞働者は漸次都會に移りつゝあるのである、であるから少くとも農業の眞價を解するものは一日も長く田園に止つて農業に從事せねばならんのです、それに貞水樣は何か外の家へ嫁きたいなどゝ思ふことは度度あるとは何うも農業に從事しつゝあるお方に似合ぬことをお云ひなさる。

少しお話が餘事に渡りましたかは知りませんが決して私は農業は嫌ふべきものでない、樂しい者だと思ふ、前にも云つた通り私は決して人樣のやうに面白半分に文章を作るのでないから人に中傷せられたり反駁せられたりすると堪へきれない性分であるから此文或は氣激して思ひの丈の百分の一も書けて居ないか知らぬが眠たい目を忍んで書いた此文、幸ひに御掲載の榮を得たなれば私の喜びのみならんやである。

是も一面の理で、農桑の人は宜しく此の覺悟を持つて其生活を樂まねばならぬ、貞水女は苦しい方面から見て之を論じ、木下女は幸福の方面から見て之を論じて居るので、既に立脚地が相違してゐる、此う云ふ風に論戰して行くのを世に水掛論と云ふ。木下女は貞水女の論を自分が反駁されたやうに取つて居られるやうだが其れは間違ひです、天下田園生活の快樂と幸福を論ずるもの豈に木下女史一人のみならんや滔々として田園生活美論を唱へてゐる、寧ろ貞水女の如く悲觀した論は甚だ少い、けれども假に貞水女をして都會に住ましめ、都會論を作らしめたら必ず都會悲觀論を作るでせう、只何も彼も考へず、むやみやたらに田園とさへ云へば美しいもの、樂しいもの、神樣の國のやうに讃嘆する人達の爲に貞水女の論は比較的、眞を云ひ、自然を表はしてゐたのである（評）

○繪畫の研究

名古屋市　きよし

本誌の圖畫などでもさうだが、隨分不出來なのを時々拜見する。然し、此不出來だと云ふ中にも、眞面目なのと極拙劣で居て、書きつぱなしのとある。前者は例へ下手であつても、發達の見込があるが、後者にいたつては、到底上達の見込はなきのみならず、繪畫の研究については、實にいみ嫌ふべきである。

筆も働かず、繪畫上の眼識も皆無のくせに、只飄逸だとか、洒脫とか云ふ、大膽なことを、試み樣とするから、遂に二目と見られない樣なものが出來上るのである。斯樣なことは、よほど筆さきの熟練、及び繪畫に對する智識が、進むから初めて試ることとて、到底初學のものが、生意氣に、致す可きことではないのである。されば先づ初學の中は、どこ迄も、運筆の練習をつゝま

ねばならぬ。然し繪は筆さきで、書くと思ふと、飛だ間違ひである、繪はどこ迄も心で書ねばならぬ、心で書くと云へば、諸孃の中には、或は疑れる方もあるかも知れぬ、然しよく考へて御覽になれば、自然わかるのである。早い話しが、虎を書いて猫に成つたなどの話しを、よく御聞でしよう。是等はすなはち、心を入れて繪を書かぬ、心から書いた繪でないから、遂に斯様な結果になるのである。例へ下手でも心を入れ、是に熱中して書いたならば、下手なりにも虎と見ゆるのである。是などは一例にすぎんが、隨分世の中には繪は筆で書くものだと考へて、かんじんの心の修養をつまず、平氣で居る人があるが、實に注意せねばならぬことである。繪畫の研究については、一つは運筆の熟練も必要であるが、第一は心の修養がかんじんである。心の修養と運筆の熟練と、相まつて初めて生氣ある、氣品の高い繪が出來上るのである。

繪畫の論(評)

○夏　姿

奈良縣　福西田鶴子

夏姿！待ちし夏姿は發行された。先づ第一に、我が國の女子教育が如何に變遷して來たかは、戸川様の御説明て一目瞭然、磯様の燈籠の祭は、よく、教訓的で、文章構想の巧みな事は敬服の外ありません。がしかしよく眠つてゐる龍なれば、其眼や舌の工合は、よく分らぬやうに思ひます。そして孝子とも云はるべき者が放火したやうに書かれたのは、少し遺憾です。筐田様の小品二篇は、妾の好きな文章で、お手本ともすべきものでせう。吉野様の日記の趣味で、只今流行しつゝある日記の來歷がよく分りました。山田くに子様のおもひでは、賦に及び難き筆致で、いつもながら恐れ入りました。北村様の小說、時流は、淑德の薄れ行く今日、かくも放蕩の夫を持ちながら、柔順でよく貞淑を守る所など、得も云へぬ妙味があります。世の妻女たるものは、かくありたきものです。祝藁の和歌、篇を捉へて洗濯を詠み出てたる所、詩趣があつて、三四の句で面目活動してゐます。秋山次子様の去年の夏日記は、仲々巧みにいひ廻はされてあるけれど、あまり氣取り過ぎて少し厭味がある。井上年子様の實用文嫁ぎし姉へは、さつぱりとしてあどけない所、上出來です。天以子様の新體詩悔は、痛切な筆法で、悲哀に讀まれました。草村瑩子様のお伽噺花渦は、亡き母を思ふの餘り悲變じて樂となる、幼子の天眞爛熳よく寫されてある。小笠原あき子様の論文女の武器、可成りの作である。愛の心、其武器でせうか、柔順で愛嬌のあるが、何よりの武器だと思ひます。黃紫女様の地ひゞき、幽妙なる筆致の品としては上々の作。紫雲女様のお勝手多勢は、よくその實況が寫されてある。文章も巧みな

もの。芳枝子様の學校生活質素は、仲々好い質風だと思ひます。女子文壇も號を追ふて面白くなりました。希くば益々健全なれ。盲評御免遊ばせ。

必ずしも盲評でない(評)

○感じたまゝ

周防　靜枝子

世の中で、私等に最も新しい知識をあたへ、そして此盛なる社會の進歩に取落されん様にしてくれるのは書籍よりか、雜誌よりか、私は尙新聞の方が其以上、勝つてゐるやうに思ます。

まづ電報、社説など云ふ欄から、雜報廣告など云ふ欄に至るまで、日毎に變つてゐないのはありません、上は御かしこき、雲の上の御方様から、下は賤しき民草の出來事まで。是はとばかり、新らしき珍らしき事のみ、さては遠き異國の有様まで、何くれと新らしき出來事掲げられて、あはれ此片田舍に住む、賤の身も、たゞ一室の内にて、世界の事情を伺ふ事の出來るのも、皆ことごとく、この紙の御影であります、私等も、便りなき淋しき、此片田舍に、住居しては、されど、斯も有難き恩の露にそだつのこそ、いと〳〵幸福なるものと、よろこんで居ます。

一度ひらいて見ますれば、直に國政の可否も分り、又現時の教育の善惡もしり、或は海外諸國の事情など、電報欄にて昨日の事まで、すつかりしられ、さては文學の變遷から商工業の發達に至るまでも載せられて、これ程調法なものは無いと思ひます。

文字の使ひやうは拙いが、言ふところはよい(評)

つり

伊勢　河村富子



短文

福井局選



規定　十六字詰七行以内、總て振假名を付くること、締切前同斷、懸賞は丙種に據る。

天　○好な事

岐阜市縣町四九二番地　篠田とみ子

私の好な事は太い五色の絹絲をごちやごちやに奉書紙の上へバラリと放る事、郵便切手の一錢五厘二錢五錢三錢十錢等を澤山に白絹の上へハラハラ落す事、新しい十圓紙幣や繪端書をくりかぞへる事、いろいろの花いちり、幼兒相手に遊ぶ事、リボンの色々を風に吹かせる事てす。

豪放の氣象あり、たゞの女てない

地　○私の村

岩代安達郡和木澤村　根本朧月

私の住んで居る所は生絲の産地で、村はづれの丘に登つて見ると廣々とした所に桑が植はつてゐる、五月時分になると靑々とした其所々に絕えず少女の桑つみ歌が聞えます、やがて其歌が聞えなくなつた頃には、家ごとに生絲とる少女の歌がもれるのです。

好い感じがする

人　○朝日

山形縣西置賜郡豐川村字小白川　杉葉女

春の彼岸過ぎると、屋敷鎭守の大宮明神の五葉松と、大杉との間から、夏至になると、其の北のお文殊樣の松の森の七分目頃から、秋の彼岸になると、三角點の建つてた左りの曲つた櫻の根本から、冬はずッと南の大杉の三枝目から、日はそろそろ昇るのです。

自然に注意することの深い人

秀逸

○御褒美

岩代　泉花枝子

淡紅色に墨繪の花模樣瀟洒した更紗壹反、お父樣のお辨當包、兄樣と妹の風呂敷各一枚宛、お母樣へは座蒲團の表を裁つて、殘つた内から妾の前垂の紐丈とつて、殘餘は今年三歲になる季妹へ、夏着の改良服を調製へてやります、之が女子文壇の御褒美て出來る。

是は何よりの賞狀

○四季の神

麹町　野村光子

冬の神樣は御髯も御頭髮も眞白な御慈悲深い御祖父樣の樣な秋の神樣は一寸弱々しそうて淸艶な叔母樣の樣な夏の神樣は靑春の血潮充滿し居る兄樣のやうな然して春の神樣は濃艶な

御優しい御花のお好きな姉様の樣な御方々であらうと思ひ升。

聯想の豊かなるは詩歌を愛する人か

○夕立の音樂會　滋賀縣　婦貴子

今まで青かつた空に黒雲の幕が張られますとあま蛙が音樂會を知らせます暫くしてピカ／＼と電氣燈がつきますと雷の太鼓がなりますヒユーと風が笛を吹いたと思ふ間に空から澤山白糸のかゝつた琴が出て葉や屋根て奏てますどこかて鳥の三味線も聞えます。

うまく考へました

○雨の日　千葉縣　吉田やす子

雨の日である淋しい雨の日である小窓に倚ると紅の椿がぽたりと落つる又おつる泣きたい樣な氣がする眼を反して遠い鳥羽瞑を見る青柳がくれに紫の傘がゆくふと其の人をさまざまに思ひ浮かべる雨の日は淋しい。

口語詩に似たり

○秘密の小包　大阪　幸子

四月に女子大學へ行かれた姉さんからお祖母さんに、誰にも見せぬやうにとの前ぶれて小包がきました。お祖母さんは莞爾々々しながらお座敷へ持つて行つてお開きなさいましたら姉さんのお襦袢が三枚に足袋が七足、それから眞黒に汚れたお衿が十八掛も。

お祖母さんのあてちがひ

○お部室　本郷　朝井松子

十六羅漢の掛圖、香爐をすゑて、薄鉢に河骨活けたるは方丈樣のお部室、山水の軸、水盤に遊ふ石菖をあしらつて古銅の筆立に孔雀の尾二枚さしたるは漢詩人の書齋、宣長の筆になれる短冊の幅、釣花活に朝顔を遠州流にてものしたるは新夫人の、三宅先生の水彩畫の額、七寶燒に薔薇の一輪挿したるは女學生のお部室。

何の室に住まうか

○田舍の少女　陸奥　小川京子

私の村では女の子が七ッか八ッにもなれば美しい花や青物畑の一部をあたへておきます、いゝ頃になればそれを取り町へ賣りに行つて「青物ようごあすか」と少さくふれてゐます、こうして貯めたお錢で盆や正月に赤い着物を買つてもらつて嬉々としてゐるさま心から可愛らしうございます。

素朴愛すべし

○山里の華　静岡市　北山里子

鶯が老いて、時鳥が啼き初むる頃から、山里はお茶や養蠶でそれはそれは忙しくなります、其れが終ると直ぐ田植てす、山も田も美しい鄙歌が

聞えて、眠つて居た様な山里の華は此の季節でしよう。

山里は自然に伴ふて人事も變化す

○習慣　徳島縣　野菫子

私は人様から御手紙を頂きました ら、直ぐ御返事を差上ぐる様に習慣をつけてゐます、それが初の内はのびのびしてお氣の毒をしましたが此頃では漸くなれましたので嬉しうございます。

易いやうで難いこと

○世の姿　大阪　田中とき

是は津國浪速なる玉江の橋の袂に生る柳にて候。月も日も葦より出て葦に入る其昔はしらねども我住初てお倉邸を控へ雪池先生の産湯の井も間近なり今學屋を前に後にいそしみの人を朝な夕な送り迎て伸びて行く質も移れば變る世の習かな。

此の謡曲には一驚を喫した

想　文

○女學生の模範　愛知縣　紫雲女

裁縫女學校の生徒は保守的で温順で、女子大學の生徒は進取的でハイカラ。職業學校の生徒は實用的で質素。最も模範とすべきは學習院女學部のお生徒さん。優美高尚でしかも品が好い。

先づ的中

○常夜燈　三重縣　長井佳月

常夜燈と書いてある字もちぎれちぎれ、いつ張つたか分らない障子の紙は、半ば破れて折れ返つて居る。油皿には昨夜の油は、少し殘つて虻は黒く焼けて、死んで居つた。

鎮守の杜の木立深く

○彼方のくに　信濃　太田黄紫女

西の秀つ峰越へて遠く沈みゆく太陽は空を卵の黄味色に染め、片れ雲をさふらんの花の様に染め、そして潮の片側は薄紅く片側は紫がゝつた水色をして暫らくは恍惚とさせます、あゝ彼の向うには——嶺の彼方には、どんな美しい國があるでせうか、落日時の海——海！はどんなに美しいものでせう。

何處まで行つても四の空は美くしい

○こし水の音　伊豫　曉子

私の住んで居る所は極く家並がつんで居て夏の夜などは大變な暑さでございます、心地よい音をよする前の小川もなく下涼みする夕顔棚もないのですから、私は毎夜水こしの中へ釣瓶二杯の水を入れそれを眞鍮の金だらひに落して其チーンと云ふ涼しい音をきゝ乍らねむるのです。

興味あり

○他國の友　奈良縣　よしみ

小川を隔た窓と窓とのこちらには私むかうには友の君、いつも川越に種々の談話もすれば音樂の合奏もします、又金線が引いてあつて何なりと取り遣りする事も出來ます。そうしてこの小川は大和と紀伊との境をなして居るのであります。

妹山、背山

○夕立の後　紀伊　木下操子

夕立が止んだ、パアと明るい光は雲間から漏れた、邊りの木々は一層青く見へる、一陣の風はサアと吹いてくる、すると傘のやうな蓮の葉は一時にゆらぐ、と銀のやうな雫はホロリとこぼれた。

芝居　千葉縣　松ヶ枝濱江



○病床の夢　鳥取縣　一色増子

黒い石塊の樣な虫が何處からともなくはふて來ろ、驚いて身を動かさうとする一刹那、此身體にくひ付いた、聲を出すとも逃げ去る事も出來ず七轉八倒空をつかんで苦んで居る中にコソコソと枯骨をかむ音が全身に響き渡る。感覺力は何處へか消へ去つた。

○虫供養　越後　白菊

私の家から、二里ばかりはなれた、小山の洞照寺と云ふ寺に、毎年七月二十五日から、三日間盛な虫供養が行はれるので、私は祖母樣のお共をしては、お參り致しますの、恰度其日から學校がお休みなので！。

○夏の夕　深川　井上秀子

私は何が一番すきと申しまして夏の夕暮ほどよいものはないでしようひる間のあつさにひきかへてお湯にても、入つてすゞみます時のすゞしい事お月樣はそらに上つて私のかげは長く地にうつります皆樣といつしよをにかげやとうろくするのがなによりたのしみです。

○村芝居　靜岡　杉山じゆん

今。寺子屋の場が終へた。鳴を潜めて居た見物は一時にさはぐ。泣いて居ると思つたおけいちやんはハンカチーフの下で柿をかじつて居る。一し

きり仲裁りがうるさい。急に窓側て小供が啼く。叱つ叱つの聲、間もなく木の音、柏手が起る、之れも暫く幕が明けば亦靜の境に入る。

○妾の職業　高槻　赤松久子

妾は牧場の娘で有ります。皆様が學校へお越しになつて、勉强なさるのが羨ましい乍ら、妾は涙を飲んで、家業を助けて居るので有ります。妾お友達は、牛より外には有りません。日毎、青い〳〵、そして滴る樣な綠の葉陰て、牛の世話するのが、妾の本職です。

○七夕　相模　もみぢ

今夜は七夕て、牽牛織女の二星が、年に一度天の河にあふ夜です、お月様は美しくかゞやいて居り升、ふだんならば星が降るほどあるのに、今夜　一つもありません、きつと皆遠慮したのでしよう、私も和歌を色紙にかい て星に手向けて、その才能を祈りましよう。

○只一人　靜岡縣　和田重子

私は三十八年で學校を高等四年を半分計りで退きましたが私と同級生では女子が二十五人計りありましたが今御手紙の交をしてをるのは只一人です故私はその人を有難く思つて居ります。

○髷の形と花　京都　吉田しづ枝

女の髷を花にたとへて見ると、丸髷は菊、島田は牡丹、桃割は矢張り其名の如く桃で、お下げは紅梅、銀杏返しは躑躅、三ッ輪は水仙、蝶々は葉、廂は薔薇て、當今流行の人格髷は櫻で、私は右の中一番島田が好いてゐます。亂れ髪は雨に惱む海棠にも譬へませう乎。

○上品な御名前　京都　なてし子

お隣は奥様が千鶴様で、上のお孃様が初子様、次のは嵯峨でお出來なすつたそうで嵯峨野様、三人目が三千子様、四人目が男のお子で賢太郎様と仰しやるの！皆様揃つた、好いお名前私共はほんとうに羨しいですわ。

○悲しい汽車　常陸　那賀子

私はお友達の方から、汽車に乘るのは樂しみなものだ、と何日も何日も話されますので自分が乘つた事のないのを恥しめられる樣なので、是非一度は乘つて見度いと思ふて居りますと、トウトウ乘りましたそれは都の姉がキトクの報に接して上京する時悲しい〳〵汽車に乘りました

○夜の色　大分縣　富成信子

宇宙は早や夜の領となつた。家も木も皆影暗く、眠つた樣に寂寞りとなつて、木の葉一つ搖がない、寶玉の樣な許多の星が、時々思ひ出した樣にキラ〳〵する。向ふの煙筒から、淡い煙りがすうと昇つた。噫。寂しく悲しい夜の色。

○わが家　群馬縣　須藤みどり子

私共では老母に父母に私の兄弟が八人都合十一人の家族でしたが此春姉さんが嫁に行きましたので丁度十人になりました家は農業で私共は毎日野良へ出るのです　さうして夕野良から歸つて家内十人團欒して夕飯を食べる時には　影鮮かな洋燈が私共を平和な光に包むのです。

○洋傘　越後　吉田りた

私は人様の樣に流行のこうもりはもちません、只昔のが一本あるだけです。それに少さい穴が一つあいて居ます。お母様はいつの間にか其こうもりをなほしてくれました。それにほしいとも云はないのに一本買つてくれました、私は大切に藏つて居ります。

○夏のゆふべ　岩手縣　横澤清子

溝の中には、ぼうふらが盛んに舞踏をして居ます、蚊はうたをうたひ出しました。次第々々に黒そして天地は此のうたにつれて、ずんで行くのであります。

○訪問　岡山市　不出女

勢よく家を出る、途中前夜から考へてゐた挨拶を胸で繰りかへす何度も、と御住居が見え出すハッと思つたので動氣が打つ、近づくにつれて高まる、鬼の住居へでも入る樣な氣で玄關へやつと、夢中で御免。

○此の手　信濃　駒澤ひろ子

いつも文書く此の手。着物を縫ふ此の手、着物

を著る此の手。水を汲むのも此の手、お米を磨ぐ此の手。御飯の茶碗、箸を持つ此の手。あゝ此の手なくて一日も生き長らへて居る事が出來るでせうか。

○雹　京橋　すみれ

一天にはかに墨を流した樣に暗く成て來たと思ふゝ突然すさまじい雹の音ハッと驚いて机にうつ伏してしまふと今度は鐵砲を亂打するやうな音っゝ立つて庭を見ると大雹が盛に降て居るのでした今年七十五になる祖父は未曾有の大雹だと申されました。

○毎朝　兵庫縣　三輪みつゑ

私は、花の四月この學校に奉職いたしました。毎朝露深く畔道をゆつくりと歩きながら、すきな御本を讀みつゝ、「何にか生徒のよろこぶような話はないかしら」と讀んで居る中に、いつか學校に着いてゐるのが例であります。

○懸命　常陸　白菫女

私皆さんのお仲間入りしましてから五月になります博學な皆さんに眞似て出したのが短文四俳句四和歌八學校生活四總計二十まだ一度も載つた事が有りませんのです責めて一度もと懸命に励んで居り升これでも載る樣になれましようかと心細いのです。

○友だち　千葉縣　齋藤秀子

私は近所に友だちが五人あるの!!! そして李子さんは詩人に君子さんは歌人に艶子さんは俳人に芳子さんは小說家に都子さんは音樂家に皆目的を建てゝそれぞ〱勉强して居ますの。愚な私の事を滑稽家だと皆樣は申します…。

○螢　三河　富美子

螢籠を提げて居る、妹の梅ちやんの手を引いて身投橋の邊まで來ますると、螢が一匹倒れ相になつて、命でも助けて貰いたさ相に舞つて來て、梅ちやんの、優しい稚兒髷に止まつて、さも安心したらしうヒカ/\と光りました。

○山百合　青森縣　久保石子

私は或る朝山のふもとを歩いて居りました、すると微風が幽香を送つて來ました、たづれて見ますと山百合が岩蔭の淸水の側に咲いて香を送るのでした。

○月光　靜岡　藤波馨

一陣の涼風が水面を渡つて吹くと、岸の蘆の葉がサラサラと順になびいた。葉の間に泡をだし横に這ふてゐる蟹は、月光をあびてキラ/\と美しう光てゐる。

○命の親　秋田縣　佐々木貞子

我が家の門前にある大木のしだり柳は妾の命の親てす、何故となれば今より七年前の大洪水の時、家は流され木は折られ、舟に乘り後れた妾は危い處、漸々此の柳に助けられたのです、だから妾毎年其日々々には御酒を供へて、大切に祭つて居ます。

○故郷　府下　西野秋子

遙に秩父の山々が聳えて、名もない低い山の間を流れて居る水の淸さはまた格別てあります、これが濁つた隅田川の上流とは思はれない位です。その堤の上を馬車が五六人の客を乘せ笛を吹きながら走つて行く、私も其乘客の一人です。

○心地宜い夕　備後　井上年子

恐しい夕立が譯も無うカラリと晴れて、灰色がかつた雲の巾から四方を覗ふてソツとのぞひた月姫が、庭の青葉を淡う照して居る。心地よい夕だ。軒の風鈴を二つ三つ鳴らした涼しい南風が、すうつと隣ののれんをくゞつて青い疊の上を流れて行く。あゝ今夜は蚊も少くない。

○農家　福井縣　吉田梅子

鷄がけたゝましうなく、大きな蓆に白瓜が干してある、葉に染んだ葡萄棚の影で、十二三の少女が一心に字を習て居る、傍に小學讀本が二冊丁寧に並べてあつて、雛鳥が四五羽尻をふりながらはしつて來た、少女が手を上げて追ふ、向の方で父が畑を打つ、鍬の先が光る。

○寄貼　大阪　松田しづゑ

妾は暖かい椽側に出て去年の日記帳を所々裂いて二枚折の小屛風に貼つて見ました、女學校卒業日の嬉しさや君江さんと永き別れに泣いた事や隣に火事があつて恐しかつた事や 春子さんと

頭腦に遊んで面白かつた事や皆この小屏風に集りました。

○百舌鳥　水戸　重子

今まで巣を造つた事のない、百舌鳥が此間から、倉の軒へ巣を造りましたので、奇妙に思つて居りました處、短文の百舌鳥の巣を讀むで、何だか心配でたまりません。

○春雨上り　下谷　菅澤志津惠

絹糸を垂れる様な細い春雨が止むと、公孫樹へまんまるなお月様が昇りました、綻た櫻の花が其の光りをあびて、實にきれいです。こんな晩に遊座をやつたら宜いのが澤山できるなあ、と兄さんが言ひました。

○笹の實　神戸市　高橋　紫峰

裏の雜木林に熊笹小笹が大變繁つて居ります。私の地方では笹に實が生ると其年か又は近年に乾度、穀類が不作だと云ひ傳へて居ります、偖て今年は如何であらうと思つて見に行きましたら少しも實つて居りませんでしたので、農家の人々は天を仰いで喜んで居ります。

○森のお爺さん　三重縣　武部なる子

私の家の前に、小川が流れて居ります。其川むかひに、車屋があります。其家には今年八十才に成つた、お爺様が一人住んで居ります、お爺様の姓を森と申します。村で此爺様を知らぬ者は誰もありません。何でも村で一番早く、荷車を買つたから、其時の、名主様に附けて貰つたのだ、さうです。

○レンズの中へ　福島縣　花　子

花屋の父様からカキツバタをいただいて、夢中になつて活けて居りますと、何時の間にか寫眞屋の兄様がレンズの中へ入れて終ひました。

○今昔の感　熊本　吉田みどり

思へば數年前の私は家庭親族等の愛の中に育てられ世は楽の花の如く人世は蝶の如く此世は圓滿なる天國だと想像して居ましたても自己を自覺するに當りせちがらき浮世の阿責に泣く現今想像と實際とがかくまで相作はないのかとつくづく感じました。

○湖畔の夕　北海道　矢萩池根子

樹茂る山、魚多き水、地の森嚴かな神の郷。落暉に探ふ温泉の香を浴びて、小笠猪頸に湖畔を歸る柴刈の里童が、馬の背に唄ふを聞けば、「お城七卷名に聞く龍よ見たか焔を吐く蛇か來た」湖面を走る和田颪、倒富士の砕けた後に霧が下りた。

○死んで花咲く　青森市　村林矢須子

今は有りませんが、宅に林檎が三本ありました、父が幾ら骨折つて栽培つても花が咲きません、實も結びません、所が不思議にも父が死くなつた年、永く花がなかつた古木の海棠は美しく花がつき、林檎は三木共花が咲いて可愛い實を結びました、其の又實のお甘しかつた事今に忘れません。

○蟾蜍先生　岡山市　池田　芳子

夕飯を了ふとぶらり庭に出た。風は涼しい、桐の葉はゆらぐ、大きな眼を有つたお星様も親しげに木陰から覗いて居られる。と見れば庭の片隅から闇の一塊が吐き出されたやうに蟾蜍先生がひよこり。暫時無言の押問答があつて先生はのそり〳〵と無門の關を獨歩して垣の繁みへ隱れて了はれた。四邊もいつか暗くなつた。

○素顔　敦賀　葭田鎮子

私は、生れてから二十二漸、吾、人、家、自然等を、知る事が、出來てから未白粉を、手にした事はない。此の立派な醜美なる、素顔を、何處しても、白粉で、穢すに忍びず、夫て、清美純潔なる、情神を養ひ、此素顔を磨いて、化粧顔に劣らぬ様に心懸けて居るのです。

○廣告　播磨　おみな子

校中での模範生である大垣さんと田中さんは頭髮迄がそれは〳〵、よいのであります、そして常にセエーム香油を用ひて居られるので、他の方も私もセエーム、私もセエーム、と今では寄宿生徒大方はセエーム香油を用ひて居ります。

○貯金の楽み

神戸市　岡本盛子

妾は家計上止むを得ず楽しき學の門を出て紡績の工女となつてから最早三年餘り今朝夜業を終へて寄宿に歸り見ると妾の机の上に貯金奬勵の回章が來て居ました 妾の貯金金額は第三等でした誠に貯金程嬉しく樂しく面白いものはありません。

○私の號

京橋　野田はつみ

美しい庭のばらに可愛らしい胡蝶が一ツ飛て來てばらとたのしさうにお話をしてゐます白い美しい羽根をヒラ〳〵うごかして……アヽかあいゝ事私はこのかあいゝ蝶の名を其まゝ號を胡蝶としました。

○一本柳

齋藤もと

毎年一人づゝは必ず枝に縊死するといふ不思議な木、其れは八幡社の裏の一抱も有うと云ふ大柳なのです、髪の毛の様に垂が地につく程伸びて幹の根から五尺の高さには古い古い祈釘が六本……村では之を一本柳と稱して居ますが其れは恐ろしい事。

親子づれ　下町　小林清委子



○自炊

三重縣　横井文子

母様いませし頃には自炊などはよほど趣味あるやうに思つて居たのだけど母様が天え行てお星様になられてからと云ふものは毎日自分でするサテ自分にしてみると趣味などは更になく只まあこんないやなことはないと思ひますの。

○理と實

兵庫縣　中田かつ

六つかしい楔の理は知れ共、釘一本思ふ様にうてず。一反の布でする衣服は皆にもならねど、有合せものでは兎角埒あかず。これ等も近き臨の見醜き例か。

○途上散見

北海道　矢萩池根子

今し涼臺には二人の男がまつぱだか。話は興に入つた様子。ソラお巡査さんが……ヒロイと着物ひつかけて眞面目な顔。靜々と巡査が四五間行き過ぎた頃、もう大丈夫とまた着物を脱いて、「其れから如何したんだ」。

○渚

徳島縣　中村勝子

靜かに波がよせて來て、岩に當つて碎けると潮吹が飛むで、眞晝の日にキラ〳〵砂が光ると。渚に打ち上げられた白い貝までが、光りを受けて彩どるゝ波は又靜かに沖へ引返して行く其跡には、小魚が一つ取り殘されて、渚の上をヒンヒン飛んでゐる。

○洪水のあと

丹後　衣子

夕方濱邊へ出た、海はほんとに靡いものだ、一昨日の悲しみも知らず顔に、常にかはらず碧の色を湛へて、油を流したやうな海面には相變らず四周の山々の影を靜かに寫して居る。靡いものだ海は！昨日は荒れ狂瀾怒濤、一度風止み浪をさまつた今日、その面影が何處にある、幾多の人の生靈を沈めた海は どうして見える。

○廢物利用　三河　鳥居ふさ子

私は布の裁ち屑や紙屑を溜めてちり拂ひを造つて置ますそうすると何程かの錢を出さなくてもすむし其上丈夫てよう御座いますから私はいささかの物なりとも溜めて置く必要があると思ひます。

○玉虫　仁川　吉谷美津

四五日前姉の捉て取つた玉虫彼の瑠璃色の小さい體を齒にもまがふ樣な白粉の中に入れて夕方御化粧時の樂しみにして居ましたが今見ますと思ひ掛なくも彼の世のものと成つて居ました私は泣く／＼裏の江戸菊の根に埋めてやりました。

○夕立　信濃　犬飼はる子

サツと吹き立つ風につれて大粒の雨が椽を打つおや、夕立かと思ふまに雷がはげしくなり出して雨がザア／＼と降り初めました。すると今が今まで木陰に啼いてゐた蟬が一時にやんでしまつた。

○美代ちやん　尾張　秋波賤女

愛らしい今年七つの齡の春を迎へた美代ちやんが腸チブスで亡くなつて七日の夜など妾は亡き妹の美代ちやんを思ひ出しては、人知らぬ哀愁に打たれてさめ／＼と直き涕涙を濺らすのです、あゝもろきは人の生命―草葉に宿す白露より果敢ないのである。

○友の手紙　滋賀縣　杉壽

先日久しく音信せなかつた友の許へ手紙を出しましたら、其後へすぐ其友からの、玉章がまゐり誠の心互に行きかふたのであると、思ふと、一入友の手紙が懐しくありました。

○夕立の後　丹後　のぶ子

道行く人や田甫にある人を狼狽させた一しきりの夕立は忘れた樣に止み拭ふた樣な奇麗な庭に浦島草や鉢植の菊が嬉しげにそよ／＼と吹く風につれて動いて居る蟬の聲が又賑かになつた泉水の金魚も心地よげに深呼吸をして居る。

○お友達　廣島縣　富田玉代

私は奥山の農家の娘です、四季折々の草花の友になぐさめられ、毎日農事の手傳ひ、哀れと思ふてか、廣島の姉樣より、女子文壇を買ふた、今まで奥山て、鎌鍬よりほかに持つた事のない私、にはかに、お友達が、出來たように感じました。

○沒書か知ら　京都市　武部柳葉女

お湯から上つて椽へ出た時分に太陽は愛宕山上へ這入つて殘りの光を放つて居りますいつも妾の投書は沒になるから此度は一つと思つて居る内に二ツ三ツ星が出て何處からか琴の音が夕風につれて聞える、此月も亦沒か知ら？。

○長の雨　日向　靜子

降りつゞく雨、今日も中々にやみがたく、しばし空打ち眺むれば、折から目に入るもの白き蝶のひら／＼とまひ行くが無慚にもさゝがにの糸にかゝりぬ。

○幸福　愛知縣　近藤八重

今日の日曜は雨です。兄樣は「チヨツいま／＼しいナア雨でベースもお流れだ。」弟は朋友と遠足に行けぬのでお母樣の所で何かぐずつて居る。ア、私は幸福です、此靜な雨の日何の不平もなく、縫針とつて一日を暮すのです。

○七夕　土佐　高橋白ばら

「いゝ月夜ねもう天の川で七夕樣が會つてなさるわね」夢見る如き姉の一人言に一寸ふりかへつた澄ちやんは今年七つの清き瞳をかがやかして「姉樣明日になつたらあれとつて頂戴な」と一心にたんざく竹につるしたはゝづきを守つて居るのである。

○毎朝の勉め　淡路　千鳥

朝起ると、祖母樣は子守、母樣は臺所、私と妹は御座敷、弟は庭の掃除、末の妹は植木に水やり、一ばん末の弟は祖母樣おいてに遊ぶを規則としてあります、そして、七時には皆、そろふて食事をします。

○小さき角力　大分町　宮成信子

今裏庭て大角力が始つた、力士は武ちやんと虎ちやんと光ちやん。見物人は猫ちやんと菊ちやんと私。私がお菓子を寄附すると、行司の弟がヲンツースリー、それ負くろな負くろな。觀客が可愛らしい紅葉の樣な手をパチパチたゝく。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む　用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は丙種の規定に據る。

天

青嵐一星飛んで海に落つ　秋田縣由利郡院內村　三浦ふみえ

地

花衣ぬぎかふる局々かな　鳥取市栗谷町　一色二葉女

人

蛙二つ啼かぬは歌を思ふなり　越後國頸城郡寺野村　藤原信子

秀逸

玉磨く男を照らす螢哉　群馬縣　江澤古登子
上加茂の鰻茶漬や秋の風　大阪市　梅女
浮かれ猫闇の錦木倒しけり　金澤市　高村やすえ
よべの戀草餅喰ひて仕舞ひけり　群馬縣　竹子
雲の峰月吐き出して崩れけり　石川縣　岡谷久枝

門前の銀杏茂りぬ夏の月　巣鴨　片岡比賀志
苗代に影さす一の鳥居かな　群馬縣　田中もと子
蚊帳吊りて姉と妹の讀書かな　茨城縣　山下百合子
別花の燈うつる青田かな　長野縣　山越悅子
初秋やふんどし白き渡し守　相摸　鍋田美代子
夏痩や月に物言ふ竹床几　神戶市　東川幸子
戶閉れば門田を走る水鷄かな　讚岐　茂子
船で夜を明石の浦や夏の月　大阪市　松宮政子
琵琶彈ず水亭の夜や明易き　上總　石渡景子
朝雨なきく森心や奈良の宿　大阪　龍子
釣床に白帆かぞへる凉しさよ　攝津　小百合
隧道を出づれば高し夏の月　熊本市　阿蘇品さだ子
短夜やまだ片付かぬ臺所　岩代　可愛羅子
歸省して信濃に入れば山凉し　長野縣　唐澤きい
籠枕加茂の夜風の通ひけり　淀橋町　佐々木ゆかり子
學問も嫌になりたる螢かな　伊賀　稻森すへ
夕顏にろうそくつけて湯浴みかな　三重縣　越村文枝
夏の夜やうたげすらしき湖心亭　三河　宮野賀那子
いろ〳〵の鳥の聲聞く暖き　信濃　安坂富美子
初汐や何にうかれて蝶一つ　岡山縣　岡崎保惠
髮結うて額凉しき女房かな　安房　內木千代子
明月や獺あそぶ川の中　沼津　八代筧水
弟の夢まどかなり窓の風　伊豆　高木喜代子
明日かへる旅の名殘や磯の月　板橋　瀬々とし子
初秋や黃ばむ柳に風もなし　佐渡　なみ子
椽側に女珍らし夏の月　青森縣　馬場ちよ子
卯の花や今宵の月はあはくして　南葛飾　紫葉子

新道の砂利打沈む夕立哉　下總　三橋なみ女
野の霧は草刈唄に霽れてけり　下野　栗原くに子
涼しさや籠に組みたる此枕　茨城縣　秋山秀子
籬に風薫り合ふまどゐかな　伊賀　関本栄子
歌人は夕べの花に戀すなり　越後　睦子
鳥雲に入るを見てお乳の人　神戸市　山本幽霞里
涼しさや池の庭行く夏の雲　安房　夏草子
よき人の聲をかすめて飛ぶ螢　千葉縣　吉田白菊
薫風や照射するなる小公達　長崎市　松尾かつ子
母の雛花ぞ昔のうつろひぬ　兵庫縣　那須萱子
秋背いて君に贈らむ紅扇　丹後　小倉白桃子
朝顔の紅きが咲きぬ竹の窓　大阪　小蘋子
涼しさや田圃へだてゝ家二軒　羽前　石川咲子
境内や卯の花かげに僧一人　千葉縣　高木智香子
朝顔に晝顔まじる垣根哉　宇都宮　佐藤ふさ子
白き蝶よべ暁に生れけり　備中　山本友子
遠く一人近く二人の茶摘哉　札幌　竹中丸子
夏の日は田植の笠ぞ懐しき　下總　中山ちやう
紫陽花や人待ち顔の茶屋女　伊賀　岡花子
うろ〱と一人歩行や宵嵐　札幌　阿部八重子
葉櫻の露こぼれけり淡月夜　富山縣　しらみれ
春風に髪亂したる女かな　樺太　眞田仲子
薫風や宵に負ふ子の風車　岩代　泉花枝
青柳や夕月動く野の小川　佐賀縣　嘉悦生子
炎天やほろ〱落つる屋根の苔　京都　大井香園
涼しさや二階に瀧と相對す　北海道　亀谷きみ
疊ろ日や若菜を摘みに山畑へ　下總　岩井白子
夏の月薫の花白き片流れ　札幌　忠子
蚊帳越しに寝ながら見るや百合の花　近江　大角歌子
まきあげて海原みるや青すだれ　大阪　菱田ゆき子
羽蟻とぶ古き仁王の額かな　福井縣　吉田梅子

丸窓や蘇のかげ椽のかげ　神戸市　杉山とし子
釣殿も夕顔も水にうつりけり　大阪　木村花子
黄昏を雀のあさる落花かな　千葉縣　松ヶ枝露子
水打つや葉末は月の宵にして　水戸市　恒子
三萬の佛の顔に風薫る　茨城縣　勝子
松斗り朧姿の月夜哉　福岡縣　福田静月子
こほろぎの初音涼しや藪の中　青森縣　盛岡かく
名月や芒がくれに女郎花　大阪市　梅女
夏しらぬ谷や清水に富みし家　下野　黒須輝子
閉らし戸に秋くわるゝ淋さかな　下野　白百合女
赤だすき白手拭の田植かな　仙臺　岩田よし子
夕潮に馬を洗ふや雲の峯　羽後　明子
雅月や心ときめく笛の聲　上毛　八木芙蓉子
吾が舟は島に着きたり夏の月　上總　蓉花子
姉君は机によりて春の夢　常陸　日下部初江子
夕涼み廊に月のかゝりけり　青森縣　久保石子
溜水にかたまつて居る金魚哉　伊豫　櫻木英子
谷際に棚の落葉や閑古鳥　静岡　北山里子
客送る門や傾く夏の月　信濃　花園守
落されてまろく腹立つ毛虫かな　常陸　白雲女
旭日子の御垣いろどる春の朝　淡路　民枝
涼しさに君と遊ばむ螢狩　千葉縣　寄藤秀子
竹の間の廊下冷き蔭りかな　相模　藤原下枝
此色のはかまの君や燕子花　上毛　須藤あき子
芝刈るや神鳴るからに急がるゝ　奈良縣　福西田鶴子
すゞしさや涼闇がくれに夏の月　仙臺　土井末子
ごう〱と水の流れる蔭り哉　越前　騎田英子
灯のゆら〱磯七村や涼み舟　豐後　立川津矢子
挈擬げば君ほゝ笑みぬ朧月　豐後　江口芙蓉子
秋の夜の物におびゆる病かな　静岡縣　竹田露子
青蛙のあちらこちらや田植歌　信濃　小林しん子

気高さは眞白き百合の夜露かな　日本橋　吉田さく
春日さす美人のかさのなゝめなり　越後　金子たま
南窓や月明かに美人の書　たま子
牛引きて渡るもうれし夏の川　福井縣　清上小芳
五月雨の空打ち仰ぐ女かな　埼玉縣　内野春枝
涼しさや楔笹の上の松の影　和歌山　妹背美代子
嵐凪ぎて雨の色鳥群れ渡る　千葉縣　秋金子雪子
けし散るや机には誰が皆もん品　茨城縣　阿部弘子
涼しさの微風吹き過ぐ鎚かな　横須賀　藤野百々子
夢畑に暑き思ひのかゞしかな　名古屋　村田光子
晩のベースボールや臺に風　深津　道本清香
尋ぬれば今日も留守なりほとゝぎす　岩代　佐藤こう子
河鹿なくや思川邊の深緑　下野　下河邊涙子
月涼しむかしを語る姉妹　臺北　稗貫みつ子
別荘や主人が留守の落椿　山形縣　エス子
五月晴笠新らしき田植かな　大阪　奥野悦子
王侯も知らぬ納凉や蓙むしろ　入戸町　西村みや子
水面に連雲うつる旭哉　靜岡縣　淺原霞月
蕗の葉にハラ〳〵雨や杜宇　北海道　矢萩逸楓子
行春や沖の小島に篝火焚く　伊豆　上原霞子
潮來あたり青樓の灯やうすれ行く　大分縣　岡田房子
鐵欄や柳の外の朝の雨　長崎市　石山凉風
逝く春のまくらに遠し雨の音　中津町　やま川
袷きて夏の心を知りにけり　越後　齋藤とみ
夕立のポチ〳〵と來る水田かな　麹町　銀杏庵
垂き水に流れて春は逝きにけり　沼津　中村松葉
五月雨の哀れとなくやほとゝぎす　深川　牧野はん
旅人もまれて通るよ田植歌　岩代　佐藤香子
一つ二つ木の下闇のほたる哉　和歌山　清水清子
棕櫚の花みだれたり軒の雨　日向　田村ちよ子
春雨に鮎の目の列ぶ宮居哉　伊勢　鳳蘭子

五月雨や縫ときする妹ねむげなり　德島縣　西野ひさし
夕顔に名殘りはありぬ晝の夢　神戸市　幽貴子
堤道を絵日傘さして子守かな　紀伊　大川榮子
花摘みて登る峠や初夏の人　磐城　齋藤もと
星飛ぶと眠人云ひぬ秋の宵　岐阜縣　山口鈴子
夢ふみや都の姉を思ひ草　芝　今川ひさし
ほとゝぎす聞あく飛驒の庵かな　神田　中島朝霞坊
若葉深く瀧の音する峠かな　熊本　萩の舎女
越後路や露老いて新茶實り　下總　高木きく子
田螺なく宵を淋しと小傾城　相樂きみ
昨日のは只の雨なり初時雨　下總　山崎富美子
春の川人なき舟の流れけり　熊本市　茂里鳥子
子供なき家さびしさよ宵の春　佐賀市　田中美枝子
我に萎む机の上の螢かな　栃木縣　黑須雪子
望一が蚊帳に寝ぬ夜や時鳥　山口縣　花散里
人形のそれにも小さき更衣　鹿兒島縣　泉花枝
暑き日や光りて見ゆる屋根瓦　下總　細谷さかえ
涼しさは家内揃て白衣かな　八王子　登美子
行く春をうらぶる君が亂れ髪　下野　手塚妙香
花散るや蝶眠に吊ふ小督塚　京都　金田つゆを
不如歸なくや昔の偲ばるゝ　近江　原木すみれ女
朧夜や庭の立木の深山めく　小石川　鶴見美那子
張板に落ち來る花は柿の花　奥市　百合野白梅
晒起らし池の傍りや百合の花　西多摩　森田しま子
夏の月若葉に入て夜明たり　千葉縣　小倉すみ子



實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は乙種規定に據る。

天　○櫻に添へて亡友の母に

大阪市　梅女

春雨しめやかにふりくらす昨日今日、いとゞながめがちにおはしますらむと思ひまゐらするにも、袖のみぬれまさり候。はや御五十日祭も明後日となりて候へば、歎きのうちにも日は過ぐるものよと、あさましう覺え候、花さきぬとては共に野山にあこがれ、月おもしろしとては共にあはせものせし昔の春こそ、戀しう思ひいでられ候を、まして、御あたりには、朝夕の事につけつゝ、思ひ出の種のみ多くおはしますらむなど、いとゞおんいたはしく忍びきこえあげ候。この頃學校にて土佐日記の講義承り候につけても、かの夫妻が嘆きにも劣らぬ御かなしみの程、いよ〳〵おしはかられ、戀ふるをだにもかたみと思はむとて、忘れ貝ひろはぬ人の心も、げにと今の我が身に思ひあたり候。さても去年の春花の盛りにいらせられ候をり、父の手ずさみに土かひやしなひ候櫻の、名は、揚貴妃と申すを、殊の外めではやさせ給ひ、いみじき花のおもはかな、われもろこしのみかどならねどなど戯れ言さへ仰せられ候ものを、かのみかどに似たるなげきを、このごろわが身に見むとは、思ひもかけずぞ候ひし。今暫しがほどだに玉の緒のたえたまはで、花の盛りを御覽じなばと、かへらぬくり言のみくりかへされ候。今年も花は咲き出で候へども、もてはやさせ給ふ君のいまさぬを、さぞな心うく思ふらむと、いとほしく、明日明後日までもうちおかば、散りはてぬべく候へば、ぬれつゝたをりまゐらせ候。いかで〳〵露ながらこそなき君にまゐらせ給へ。花もいかに嬉しからむ。はた御靈も見そなはし慰さみたまふべくと存じまゐらせ候。私參りてさゝげばやと存じ候へども、れいの涙もろき身のまたもや御袖ぬらしそへ奉らむも、しのびがたく、わざとさしひかへ候。かしこ。

（評）雨の中なる櫻花、すてにあはれは深きを、さりとは心ふかき君にもあるかな、才情溢れたりと謂ふべし。

地　○悲しい手紙

備後　井上年子

姉さん！悲しい〳〵お手紙を昨夜讀みました。
あゝ姉妹乍ら揃ひも揃つて何うしてこんなに果敢ない身の上でせう。何うしてこんなに悲しい運命でせう。私は毎日々々鬼のやうな叔母さんに責立てられ、姉さんは鬼のやうな叔母さんの計略で賤しい〳〵みぢめなところへ勤め奉公――あゝ何うして泣かずに居られませう。せめて是が親身の叔母さんだつたら、まさかかうまでは――あゝ愚痴、々々、眞實に愚痴でせうか。姉さん荒れに荒れて、名も無い雜草の繁つて圍んで居るお墓の下に、眠つて居らつしやるお父樣やお母樣は何んなに思ふて居られませうか、意久地無い姉妹と恨んで居らつしやるでせうか。姉妹とも揃ふて無事で居り乍ら月に一度のお墓參りも出來ないとは――あゝ何んと云ふ情ない身の上でせう。
お友達にお前の姉は女郎ぢや地獄ぢやと言はれる度に――私は腸を斷られるように――けれど私はさう思ふて居ります。たとへ其身は女郎でも地獄でも、心さへ清かつたら乾度神樣はお見捨てにはなりますまい。いつかは姉妹で今の身の上を笑ひ乍ら昔話にする時が來るでせう。乾度來ませう。
あゝ云ひますまい思ひますまい。
破窓からのぞく淋しい月も、絕え〳〵に啼く虫の音も思ひ樣一つで、美しい月とも面白い音樂とも聞えます姉さん、清い梅の花は前に幾多の霜雪を忍んで、時を待つて、遂に美しい花を開くぢやありませんか、もう少しの辛抱です。どうぞ悲しまずに居て下さいよ。

（評）之れを讀むもの潸然たらざるなきはあらじ諦めて居る中に諦められぬ恨の跡、深刻なる筆と謂ふべし。

〔八〕○歸省を促す文

大阪市　木村はな子

歸省の折には何くれとなく御心添下され厚く御禮申上候、都にさすらひし身には、一眸十里とやらの田の面を渡る綠の風はさすがになつかしく候、小濱の流れも新綠漲りて鮎釣る人も數多く見受け申候、昨夜妹と夕日が堤をさまよひ候、眠れるが如き新樹の蔭より吐き出す幾萬の光は、晉壯觀と申さうより他之なく候、香櫨園や濱寺にて放つ、此處に一ツ彼處に二ツの螢すら都人の目には美くしう映じ候ものを、まして自然の懷に養はれて、廣げなば袂にも飛び入らん程の清らかな螢を見候ては、坐ろ詩趣の湧き出づるを秘めかね申候、燒きつく樣な光を僅に白きカーテンに遮つて、御執務遊ばす御許の、一日も早く御歸宅遊ばされ、涼しきおばしまに淺からぬ詩藻をひろげつゝ、月夜の自然に御歌の二ツ三ツ、これや近頃の御無心にて候、御双親も

いたく待ち佗び給ひ、妾の參ゐりし時にも「何故歸らざるや」などゝ、御恨みの言の葉さへ御洩らし遊ばされ候ものを、去りとは餘りにすね給ひたるなされ方にも候ものかな、一刻も早く御歸宅あそばされ候てこそ、御許の御本意かと存じまゐらせ候、申上度き事は數々おはし候へど、あたら詩趣をこぼち候を恐れ、例の土橋よりなつかしき母校を拙なき筆に寫生して御送り申上候、返す〳〵も鶴の首して待ち佗び候ものを、徒らに何も御延ばしなされまじく候、あら〳〵。

（評）跳つたやうな御筆つき、凡手にあらず。

秀逸

○離れ小島より

岐阜市　泉　しげ子

しろし召さずや朝の波のさゝやきに起き、夕の霞の淡きに眠り、雲井の他に友もなく、浪音の外に聲もなく只悲しとのみきゝなされ候、さらぬだに母に逝かれ妹に別れて、佗びしとのみ知りそめし此の世の春、離れ小島にひとり冷たき運命に悶へ居候、折柄優しき御水莖の跡に接し候、嬉しさ懷しさ止めむとすれどあゝされど、いつしか傳ふ頬の涙の、いとゞ止め難くて候ひしよ。

雲の行方に思をのせて、濱の眞砂に佇む夕べ〳〵耳に殘る聲、目にうつる影、かの小川のほとりに白きハンカチーフ打ふらせ給ひし、君が姿のまぼろしに、青海原ふりさけ望む眼のかき曇るにて候よ、黑幕深く天をこめては、星の光も如何せん、月の光もなまなかに、夜半の枕に通ふ千鳥の啼聲に、ありし昔を思出では身もよもあられず、名もなく過ぎし一とせを、漁の男の子や蜑たく賤の女の子などの、教鞭をとりて朽ちぬべき身か、止めもあへぬおもゝちに、あゝともすれば頬を傳ふ寥寂の涙に、故山のいとゞ戀しく候。

さりながら綠の瑞木は島を覆ひ、綠の水は島を包みて藻の花白う散ふ夏の朝、濱風悲しき秋のたそがれ、小島は未だかつて其輝ける衣の彩を亂せし事なく、囁く如き波の音に永遠の樂譜を破りし事なく、美しき人の情は小さき泉を湧きいでゝ、世はなべて百花の盛りと知りながら、汐路に眠る沖の小島に、儚なの慰を命にて、ひたすら君を慕ふ妾ありと、ひまもる風にのみ心おき給はれ度く候。

今宵しもあまりの淋しさに、二三の子等を集めて、ヴアイオリン肩に、歌を教へてうたはせ候へば、可憐の優しき聲や、床しき音、餘韻は白波をつたひて、遠かすかに響き申候。

（評）可憐才筆、たゞ聊か衒ひ氣の見ゆる所あるは評者の僻目か。

○花園の景況を友に報ず

山口縣　清流女

暮しき露子様！其後御變りは御座いませんか私其れはそれは壮健て丁度あの次亞燐の廣告の様といつてもいい程になりました何卒御安心遊ばして。扨美しき新緑の候となりましたのね。私處の花園も随分美しくなりました、概況を一寸御知らせ致しましよう貴女の好きなゼンシユニアムね今眞つ盛りてすの、唇を合はした様な美しき小さい花で眞紅やら眞白やらまたはいろ／＼の色で數へたら十餘種もありましたよ其からハイカラな人が嬉しがる薔薇も種々な色が咲きました貴女何色が善いとお思ひなすつて私いつも申しますがレェンの根のぼかした様なのが一番好みますよさすがは英國人の國花なんていふんですから麗しい事は定まつてますわね見ると氣がぱつと晴れた様てすもの今年は昨年よりずつと多く咲きましたのがゆかしい／＼紫の其美しき菖蒲てす白も御座いますが紫が眺むるには私好きてすよ或人が此色は快活が敬遠せられた様な趣旨があるつて言ひましたがよく思ふと何だかそんな心になりますね同じ紫の之は又少し紅を帯びたのが紫蘭一寸愛らしき花です五月つゝじも盛て彼方此方に丸くなつては咲いて居ります貴女の御上京遊ばす頃建築中だつた部屋も漸く落成致しまして此節は庭園に取掛つて居りますがそら蕪村の句につゝじ植ゑて石据ゑかへた嬉しさよといつたのがありましたね其とつゆ違はぬ感想を幾度起しましたらう書けば限りがありませんがさのみは記しがたくてあの別紙に五六種の花が押花にして入れてありますから何卒色はあせ其の香りは無くとも我心盡しと思て御納め下さいさらば露子様花の如く萬に美しく秀てさせられ時々は御消息なし玉ひてよ左様なら、御機嫌善く。

（評）才筆、さても雅趣に富める御消息よ。

草鞋のひも　三河　近藤道江



○乳母の許に　本郷　朝井松子

追々お暑く成つて來ましたがいつもお達者ださうで何よりも結構てす、先日は又お手製のお茶を澤山に有難う、殊に今年のは大層香りがよう厶い升事ね、母樣は一山本山一も外は無いつて仰有つて被入い升よ、私いつてもあのお茶を頂く度に、新しい手拭を姉樣冠りにしてお前が黑い襷お嫁さんが紅い襷で廣い茶畑に茶摘歌を唄ひ乍ら摘んで居る姿や、熱つさうな顔してせつせと焙爐て焙つて居る樣子抔有々と想像され升、然し今年はお富が居ないので嘸困るてせうね、何しろお富は働き者だから、此節はモーすつかり家風に馴れたので、何から何迄皆お富一人で繰り廻して呉れ升から母樣は大悦びなの……ですが「お富を御覧」を平均日に三度位承るのには少々閉口仕升、だが他の奉公人とは違つて少しも蔭日向は無し、物事には注意深いし、氣も優敷くよく世話をして呉れるので私本當の姉樣の如な氣が仕升よ、母樣はこう仰有るの「お富はモー田舍へは歸さずに東京でいゝ處へ嫁せる」つて、乳母やいゝかい、一人娘を取られて了つてもホヽヽヽ今年こそは簽が出たら乾度呼んで頂戴な、是非お富と二人で行き升からね、夫から此の寫眞は先日日比谷公園へ遊びに行つた時撮つたのてすよ……僅か半年の内に仲々お富もハイカラに成つたてせう、上に乳姉妹と書いたのは兄樣のおいたなの……オヽ夫から此の反物はお前の常着につて母樣が、此のお菓子は私が作つたのですからお風味は惡くともお茶受に仕て下さい、もし宜しければいくらでも上げ升よ、夫に編物類は急いだので不出來ですがお嫁さんに……お富も大層編物が上手に成つてね、今度行く迄には澤山拵へて置くつて精を出して編て居升から樂みにして待つてお出なさい、では又其中に　どうぞ皆さんに宜敷、若お暇が有つたらちつと泊りに來て下さいな、此頃私お料理のお稽古をして居升から何ぞ珍らしい物でも御馳走仕ませう、左樣なら。

（評）わざとらしき所が少しもなくて、平和な暖い風が吹いて居るやうにおもはれる。

○友の許へ　福井縣　片山千里

明日は買人が來る由に候へば、昨日袋を取り一日照り付けさせ候處、バッと赤みが來候て、綠の葉の中より見へ候美しさ、あかぬ眺めに御座候へば、是非御出の上桃の眞の味を御覽くだされ度候、桃はもぐよりすぐ食べ候と、家にて食し候とは隔段の違有之候を、まして仲買人より問屋の手に渡り、小賣が受けて店にかざり候ものなどは、くちり〳〵と話にも何にもなり申さず候、昔より論より證據と申候へば、兎も角も御出の上自慢の眞價を知り玉はる可く、なる程と御感心なさ

れ候て、二度買てなどは食べなさる間敷、半道位の事に候へば、毎日なりとお足を運ばんとの御勇氣の出て申候事は、ちやんと定まり居り申候、かしこ。

（評）調づかひや丶品おとれりといはんも却つて親しみありてよし。

○服部貞子の君に

東大久保　弦子

はるかに、岩代なる服部貞子の君にきこえあげ候。もとより弦子とは、妾がかりの名にて候、よしや本名申あげ候とて、思ひ出ださせ給ふ事のあるべくもあらねば、ぶしつけながら、わざとかくはけ名を用ひ候、されど、君が御名は、妾が忘れえぬもの丶一つにて候、四年ばかり前、妾が土佐の一寒村にありし頃、まだ少女界の愛讀者として、時折は投書などいたしをり候ひしが、その頃君が御名を和歌欄にて拜見いたし御なつかしう存じをり候ひし、當時必ずや御君は服部躬治様が御妹子様ぞと申て、姉に笑はれし事もおはし候ひき、いまなほ或は？と存じをり候。さて、その後、家運おとろへ、爲に、妾は他に養はるる身となりにしかば、涙をのみて、筆とりし手に、鋤とりて三年を過し申候、さ候へば、素より素養もなく、文才もなき身の三年を、全くの盲目となりて、過せし事とて去年都にいでし時は、見聞きするものみな、驚くのみにて候ひき、さるほどに人の物笑ひの種となりつ丶も、一年あまりを、都の片ほとりにすまひて、けふはからずも、文壇の花手にし、君が御名拜して驚き、み姿拜して再びおどろき、御作よみて、三度おどろき申候、御寫しゑによれば、妾よりもなほ御年若の御身にしてかくも勝れし御作をいだし給ふ御事たゞ〳〵御羨しとばかり申さん言の葉もおはさず候。かねてよりの御才筆、ます〳〵御發揮遊ばされ、なき一葉女史が後ともなり給はゞ、よそながら、御嬉しき事に存じあげ候。と丶のはぬ勝の筆にて、なめげなる事申あげ候へ共、あはれ、おろかなる一ひな少女がくり言と、御きゝながし下さるべく候、早々。

（評）取り出づる節はなけれどよき文なり。

○母様へ

うら子

まだ奉公してから僅二月。不思議にも草木も寝る眞夜中に二つの鳥が聲をからして私に何か告るかの様に鳴くのです。病氣であつた妹は？母さんはと急に涙が胸に充ち遂に枕をぬらしました。母さん家が案じられて未だ其鳥は鳴て鳴て居るのです。

（評）斷腸。文の短きが命なり。

新歌謠

編輯局選

▲規定　卑邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと是も一人一首限り投書に新歌謠と明記せよ用紙及び締切日等は前同斷賞品は丙種送呈



【天】○月は十五夜其の影なげて野邊は草木の薄模樣
　　大阪西區靱南通五丁目十四、河盛方　春野秋子

【地】○風よ吹くなら海へは吹くな沖にや可愛い鳥が居る
　　月島町野口方　不美子

【人】○可愛らしいは豌豆の花よ蝶の形で小紫
　　福井　露子

秀逸

○家の庭木の茂つたなかに雄鳥雌鳥が巣を造る
　　紀伊　稲本保子

○三里たらずの私の島で鯛が取れますさくら鯛
　　伊豫　稲井白百合

○四條の橋から鼓をうてば月が顔出す東山
　　丹後　小倉白桃子

○一里ぐらゐはなほはりにやなれど乳母が笑顔が見てきたい
　　鳥取縣　桑本きさ子

○夕べなつかし寂しき星は妾しの心を知るらしい
　　羽前　湯野村千代子

○君の玉章汽船に乘つてもはやくる頃屆く頃
　　千葉縣　吉田たけ子

○夏がきました一の瀬河岸にや白い浴衣がちらほらと
　　熊本縣　池邊しづ子

○小雨降つてさへ霧立ち籠むるいはれありげのお城山
　　伊豫　賤子

○思ふ心は夜も日も盡きぬ誰か秘密を白百合の
　　福井縣　葭田鎮子

○陸奥の姉さんと和泉の私と辻のポストで話する
　　泉南郡　金田芳子

○ほたる可愛や小雨にぬれて草の宿りを追はれてか
　　和歌山　加藤重子

○
　　日本橋　吉田さし

○安や嫌いな霧のすまる山も見へれば海もない
下野　黒須喜久子

○お日が拝たさに早起きすれば霧がじやまする世をつゝむ
讃岐　赤ばら

○青麗すかして春野を見たら五色の浪が打つてくる
澁谷　好子

○私しや忙がし田植に製茶摘もしなけりや桑摘も
浦鹽斯德　中野喜多子

○今日はお祭り太皷の音が狭い村中へ鳴り渡る
熊本縣　茂里島子

○ゆふべ御空をオレンヂ色に染めたあたりは君が里
尾張　服部登久子

○黒い岩根に白百合咲いて黄い胡蝶が香に慕ふ
下野　瀧澤茂子

○鬼怒の河瀬は小舟で越すが那須野六里は馬で行く
盛岡市　四戸節子

○もやに霞んだ九重奥を私や或る晩夢に見た
徳島縣　西野ひさし

○寺の鐘より身に泌むものは夕べあはれな子守唄
靜岡縣　青木綾子

○ふじのお山にたちぐもすれば後にや西から風がでる
鹿島　たつ子

○棉の花咲く若葉の蔭でむしろつくろふ父と母
千葉縣　秋金子琴子

○春はゆくゆく姿は見えぬ此處來るのは夏姿
茨城縣　阿部弘子

○覗き込まれてうら恥かしい顔に日傘の照り返し
仙臺市　土井末子

○表のかんばんしろことかいて中に草餅たんとある
沼津町　飛奈久枝

○姉は大磯妹は興津私しや千本の濱へ行く
京都　常盤蘭子

○お國なつかし叔母さま戀し島のつばさがうらやまし
岩手縣　清子

○白い牡丹が今朝皆散つて赤い芍藥咲き初める
沼津　渡邊とよを

○兄の日記ににからぬ文字があつてきいたらしかられた
岩代　佐藤初子

○天の小星と地に居る螢金の様なる光持つ
三河　鳥居ふさ子

○いつも仲善き二人の娘今日も姉妹で麥刈に
岐阜市　篠田とみ子

○尾瀬見峠をえんやら越してきけば鑛山まだむかふ
越後　花子

○ふんで行かうなら草履のうらに花の香しむよな春の野邊
日向　かう子

○花が咲いたら蝶々も舞へゝ風と蟲とで實を結ぶ
大坂　木村春江

○咲くか〳〵と針の手とめた垣の夕顏今匂ふ
三河　森田春子

○山家よいとこ夏涼しくて夜は夜とて蚊も居らぬ
大阪市　山内溪子

○前は大海後は深山わたしや花家に歌をよむ
府下　森田きよ子

○小供愛らし娘子優し男子男し村祭り
宮城縣　梁川文子

○上野の山から東京見れば家のあること魂消た
大坂　寺部君子

○赤い襷ではづかしさうに昨日來た嫁田植する
若狹　山田てつえふ

○明日は姉の嫁入する日日記書く手もふるへます

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、賞品は丙種。

天

○英語　ひさし

田舍から出たての女中に父樣の手帖がみえませんから尋ねますと「ハイ御手帖はあのビスケットの中へ入れて置きまして御座います」「ビスケットつて何處」と聞きますと「ハイ旦那樣の御洋服の……」

地

○體重　岩手縣紫波郡古舘村　横澤清子

此間私の學校に體格檢査がありましたが、體量を量る時に、私忘れて足袋をはいたまんまで重量器に乗りましたら、花子樣が注意して下さいましたので急いで脫ぎましたが、濟んでから氣がつきますと足袋はちやんと手に持つて居たのでした。

人

○湯　沼津町　飛奈久枝

奥樣女中を呼び、「水瓶へ水をいれて來ておくれ」女中「ハイ」といつて持てくる。奥樣「まあ……是はなまあつたかいではないか」女中「ハイ私しお寒いのにお水ではつめたいと思ひまして湯ざましを入れてまゐりました」

○四匁　下總　文子

片田舍の郵便局員出京して電話にかゝり「料金は何程です」車掌「何處へでも五錢です」局員「矢張四匁目を増す毎にですか」

○青眼鏡　上總　春枝子

醫者「大層顏色が惡るう御座いますですよ」病人「先生お眼鏡のせいでせう」醫者「おッと取るのを忘れました」

○鳥か人か　上毛　須藤あさ子

或日妹が本を讀みながら姉さんワシントンは人間なのと云ひますから、どうしてと聞きますとだつて鳥だと思つて居たもの……。

○ピッコ　京都市　大森はる

昨夜秀子さんと一緒に井上里子さんのお宅へ往つたら遂に話が永くなつたので、秀子さんは歸らればならぬとて急いで庭に降りられた、て妾も續いて降りましたら妾の下駄と秀子さんのと片足づゝなので「秀子さん貴女下駄がピッコですよ」つては秀子さんは妾の足元を見て「貴女だつてピッコだわ」

○文壇　長崎市　松尾かづ子

女子文壇が郵便で來た。姉急で見てのつて居なかつたから又机の處に知らぬ顔して座つて居る。妹「姉さん文壇が來てよ」姉「さうこんどは出して居なかつたからのつてゐないだらう。

○目藥　磐城　遠宮とめ

醫者「あなたに二日分上げた筈でしたれこぼしたのでもあるのかへ」患者「ハイあまり目がいたいものですから呑んだりつけたりしました」醫者「目藥でしたよ」患者「承知して居りました」

○藪醫者　山口縣　貫船艶子

醫師「太郎さん此の藥を白湯で二日に御飲みなさいすると二三日中に霍亂は全快しますよ」太郎「アイ有難う存じます、先生あなたの頭に張つて御いてのは即効紙ですか」醫師「さうです私も三週間あまり前に霍亂してならないのに困るのです」

○猫　下總　板橋たゞ子

妻「猫の玉にもあきれました」夫「なぜ」妻「玉はどんなおいしいものが有つても私がハイと日はない内は食べたことは無かつたです、お膳に鯛を、膳へ付けたまゝ貴君がお呼びですからハイと日つてお店へ行きました、返つて來れば鯛は骨でした。」



香（課題）

天 好きと嫌ひ

伊豫　曉子

好きな香は玉露の出花、蘭の花。朝餉の膳の漬物の香、青疊のにほひ、酢物の香、綾衣にかをる焚香の香、草の香、潮の香、やきのり、寒き夜の牛鍋のいりつくにほひ。いやなのは男子のかをり、袋麝香に數の子、込みたる場の香、病氣の香、わけて胸あしきは夏の日の油虫の糞の臭。是非一度かぎたきは、秋の森に朽ち倒る沈の木の香と、文學者の香。

巧みに概括してある。

地 花の香

青森市米町　村林矢須子

古代紫のあけびの花は濃艶な匂ひ、牡丹は甘い匂ひがして、櫻の葉はよい香、有るか無い樣なのは野菫で、白百合は醉ふ樣な惡い心地で、ヒヤシンスは毒々しい、野菊と茶の葉はかんばしく、白野ばらはさつぱりして、鉢のばらの香を嗅ぐと、夢の國とやらへ行つた心地。

香の感じかたが細かい。

人 神の香

岩手縣紫波郡　横澤清子

私の村の、鎭守樣のお社は、種々の木が生ひ茂つてる岩山の上にありますが、時々は私一人で遊びに行きます、いつも土は濕つぽいのですが殊に夏などは、綠滴る樣な青葉の蔭に立ちますと寒いほど涼しいのであります。其のお宮の前に立つて拜んで居りますと、云ひ知らぬ香を覺えます、さうすると胸がスーッとして、自ら崇高の念が生じて來るのです。「あゝいつもこんな心で居る事が出來たなら神樣の御使にもなれるだらうに」と然う思ふのであります。

森の香は神の香です。

秀逸

○本の匂ひ

伊豫　井上いち子

海山を越て送つて來られた本が手に渡ると直ぐ南緣に出て日に向ふて始めから終り迄あらましを見るのですが新しい木の匂ひは私には何とも云へぬ床しい樣に感じますので、はなをあてゝ頁を繰るのです實に此上ない好きな匂ひなのですだいぶ見て居ますと眩しい日に黒の字は背の樣にちら〳〵して來ますと、おゝ、こんなに日に晒れては惜しい匂ひは失せはせぬかと氣づかうて室へ入り半紙で表紙を包みます。

○隣合せ

常陸　淺香くら

庭の内に大きな薔薇の木が一本あります、花は紅で尺強し四五寸もあるのです、盛りの時節には云ふにいはれない、美い香がいたしますが、惜い事には、隣りの家で薔薇の木の脇の虚に、豚を飼ふて置くものですから、あたら美い香も消えてしまふ様な心持ちが致します。

○御線香　濱松　橘　百合子

私は何か深い考事や又氣がくさ／＼して堪へられぬ時には居間の障子を締切て机の前にキチンと坐りましてお線香をたきます、そして其濃碧色から追々と灰暗色に變り遂に消えて逝く煙の行衛を見守て居る内にお線香のかをりが室内に盈ち滿ちて來て四面が何となく寂となりますともう其時には蛇度名案も浮びますし氣も清々致します。

お線香のかをりは妙に人を落付かせる力を持て居りますのね。

○藍甕　岩代　武川たけ子

七十五の藍甕、片つ端から蓋を除くれば、あら見事！初めてやつて見た醱酵か見事に成効して、濃紫の泡をブツ／＼と吐きて、昭る斗りの藍の香が工場内にパツと廣がる。メた！これで御家も繁昌ぢや。

○野の花　岩代　野の花

運動時間に草の上に坐して居ると、何處からともなく微になんとも云へないよい花の香がしますから、其の香を迯つて行きますと、す枯れたたんぽゝの蔭で、小さな紫の花を見つけました、私は誰にも見られないこんな所で、香を發つて居る可愛い野の花を愛する事が一層深くなりました。

○好嫌ひ　長野市　胡蝶子

平凡な花の香の好嫌ひを。

私の一番好なのが香菫と木犀、西洋草のスイートピーと野薔薇の一種の長春で御ざいます。ほんとにだれも恍惚する様な香！。

嫌ひな花は艶に美しい牡丹の花と草花の金蓮花、それから野菊と御笑ひ遊ばすでせうけれどもあの姿美しいそして氣高い百合の花の香。

○地極の香　飛騨　美佐子

天地の間に嫌な香も澤山あるけれど坑内の空氣程厭なニホヒは亦とあるまい、妾は一昨年の五月當地へ參りました、近くに鑛山があるので去年の夏或る事務員に案内せられて工場を見に行きました、坑道何千尺と云ふ大地の底で何百の坑夫が一個の燈火を頼りに一本のタガネと一個の節刀とを命として働いて居る、五十尺に二百尺の廣さの此工場は妾の踏で居る足の下まで燦爛たる光輝の鑛石で實に目覺ましいものであるが稀薄な空氣は非常な濕氣を含んで生臭いやうな油臭い様なそれは／＼何とも言へぬ彈藥の硝腐敗物の香さては糞便の臭氣何もかも一ツしよにした様な一種言ひやうのない香が鼻を撲てムカツク様でありました。

○職業の香　福島縣　泉　花枝

すれ違ひざまに、木の香のするは大工と木挽、抹香臭いは僧侶、土の香は農夫、汗垢臭いは學生か勞働者、白墨の香は教員、魚商人はいくら姿を代へても生臭く、髮床の人は必ず油の香がする。物には必ず固有の香があるやうに、人も必ず職業の香がする。

○蜜柑畠　德島縣　紫　濃子

細谷の炭燒場へ通ふ路に、村の田邊さんが二十年來經營して居る有名な溫州蜜柑畑二町餘。それが今初春の梢に殘る淺雪のそれよりも一層美しく白花の眞盛り。毎日炭取りに行くに其畑が見えかけると、其花の精がうま想の蜜の香で、私達の鼻をつくのです。だん／＼近よると、鼻ばかりでない目も口も身體もさながら、甘い甘い、蜜酒をあびた様に、足もしどろになつた様に酔つた心地がして、其所通りぬけてしまつても、しばらくは、今醉つた其香、なか／＼はなれませんのです。

○蘭の花　大阪　寺部　君子

或るお家の、お座敷へ導かれました時、プンと得も謂はれぬ、好い香が致しましたので、偶と見ると、お床の間の蘭の花でした。此迄は、ばらだの牡丹だのと、綺麗な花の香を好みまして、此氣高い蘭の香には氣も付きませんでしたが、此時から、大好きになりました。今でも其時の香が鼻に着いて居る様です。

○藍の香　牛込　倭　文子

都の人となつてから未だ日が淺いのでスミレや、バラや、ムススなどは未だ撰り好む智識がありません、只一番好きなのは田舍から小包の着いた時、情を込めた母からの手織木綿の着物を嬉しさに抱えて頬ずりする刹那、プンと鼻をつく藍の香、世に是以上嬉しい香はありません。

○アッキンソン　京都　弘子

私はアッキンソンの花が一番すきてす此花は英國にて出來る花てす其の花の香といふたら何ともいへないよい香がしますそして高尚な香てすそれてすからこれらの花を皆蒐つて多くは香水の原料にもちひます其製造した香水の香ひと申したら他の鶴やひな香水よりも一倍上等てす。

○香のいろ〳〵　大阪市　楠　愛子

線香の香……何となく幽しい。
薔薇の香……氣をチヤームする。
オレンジの香……胸をすかす。花蜜の香……蜂蝶を呼ぶ、百合の香……暑さを忘らしむ。
フライの香……鼠を引きつける。香水の香……愉快になる。蚊遺の香……蚊を殺す。饅の香……乞食の楽になる。玉葱の香……鼻を痛める。
潮の香……心を雄大ならしむ。

○變つた香　近江　婦貴子

皆様は大抵いろ〳〵の花や香水香油麝香等のよい香がお好きてせうれ妾はそれより少し變つた石炭石油などの香が好きてすのけれど決して花や香水の香が嫌といふのてはありませんよ。

○白梅の香　一風女

私は香の内ても一番好なのは白梅の香りて御座います其ゆかしさ嚠はしさとても形容は出來ません、私は裁縫ても一心にしますと直ぐ頭が悪くなります、其時はうらのはたに飛て行ます、此にほひをかぎましては身も心もすが〳〵しくなりますよ。

○文壇の香　大阪　西戸政江

毎月來る女子文壇を待ち兼れて早速開くと皆様の情の暖かい香が致しますの、その文や歌や又倶樂部などて大抵その方の香――が想像出來ます大家の御令孃、町家の娘さん、田舍のお方、さてはまた女學校へ通つていらつしやる方、早や嫁いだ方と、色々の香が致しますが、いづれ變らぬ勝り劣りのない情の香、妾はいつも嬉しうその香に醉ひます。たゞ一つ不可ないのは男子の方らしい香だけが………。

夏の夕　愛知縣　加藤つたへ



○ツーテンシャン　岐阜市　篠田とみ子

紫丁香とした押花を或人から頂きましたので、早速開いて見ますと葉は内地のツゲに似て香氣馥郁たり、としてありまして花は小まかく細長く葉に青味がほの見へて居ましたからとりあへず人の居ない處て匂ふてみましたら白惚かは知れませんが何とも申されませぬいゝ香が致しましたので、若しや褪ては無いかと硝子窓を明けてみましたら小雨が降つて居ました、手にうけてみれば矢張り、ひやつこくありました。

○花の香　越後　幽草女

書物の上の香水て、見たり嗅いだりする、ヴアイオレツトの懐かしい香は、三色菫や野生のには嗅ぐ事が出來ません。芍藥の香は、あまり濃艶すぎて厭味があります、なでしこは土くさくて、田舍娘の樣、野菊は青くさくて、雛僧な聯想します。そして私の最も愛するばらの香は、氣品高き佳人の、あつさりと裝ふた樣に思はれます。

○燒栗　下野　せつ子

過し年の秋の長夜の事てした。宿題の圖畫を書てると、何とも知れぬ、香しいかをりがホンノりする。爐の中ては、プツ〳〵と灰を吹て、小さな穴があく。祖母樣はニツコリ笑て、黄地へ黑い形をつけた、それは〳〵香ばしい燒栗を出して下さつた。いつお入れになつたのやら、いひ知れず、嬉しう御座いました。今ても物のにほひを嗅ぐ毎に亡き祖母樣の優しいお顔と、なつかしい其時の香とを思ひ出します。

◎五月の香　廣島縣　佐藤いち子

私方には今年の五月の節句に座敷の飾をすつかり新らしいのとしきかえた、そして、いかめしい人形の前へちまきをまつり、花瓶へ菖蒲、せんだん、よもぎなさしました、あけ放した障子の外からかぐはしい若葉の香をのせた微風がそよそよとふきこんで、新らしい疊の香、きもちのよいちまきのにほひ、菖蒲の香、は一つになつて座敷にみち／＼て其時の心持のすが／＼として愉快であつたことは忘られません。

◎故郷の香　京城　ゆかり

私の町から叔母様の村まで行くのには、青黒い太い松が鉾の屛風の様に生えた虹の松原の中を白波の上に、見えみ見えずみ進んで行く白帆を眺めながら背に籠負ふた爺さんの落葉かく歌を聞き二里たらずの道も、あかずまゐるのでした、叔母様の村では此の松原の落葉を年中の燃料に用ひて居るのでございます、ですからこの村の入口まで參りますと松葉を燃く煙が常磐の色をこめて村を包んで其の香が流るゝ如に匂ふのであります。今私は八重の潮路をへだてた韓の都で朝夕たきつけに、用ゆる松葉の香をかいては故郷が戀しくて／＼彼の邱の有様が腦に浮ぶのでございます。

◎好きな香　秩父郡　近藤とく子

父様は新築した離座敷の材木の香ひ、母様は龍腦のしみた着物の匂ひ、弟はお料理の匂ひ、妹は花の匂ひですつて。……私は御園の花をつけた顔の香が大好きですの。そして、みんな好きなのは、何時も家庭に滿ちてゐる春の香。

◎花の香　常陸　木村那賀子

卿等は香水を賞しバイオレットは文明の香りとなへて諸嬢は愛用いたしますが私は生物の花の香りを愛します、斯く申しますと諸嬢は定めし不審に思し召すでしやうが流行く人の餘りに香り深きは實に苦々しく其者の人格も見すかされる樣で私は愛しません、其れに反して生物の花即ち紅梅或ひはバラなどの咲きみだれし前に立ちし時の心地、心神爽快實に何とも形容する事ができませむ、故に私は生物の花の香を愛するので御座います、……清い／＼花の香を……。

◎肥料の香　紀伊　紫雲女

私は年百年中一日もかゝさずに居ることのない香があります、それは餘り良き香ではありませんが、皆さんも定めしかがない日はないでせう、町の人もかぐ、田舍の人は猶更、商賈の人もかげば賤しい人もかぐ、詩人もかげば卑人もかぐ、政治家もかげば學者もかぐと云ふ香は何でせうそれは我等農夫の一番大切に用ふる肥料の香であります。

◎家庭の香　越後　末廣女

艶麗な閑雅のかをりよりも、天然にかんばしい草木の花の香の如なのを愛します。が最も好きな好きなと申ますのは、平和、慈愛、快樂などゝ言ふに言はれぬ、匂の靄々と充ちた圓滿な家庭の香、之程樂しい、慕はしい、懐しいのは、又と無いと存じますのよ。夫から嫌なのは澤山有ります中にも、いやにハイカラ女子の驕り高ぶる荒い鼻息―の匂でムいますわ。

◎家庭の香　越後　土田りた

好きな香は臺所の香、きらいな香は臺所の香、或時はお魚のにえるうまさうな香、或時は火燒く時のいやな煙の香、次に好きな香は座敷の花の香、きらいな香は、お父様や兄様のお上りになる、お酒とたばこ。

◎菊の香　芝　今川ひさし

昔の人は花橘の香は昔を忍ぶとか申して歌などに多く見受ます亦兼好法師は橘より梅の香が昔戀しいとか申し當節の方は蘭が好とか薔薇が好いなどと申しますが私は菊の香が一番好きですから父様に願て裏畑を一坪程拜借して黄菊白菊種々植付ました花の盛に朝早く此菊畑へ參りますと何とも云へぬ好い香がいたします。

◎舟の香　靜岡縣　植田清子

妾は漁船の香が最も嫌いです、漁船を借りて海上に出て、洋々とした景色を眺めますと、よい心地がしますが船中に座るといつも心地がわるくなります。故に人々が昨日は嫌いな香がしたなど云ひますと、漁船に乘つたのですかと聞きます。

◎坊樣くさい　和歌山　田中文子

花の香は總べて宜しいが梅と菊が一番好い。好きなは赤兒の乳の香(尤も母乳)に水せいの花の香、嫌なのはコールタン、陰氣なは蚊くすべ、神々しいのは線香のかをり、忘れ難いのは故郷の土の香、私の家では四國三十三ヶ所を巡る坊樣が泊ります、其時つる蚊帳を坊主くさいと云つていやがります。

學校生活

天 ○新入生

山梨縣北都留郡初狩村 井上笹波

私の勤めてる小學校へ今年の四月一日七十名計りの新入生がありました。第一のベルが鳴つたので其生徒を敎室へ入れて後から私が入つて見ると全生徒が敎壇を後にして机へ腰をかけ椅子の上へ足をのせて居るのです。餘りの事なので私は只呆然として居ましたが何うしたのかと問ふと先に腰掛けた二郎と云ふ子が斯うしたので後の者がだん〳〵眞似をしたのだそうです、山の中の兒童ですから此位の事は無理もありませんが其時の事を思出して今でも私は獨りで可笑くなるのです。

地 ○二十年一日

ひさ子

學校の生字引と云はれる小林と云ふ先生があります迄先月就職三十年に當りますので卒業生一同で謝恩會を催しました御年は最ふ六十近く大層おやさしい方で何日も綿服に小倉の袴御自分の手を取て敎た生徒が過日校長に成りましたが先生は相變ずにこにこと尋常科を受持て居られます

人 ○先生

岐阜縣 山口鈴子

今度私の學校へ赴任された先生は十八で一寸介嬢風でそれは〳〵優しいお方ですよ敎へ方も親切でそして丁寧でありますから妾のやうな覺への惡いのでも大層早く覺えるやうになりました。

○初めて花園を作る

下野 小林清姿子

妾の行く學校は 梁川尋常高等小學校で一里ばかりの山路を毎日通て居ります峠などは此の山路の兩側に人ても手入した樣に美くしい色々の草花が咲て居りますそれて學校には何の花園もないので妾等の三年の組と 四年の生徒と相談して先生に許可を受けまして 壹坪四方位なのを四ッ作て貳日目ごとに壹時間と 極め其の時間ごとに一生懸命にやつて居ります今では立派な花園に成りました。それで日曜などにはわざ〳〵一里程の道を行て手入して居ります。

○私の望

板橋町 高桑紅葉子

私はどうしても師範校へ入學する目的で試驗を受けろ事數度いつも一番なしまひから一番目、日本全國の師校を受けても入學したい、がそうすると七十ばかりのお婆さんになつてしまう、それでもやりたい、寄宿舍生活がしたい、と昔て女學校へはあがられずあゝ皆さんの御身の上が羨やましい。

○二十四人の子供

蒲町 恵女

作法實習の時先生に、お子樣は何人ございますつておたづねしたら、ヘイ二十四人ございます一番の年上が十六で末の子が十四になりました皆溫順で、私の云ふ事なら何んでもよくきいてくれます。そしてまけずおとらず、一生懸命に勉強してゐる顏を見るたびに、はやく、どの子も成功して可愛い孫の顏でも見たいと思ひますよ、と仰有いました。私逹はほんとうに幸福だと思ひます。

○生徒の樂み

丹後 河島美年子

私の學校では高等三年になると雜誌を取つて讀む事が出來ます。それは三年と四年の生徒が月に幾らかの金を出し合ふて、男生と、女生と二種とつてゐます。男生の方は成功の少年で、女子の方は女子文壇です。皆け此れを何よりの樂みとして、休業時間にはいつも愛讀してゐます

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○月經　月經がながく且白き肉のやうなものが下りますが其儘置いて宜しいてしやうか、又子宮サックは月經時に用ひて調法てしやうか（美濃、やよひ女）

『答』御容體を察するに膜様性月經と申す一種の病的月經の様に思はれます、依て婦人科醫の治療を御受けなさるのが必要てあります、月經時には可成安靜になし消化し易き食物を食し、局部には脫脂綿又がーゼを數枚當れてあて其上を丁字帶にて止め置かるべし「子宮サック」は月經帶に用ふる事を得れども、新聞の効能書き程調法なものではありません、使用法は御求めになれば詳しく書いてあります。

○鼻汁　性來鼻汁が多く出ますが病氣ではありますまいか、別に臭氣はありませんが何卒療法をお教へ下さい（香川縣、鼻汁出女）

『答』十歲以上になり、鼻汁の出づるのは慢性の鼻粘膜加答兒と云ふ病氣ならん、其療法は含嗽茶碗一杯の水の中へ、小匙一杯の食鹽を溶かし、此中に口をつぐみて、鼻を入れ鼻孔より此食鹽水を吸入し此液を口中に逆出するのです、此法を一度に三回位、反覆し、每朝一回行ふのてあります。

○食鹽水の用法　七號「女醫顧問」の第一番「白帶下」のところに食鹽水にて洗滌するといふことがありましたが食鹽水は三日分程造つて貯へ置いても差支へありませんか（はる子）

『答』食鹽は殺菌の効があります、故に、造りたる食鹽水は、瓶の中に入れ、堅く栓をなし置けば三日間位貯へ置きしものにても、差支へありません。

○月經の來る日數　昨年より月經あり先月十日よりあれば今月は七日、翌月は四日といふやうに二三日宛早くあります、誰も皆斯様てしやうか、而して常に腰氣が多くあります、多血性らしく、身躰壯健、腦をなやます愁ある身、身體も動かします（十七才神經衰弱女）

『答』月經は一ケ月每に、來潮すことは申せども、詳しく說明すれば、廿八日目に來るを生理的とします、故に一ケ月の日數を、卅日若くは、卅一日とすれば、前月より二日位早まるのが、正規の月經てありますから決して御心配には及びません。

○頭痛　私は頭痛がして困ります、けれども腦を使用せぬ譯にゆかぬので困ります、何かよい藥を教へて下さいませ。猶砂糖は多量に食しましたら身體に害がありましやうか（もと子）

『答』頭痛は種々の原因から來るものてありますれば、單純に、其療法を御答へする事は出來ませんが、少女の頭痛は、多く月經不調か若くは胃病より來るものてす。故に一應醫師の診察を受けて、治療の方針を授けてお貰ひなさい、多量の砂糖を食すれば、胃病に罹ります。

○齒痛　常に上齒齦がはれ、齒の間より出血し、齒齦の際が如何程磨くも黑く物溜りて時時齒痛が起ります療法をお教へ下さい（或る女）

『答』齒齦に、齒石の附着せし爲に起る炎症の様に思はれます、故、齒醫者に、齒石を除き、能く掃除をして貰はるれば治ります。

○便秘　私は一昨年學校を卒業して宅に居りますが運動不足の爲めか便通が惡しく便所へ行きますと肛門を針てゝもつゝかれるやうてすが何ういふ譯てしやうか（遠江、貞子）

『答』全く運動不足の爲めてしやう、依りて適宜の運動をなし、每朝朝飯前に「コップ」二杯の水に、食鹽を、半匙程入れて、飲用さる可

し、便通整ふる時は、肛門の痛みも、自然に治ります。

○手足が痺れる　私は本年十八歳ですが讀書して居ましても坐つて居ましても直に手足が痺れて來まして誠に困りますが、何の原因でしやうか、根治法がありましたら、敎へ下さい、大低一日に五六回多い時は十數回も痺が致します(志摩、多痺女)

『答』心臓に故障があるか、或は脚氣かも知れません、又氣質的に、變化なくとも「ヒステリー」と云ふ、病氣にて、四肢の痲痺が來る事があります、何れにしても醫師の診斷を要します。

○足の油汗　私は少し歩むと足の裏に油汗が出て、それに塵がついて足袋や下駄が穢れてなりません、止める方法はありませんか(下總、ゆき)

『答』脂肪の澤山排泄するのは、健全の徴候にて、至て良き事です、然し餘り不潔に感ぜらるゝならば、朝と就眠前とに、一日二回宛「アルコール」を脱脂綿に附けて、御拭ひなされ、左すれば塵のつくのが、少なくなります。

○鼻が塞がる　妾は鼻の穴が一日毎に片方が息が通ひません、今日右の方が不通になると明日は左が不通になるのですが何ういふものてしやう(石狩、源子)

『答』多分鼻茸と云ふのが、出來て居る樣考へられます、左すれば之を除去せねばなりません、依て專門醫師の診斷を受けらる可し。

○顔の肉の痩せる法　當年十八歳で身體の丈が低く中肉ですが頰の肉が高くなつてふくれて居ります顔の肉の痩せる法はありませんか、食物や運動は何んなにしたらば宜しいのですか、尤も月經も滯りなく運動も致して居ります(心配女)

『答』察するに、立派なる體格の樣です、此欄には、痩せたるを肥やす等と不健康の人を健康に復せしめる事を御答へするのが主意でありまして、生理的肥滿を、不健康に、痩せしむるのは、望みません、近來は、肥滿したる女子を、生理的の美人と稱して、大に賞讃する世の中でありますれば、貴孃にも、美人たるを自覺なし居られるのが肝要です、運動は充分御取りになり、芋類餅類等を食せず、務めて肉食を取らるべし。

○顔面の「アレ」　毎年暑中になりますと顔の皮がフケのやうに剝げ落ちて困ります、良い藥はありますまいか(何度生)

『答』毎朝石鹸にて、顔を洗ひし後、牛乳の少量を顔につけて、再び洗ひ落され、又夜間就床前アルコールを、三倍に稀め之を顔につけて寢らるべし。

○幼兒の痣　幼兒の臀部の色の青い理由は何でしやうか(ミシ女)

『答』皮膚中に存する「メラニン」色素なるもの、一局所に、多量に沈着する故なり。

○「なまず」　夏になりますと、腕、腹部に「なまづ」が出來て困ります、賣藥を塗布すれば一時は恢復しても根治しません療法はありませんか(ヨチ女)

『答』「なまず」は一種の皮膚病なるも、多く胃病のある人に來るものなれば、食物を注意し、又胃に對する治療を受けらるべし。

○髮を黑くする法　頭髮を黑くする最も有効なる方法を御敎へ下さい(はつえ)

『答』滋養分に富む食物を採り、毎朝清潔に梳り香氣のなき質の良き椿の油等を少量に附けられたし。

質問諸孃へ

總て藥は其用法如何によつて效も害にもなりますから假令普通藥とても專門の智識なくして用ふることは危險です　それ故此の欄では絕對的に療法は申上げぬことにしてありますから諸孃も其お積りで質問を願ひます。



讀友倶樂部

思ふこと
我に等しき
友もがな
言ひ合せつゝ
世を過さまし
道忠

紹介欄

紹介は個人の事に限る
廣告的紹介は一切斷る

（一十）朝夕お使ひ下さつて、實習然させて下さるやうなお家はありますまいか（小石川、まる子）

（二十）小學校卒業の後、父に就きて勉強し、代用教員をして居りますが、中等教員のお宅で置いて下さるところはありますまいか、小間遣ひにても宜しく、餘暇に學問したき望み（岩手、小泉）

（三十）高等女學校卒業、東京にて自活しながら、英語、造花、刺繍、音樂を習ひたし、よき所は無きか（近江、しげ子）

（四十）十七才、地方の高等女學校二學年修業、昨年三月より在京、文士、音樂家の家に傭はれたし、下女にても厭はず、婦人ばかりの所なれば尚よろし、音樂好きの家を望む（在神田、つれ子）

（五十）東京市内の女學校に音樂教師として傭はれたし、音樂の出教授に應ず（牛込、好英）

▲取消し●●つ　大阪府の製糸會社を御紹介願はうと、本欄でお世話様になりましたが、大阪の愛讀者、渡邊みれ子様に御依頼してよく解りましたからお斷り旁お詫まうしあげます（都賀縣、御騒女）

文學顧問

問　私は母も兄妹もなく孤獨の田舍者ですが何か安慰を得たく、それについて聖書を讀んで座右の友としたいと思ひますが、田舍の事とて求める方法が分りません、聖書様聖書は教會の者でなければ得られませんか、又クリスチヤンでなくとも求められますか、御敎へ下さい（山口縣、小野木良子）

答　東京ならば聖書は容易に得られます、勿論教會に關係ない人でも誰でも求められます、定價郵税とも書物の體裁に依つて異ひますが普通四五十錢もお出しになれば好いのがありませう、本社の買物用達部に頼んでごらんなさい、早速送るでせう。

問　古事記傳に活版はありませんか（もと）

答　あります、本居宣長全集の中にもあります。

問　西詩の譯譯のうちで誰のが一番好いでせうか。又「風葉集」中の作の名を示して下さい。（刈谷、今井直女）

答　英語の研究を兼ねて英詩を知る爲なら坪内博士の「英詩文評釋」（一冊一圓六十錢、郵税十五錢早稻田大學出版部發兌）、單に好い西洋の譯詩を知らうと云ふには上田敏氏の「海潮音」（一冊一圓、郵税八錢、本郷追分町本郷書院發兌）があります。「風葉集」の中には、ぐうたら女、女髮結、うみの母、わき道、痕わけの家、好奇心、脊椎、男者、亞力、が收めてあります。

問　「すゞな」「すゞしろ」とは如何なる花ですか。
春の七草とは何々ですか。
右のことお敎へ下さい。（近江、姫ゆり）

答　すゞなは「たうな」と云ふ菜です、すゞしろは大根です、春の七草は、せり（芹）なづな（薺）ごぎやう（御行）はこべら（繁縷）ほとけのざ（佛座）すゞな（菘）すゞしろ（蘿蔔）です。

問　「室町源氏胡蝶の卷」といふ草紙の中に「七度のとぼり八度だゝみ、いつかれしみのあこがれて」とある「れしみ」とは何ですか」（橘口梅子）

答　いつかれし身と讀むのです、いつかれしはかしづかれるとも云ひ、大切に守護せられること。

問　鮫島大浪氏著の「妻の懺悔」の發行所及び定價を御知らせ下さいまし（同上）

答　「妻の懺悔」は定價四十五錢郵税四錢神田區富山町佐久良書房の發行です

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評

小説もあり文章もあり詩歌もあり文學一通りのものは揃つてゐます。皆之れ花の如き女子が大懸賞の應募熱心に作られたるもの眞に文章速成の最新良書なり

懸賞傑作 文壇の花

▲全壹冊 ▲洋裝大判
▲紙數二百五十餘頁
▲入賞作家肖像寫眞及び原色密刷
▲睡蓮石版彩色密刷花苑
▲皆美麗の口繪澤山
▲定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘（郵券代用壹割増）

本書目次

◎空前の大安賣

諸大家選評

女子懸賞文集第二（四六判五百頁）
▲定價卅五錢 特價金貳拾錢 郵税六錢

國學院學士小森松風先生著（菊判二百卅頁）
美文作法
▲定價四拾錢 特價金貳拾錢 郵税四錢

國學院學士小森松風先生著（菊判二百卅頁）
言文一致文範
▲定價四拾錢 特價金貳拾錢、郵税四錢

報知新聞記者中村木公君著（校長肖像入）
實地精査女子遊學便覽
▲定價參拾錢 特價金拾五錢 郵四錢

右の外『玉蟲』及『朝ばれ』は既に賣切れ申候

前記の四書とも殘部僅少、賣切れますと增刷せず絶版になりますから、此際至急愛讀を願ます、出版界空前の大安賣なり

（巳の一）

東京京橋大鋸町十十一番地 **女子文壇社出版** （振替口座第七壹貳九番）

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本社へ申込めば至極安全且輕便であります



東京買物便法

今般本社にては愛讀諸嬢の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌**は特別に**定價の壹割引**其他**文房具化粧品、西洋小間物、玩具**等有らゆる百般の物品は**定價の五分引**其外は手數料申受ず誠實に御用達致しますから多少に拘らず遠慮なく左記の注文心得を御覽の上御申込下さい

申込の心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向など始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に割引に相當する金額と郵便小包料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便普通運送便にて送り屆けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て女子文壇社買物用達部宛にして下さい

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

問　記者樣外國の友に便りするには彼方の地名を英語で書かなければだめでせうかそして外國の封筒と日本とは違ひませんか御手數ですが一寸御答を（西多摩、ほづ子）

答　勿論英語で書くのです、外國へやる信書の封筒は横の封筒を用ゐます。

問　一寸御尋致升「肚丁讀本」中の卷日本歷史の大綱の欄に仁學天皇の御代から第廿六世紀と記して在りましたが本年は第二十世紀では、ありませんか（西濱、孤女）

答　日本の紀元に據ると二十六世紀、西洋の紀元に據ると二十世紀です、世紀は大抵西洋の暦に據るやうです。

問　記者樣、小波先生のお著作で修習するのに宜いようなお傑作はありませんか、あつたらお手數乍ら題目と發行所とそれから代價とをお知らせ下さい。（備後、井上年子）

答　お傑作作法と云ふやうな意味のものなら未だ出版になりません、それよりか小波氏の作のお傑作な皆御覽になればいゝでせう、發行は凡て博文館です。

問　記者樣に御尋ね申ます、私立女子音樂學校及び私立女子音樂院は何所にありますか、（光月女）

答　女子音樂學校は神田錦町三丁目、女子音樂院は神田今川小路二丁目に在ります。

問　記者樣私にはどうしても新體詩の意味が解りません何か初學者のために有益な本でもありますればお敎へ下さい（沼盤、かへで子）

答　博文館發兌通俗作文全書第十八編「新體詩作法」（節君著）を御覽あれ、定價三十五錢郵税八錢。

問　記者樣文壇の花二四六ページの編花の和歌の中

> 西の京ついぢくづれし大寺に古き文箇ふ春雨の朝
>
> 大島毛振るやぶろ〳〵花の雨花のお江戸に行く春のみち

の二首中○の付きし個所お敎へ下さいませ。（信濃、花ぞの守）

答　ついぢは土塀のことです、振るつは大島毛の槍を振ふとこて、次のふる〳〵は上の振ると、落花の雨のふるとにかけた言葉です。

問　正岡子規氏の句集がありますなら其發行所と定價とを敎へて下さい（まさ子）

答　「俳句帖抄」定價三十五錢郵税四錢發行所は京橋區築地二丁目俳書堂です。

問　坪内博士樣の文をしらふと思へば何本がありますか（周防、質問式）

答　脚本では「牧の方」「桐一葉」論文では「文學其折々」「英文學史」歌では「新曲浦島」「かぐや姫」其他澤山あります。

開き封

◎AとB　手元にAがあります、Bと御交換願ひます。A文藝倶樂部、文章世界、中學世界、女學世界、秀才文壇、女子文壇、新文林等にて百五十餘冊。B巨人の自白、鷺風戀風、伯爵夫人、乳姉妹、己が罪、夏子、雛子、不如歸、青春、金色夜叉。（大阪市南區育英第一高等小學校北へ入東高津眞月子）

◎新聞切拔きの小説　新聞きりぬきの新小説澤山持つて居ますが何か面白い本と交換下さいませ（佐賀縣小城郡小城町田尻新聞舖內なほ子）

◎和洋草花　私は和洋草花の種子色々持つて居ます日本少年、少年世界等少年雜誌御送り下されば御禮は樂人草其他四五種で御送り致します（佐賀縣小城郡横町田尻とき子）

◎オルガンと園藝　妾は學校を出てからオルガンと園藝を友として居ります、私と同じ物を友としてゐらるゝ御方はゑはがきや信書の御交際を願ひます（青森縣八戸町八幡丁九四村みや子）

◎紀念の花瓶　京都市北村まさ子樣埼玉縣米山すみれ樣よかれて御揭載にて故山只見の里に都從中なりし山内淺枝樣には去る六日森の舘へ嫁されました御許樣へ紀念として花瓶を送る樣に御令妹に言ひ殘されたそうですからどうぞこの文見られたならば急ぎ御住所をお知らせください（福島縣南會津郡伊北村只見新聞さわの）

◎寫眞で初對面　今度誌友の面影へ寫眞を寄せましたから是を初對面と致しまして寫眞の交換玉章など御惠み御願ひ上げます（豐後玉來町澀井しづ子）

◎碓氷の紅葉　誌友の諸君碓氷の紅葉と云ふたらば高尾の山と共に御存じでしよう又どなたか碓氷峠を御通りの方は坂本町を目の下に

碓氷峠の高くて長いのをお記憶でしよう私は其坂本町に秋ならば紅葉の川に流るゝを見て朝夕を過して居るものです女子文壇愛讀の御諸姉よ本年紅葉見物に御出て遊ばさるゝ方は是非御立寄りを不束ながら御案内申上げます又御玉章の交換を幾重にも願ひます（群馬縣碓氷郡坂本町藤稲君代）

○面白い唱歌　皆様のうちに何か面白いとお思召しの唱歌がおありでしたらどうぞ譜音、樂音何れにてもお知らせ下さいませおすきてお出てしたら私からもお知らせいたします、（越後中蒲原郡川内村羽賀はな子）

○藥用サフラン　妾のところに藥用サフランの種子（球根）が澤山ありますが御入用の御方は繪はがきか寫し繪て御申込み下さい、寫し繪にて申込の御方には、サフラン栽培の寫し繪を添へて御送いたします、繪はがきや寫し繪の交換も願ます、（靜岡縣安倍郡大里村本馬淵森本典三郎様方杉山じゆん）

○海外の方に　海外におはします皆様は御地の御状況を御知らせ下さいませ妾も及ばずながらこゝ母國のこと共を書いて御返し申します、但、男子の御方は絶對的にお斷り申します（滋賀縣東淺井郡大郷村字門道一三二四尾かめ子）

○高野案内　文壇の諸姉よ私は有名なる紀伊の國高野山の麓に住んで居りますが若し諸姉の中で高野山へ御登詣のお方がありましたらお訪ね下さい、くはしく御案内致します尚御道順や面白き繪葉書を送上致します（紀伊國伊都郡高野口驛前今坂やよ子）

○にしき繪　私は古錦畫が大好で歌麿、北斎を始め豊國、國貞、國周、廣重等の古繪草紙種類所持して居ます御望の方は藤村著小説破戒又は己が罪後編等と交換願ひます、但、品物を拜見した上で此方からお送りします（房州館山町新井浦宮本靜子）

誌友と記者

○御懐かしき記者様毎月の頃より本誌の愛讀者に相成候ふ妾漸く様子の解り候へば何卒よろしく願上候（相州好花女）（記者曰、お解りになつたのは記者も嬉しく思ひます奮て投稿を望む）○おなつかしい記者様にはお變りは入らせられませんかお伺ひ致します、さて此の度またこんなつまらぬものを投書いたしますからごらん下さいませ、記者様わたしは作文がへたでこまり悲しうございますが何うしたならば上手になれるでございませう。（越後はな子）（記者曰、先輩の作物をよくお讀みなさい、そして御自分でもよくお作りなさい、さうすれば自然に上達します）○私は高等二學年で病氣の爲め退學致しましたがどうしても學校へ行きたいのです此節は奉公の身ですから女子文壇を讀む事が出來ないのですそれ故夜分十二時から二時かんの間に拜見するのですあはれんで下さい（大阪市西區中之島六丁目山本悦子）（記者曰、それほどまでにして御覧下さるとは、女子文壇は仕合せものです）

○記者様にお目に掛るのは此度初めてゞす一ツ御挨拶を、何卒左の事を誌上にて一、原稿の前へ韻文とか散文とか日記文とか別に記かなくても宜しきや。二、一行の字詰間違へて、二十四字のを二十三字詰となしたるときは其の爲めに沒書となりますか。三、文はどんな拙いものでも記者様は御覧になりますか。四、學校生活は何字何行てしよう。（記者曰、左にお答します。一、是非お記し下さい。二、沒書にする様なことも致しませんが可成御注意下さい。三、拜見します。四、二十字詰十行以内）○記者様私は田舍ものて何もわかりませんの皆様と交際致したいのですお半紙に書くのですか葉書てすかおしらせ下さい（松子）（記者曰、葉書はいけません、半紙か原稿紙にお書き下さい、字詰は廿一字詰）○記者様まことに恐れ入りますが和歌の投書法をおしへて下さいなほんとにお氣の毒ですけれども（茨城縣西茨城郡さみだれ）（記者曰、半紙半枚に字畫正しくお書き下さい、住所姓名も必ず書添へること）○行數に何字詰とあるは正しく規定の通り列を作らねばなりませぬか又總數に過分な生ぜれば勝手に書き下しても差支ないてすかお教示を乞ふ（松山、なさなご）（記者曰、書下しよりも、正しく揃へることを望みます）○あの記者様一寸お伺ひ申しますが私は寫眞を寄送致したう御座いますが名宛は如何にしたら宜しいでしようか御手數ながら誌上て御知らせ下さいませ（日向、岩切糸子）（記者曰、女子文壇社宛て宜しう御座います）○記者様お願ですから筆蹟募集して下さいな皆様はどう思ひなす

つて（臺北新北門街一丁目四番戸熊谷眞子）（記者曰、筆蹟の奉換も面白からうと思ひます、諸嬢は何う思召されますか）○記者様や皆様私は友より本誌を送りこされ有益なるものと思ひましたから引つゞき愛讀致してをりましたところ七月の本誌に誰かゞ私の名を以て誌友倶樂部に出し男子にも交りを求めました故男子より手紙がまゐり大に迷惑致します大方出した人もわかりますが私は本誌愛讀の姉様とお交りを致しますが男子へは一切致しませんどうぞ記者様このわけをよろしく姉上様方にお話して下されませ私はくやしうございますから（福島縣石川郡石川町添田松子）（記者曰、他人の名を騙つて交際を求めるとは不都合な仕方です、諸嬢もお含み置きを乞ふ）○記者様妾れ、先月まで高知市の啓林から取次で愛讀して居ましたがれ、今度都合あつて上京しまして京橋の築地に居ますが、貴社へ直接購讀を申込みましたら、直接御配達下さいますか、亦矢張り御郵送てありますか次に愛文堂發賣の投書用原稿紙は何程でありますか（築地二丁目朝倉笑兒）（記者曰、矢張り郵送致します、愛文堂の原稿紙は一帖四錢宛、郵税は二百匁まで市内は四錢）○あの記者様へ一寸御伺ひいたしますが、各種の投書に、何字詰何行とございますのは、原稿用紙へ書きます時必らず一行を、廿四字なら廿四字と、一字も、間違ひなく、書かればなりませんのですか？御手數恐れいりますが次號に、御教示の程、願います（上總、さゆり子）（記者曰、さうです）○秋田縣、孝子嬢に。投書規則は各欄の初めを御覽下さい、雜誌は御地の書店から求められて差支ありません（記者）○愛媛縣、土居佐千子。函館、松子。兩嬢に。投書は宜しう御座います（記者）○山口縣、藤井よし子。膽振山讀、ひさ子。篠原皆子。佐々木靜子。德島縣、佐藤千代子。京城、つた女。下總、芳齋女史。熊本、きの子。かめ子。松本米子。信濃、鳳波子。茨城縣、飛田梅野。金澤たつえ。丸山のぶ。牛込、長谷川梗園。能登、川岸小百合。廣島、古林敎子。福島、佐藤初子。名古屋、松村不染子。の諸嬢に。御中越のことは一々拜見いたしました、以後御寄稿を望みます（記者）○臺灣、禪院みつ子。新潟縣、谷川桂月子。横濱市、三橋燕子。の三嬢に。御丁寧なる暑中のお見舞を拜謝します（記者）

諸嬢の交換

○皆様私も更すがた號から皆様と同じく愛讀者に成りましたどうか寫眞繪葉書繪端書などの交換を願ひます、（新潟縣北蒲原郡木崎村笹御川瑞美佳子）○寫眞交換を願ひますなほ雜誌口繪葉書も寄附下さい御に當つて御禮はいたします（奈良縣添上郡狹川村牛田房登子）○なつかしき諸姉様私は父なく母と共にさむしく暮して居る淺學なる田舍娘ですお互に御玉章繪端書の御交換を願上ます（淡路三原郡北阿萬村字雲梶野捨出等作方天樹民枝）○皆様妾はこの野花に淋しく暮して居ります一少女てすの何とぞ永久に御交際下さいまし（大阪市西區梅本町大神榮枝子）○誌友の皆様、妾風俗と繪葉書の交換下されし皆様、ありがたく御禮申上ます、妾の附近に出火がありまして手傳中右手に負傷仕り御返事も差出さゞりし御方様もあらん、失禮ながら御知らせ下さい、此後とも雜誌エハガキの交換願います。雜誌は左の品です。寧由妙文集、鐵道會話、懸賞文千金、秀才文壇、淺花集、等であります。また見ぐるしき寫眞もうつしてありますから皆さまの寫眞と交換下さい（名古屋市西區徒島町三丁目北海道藤井志津子）○私は片田舍に淋しく暮して居る不束者です誌友の諸姉様よ繪葉書や寫眞の交換をして下さいな先着十名に限りて雜誌、繪はれ、お進呈致します（千葉縣印旛郡船穂村松崎鈴木はる子）○玉稿や風物繪端書御送下すた御方には水戸名所はがきを以てきつと御禮致しますが何卒御送り下さい又前號の交換申込の内御送り致しても何の御返事もありません姉様がたがありますが御取なさると次號で御名前を皆きます（水戸上市備願寺町田倉方山田やす子）○未使用の繪葉書御送附下さいました方には不束な妾の寫眞を以て御返しいたしますから永久に御交際を御願ひ申します（神戸市楠通四丁目四十二番屋敷永戸様方ちゑ子）○記者様を初め諸姉様御機嫌ようどうぞ御交際を願ひます。（伊豆三島町[illegible]保喜代子）○誌友の皆様に伺ひますお神戸市御幸通の平林たつ子様はどこへ轉居なされましたか私は久々で音信したらもどつて來ました殘念でなりません。御存じの御方は葉書で至急下名へ御通知下さい。一名限り繪葉書で御禮申上げます。（岩手縣山の目[illegible]町[illegible]方佐藤すゞ）○誌友の諸姉様妾は背が小さいのです古くても宜し

いのヴァイオリンお持ちの方は御貸ください又玉章繪はがき永久に御交換お願いたします（岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡樹本末吉之内桐本没子）○御姉様方も東京日日新聞で御らんに成つて御承知でしようが妾は女學校に通つて居りましたが去三月母様に死に別れましてから父様と二人で淋しく家に暮すことに成りましたから玉章や繪葉書の交換お願ひ致します（信濃東筑摩郡坂井村假現原安坂喬榮子）○誌友諸姉様妾もれ始めて誌友になりましたから——欧と申すもお恥しい様なものをムラサキ子と名乘つて投書しますから今後御見捨なく御教導下さいませ。又玉章の交際や、寫眞や繪はがきなどの交換もして頂戴な（尾張國東春日井郡鷹來村大字田樂梶田花子）○やさしい文體にて繪端書或は書簡にて通信いたしたし（秋田縣由利郡本庄町本田仲町伊藤清子）○姉様方！宜敷後進の妾をも見捨てずに敎へて頂戴よ！又繪端書の交換も望みます玉章も望みます（尾張海西郡八開村鵜多須小笠原秋波子）○私の所に日露戰爭の紀念博覧會紀念繪葉書がありますから何にかと交換して頂戴な……（千葉縣山武郡睦岡村中津田戸村みのる）○おん懐しの諸嬢よ、お寫眞なり御玉章なり給ひてよ。私とても必らずみ情にはそむくまじきものを。（越後國刈羽郡七日町一〇六原つねを）○手許には榛原郡の名所舊跡などの繪葉書澤山ありますから何卒御交際を願ひますよ（遠江榛原郡萩間村東萩間原木源次郎方きせ子）○君姉様方の内造花に深く趣味を持て居る御方が有るなら交際して下さい（豐後東國東郡西安岐村小川小川頼子）○誌友の皆様よ月細き今宵しも畔道ひとりそゞろ歩きの足下近くみだれなく蛙の聲に只昔の忍ばれてまだおめにもかゝらぬ皆様のおなつかしう存んぜられます何卒み情あらば……（越後中蒲原郡河内村羽賀花子）○諸嬢よ妾は草深き山里に淋びしき月日を送つて居りますから何んの樂しみもありませんたゞ諸嬢のお便りを樂しみにいたして居るのみてあります心ある皆様何卒御不用の小說なりボンなり絹ハンカチーなり繪葉書なり禮物なり何んでもかまひませんどし／＼送つて下さい御禮は必らず致します（新潟縣三島郡深才村川崎貞枝子）○今の處にては日光名所繪葉書亦は宇都宮名所繪葉書澤山有ますから情をかけて交際を下された御方先着五名の御方には見苦しき妾の寫眞を添へて御禮致ます（下野上都賀郡北犬飼村深ッ丸茂杉山つる子）○姉君達よ何卒リボン雜誌の交換をねがひます（福井市川上町藤元起榮子）○皆様私は越後の信濃河畔の蛙ヶ屋のうらぶれの子でありますが玉章や繪葉書の御交換を願ひます寫眞も何卒ねがひます（新潟縣三條局下大島村堀満方一葉子）○おなつかしい皆さんよ妾は今年の四月スクールを休みまして淋しい里に友もなく暮して居りますから慰めて頂戴な妾とて必ずお情には背きませんよ（茨城縣新治郡牛渡村大久保をさむ）○福井縣片山千里さん私は貴女の所と近くてすから遊びに來て被下私淋しくてならないのてすから待つて居ますよ（福井縣今立郡岡高村瓜生三六、二、吉田梅子）○諸雜誌・編物、寫眞等の御交換を願ひます（島根縣飯石郡頓原村谷せい）○妾は今、過去の春多かりし時代を思ひ浮べては、泣いて暮らす可憐の女性にて侍るぞや。心あらん人々は、月明らかなる夜半、訪ひ來り給ひてよ。また、まことある方々は、玉章を下してたべ。（牛込區東五軒町九前田様方夏野紫子）○妾も愛讀者のお仲間ですから諸姉様何卒御見捨なく繪葉書や玉章の御交換を願ひます（新潟縣大門通り八條木下方鈴木てつ）○本誌愛讀の皆様方妾にも文の御交際下さらん事伏して願ひ上げ候（熊本縣八代郡野津村字高野道字田方井山たき子）○私は今病床に呻吟して居る者てす友として樂しむは繪葉書玉章などてあります以後御交際下され度候（東海道茅ケ崎南湖院内第三病室泉米代子）○皆さまの御寫眞や肉筆の繪はがきの御交換を願ひます必ず妾の書いた繪はがきで御返しを致します（東京芝區愛宕町二丁目十四大村ふて方大村きよ子）○諸姉様私は只今私立の女學校に通つて居る者て友も無くさびしく暮して居りますからどうか皆様玉章やエハガキの交換を願ひます（駿河郡北郷下駿河神社官舍一六川上みや子）○親愛なる誌友の諸嬢よ何卒々々永久に玉章エハガキの御交換を願ひます（伊勢宇治山田町舟江町廣瀬こう子）○敬愛する諸姉様よ御玉章の御交換して頂戴な、繪葉書其他の御交換は御斷り致します（東京市神田區豐島町三十四島津暢方妹川濱子）○御玉章御惠み下さいな御返事はきつと致し、ますから（徳島縣名東郡一宮村宮城啓代）○野田えん子様貴嬢は佐賀の方ていらつしやいますのね私は何んとなうおなつかし

う存じます趣味の一致とでも申すのでございませうか私も大變文學を好んでますあなたの御姓名を紙上で見る度におしたはしく存じます御所御通知下さいまし（佐賀縣佐賀市水ケ江町森方よし子）

○誌友の姉上樣や皆々樣に有名の神社寺院の印譜四種郵便として送つてくださいきつと私からも相當のものを御返し致しますから（山城國醍醐村吉村水哉）

○誌友の皆樣私も本月から本誌の御厄介になります何卒繪ハガキや玉章の御交換を願ひます（京都市上京區千本中立賣下ル四入吉田婦美子）

○誌友の皆樣よ私にも繪葉書、雜誌、書籍、御寫眞、等の御交換を願ひます屹度それ以上のもので御返しいたします、（備後御調郡吉輪村岡田けん子）

○天つちの極みなき如繪葉書や御玉章にゆかしき水莖の跡にてさびしみの兒を慰め給へかし（南總千町村荻原輪多奈部柳子）

○繪葉書の交換を願ひます私至て繪葉書を好み種類は何でも持て居ります、必ず御返事はいたします（千葉縣湊町佐宗方洋子）

○皆樣我が親友松井晁子樣には本月六日午後六時無常の風にさそはれて歸らぬ旅路へ趣れました實に〳〵悲しみても倚あまりある情なさです一寸お知らせします、（五月十七日投書）（北海道の七飯村、伊東小百合）

○愛讀する誌上の私等が友よ、餘奈に在するか何卒此のあはれなる私に書籍、玉章、繪葉書の御交換を御願ひ申します（神戸湊町一四九五森本内靜枝子）

○印刷物なんかは、つまりませんから何卒姉上樣の御自筆繪葉書を御惠み下さいその御禮には拙くまずいのですが妾の書いた水彩繪葉書か乾度御返し致します（京都市、烏丸通四條下ル、井上庄一郎内井上さと）

○山口縣下の皆樣交際して下さいな。屹度私しも返事しますから。私し今年十七才なのさよなら（周防吉敷郡名田島四開作、石川靜子）

○私の故郷は香川縣ですなつかしき誌友の皆々樣繪はがき又は雜誌の面白いのがあれば御送下さい御禮として四坂島鑛業所の繪はがきを差上ます（愛媛縣越智郡四坂島住友病院にて吉田まさよ）

○諸姉樣妾の元に古切手澤山有ますから繪葉書と交換を願ひます萬朝報の懸賞小説も差上ます（下野國烏山町藤井夏子）

○今月より愛讀者と成りました何卒繪葉書や玉章寫眞の御交際を願ひます御返事はきつと致します（羽前國西田川郡大山上木町籍木いつ）

○誌友の諸嬢さんどうぞなるべく珍らしい草花の繪葉書を又は栞でもよろしう御座いますから御送り下さいまし私は御返禮として他の繪葉書に御送り下すつた草花の意味やランゲーヂなどを書き添へて御贈り致します（神田表神保町一井上みつよ）

○誌友の御姉上樣よ私の手元に奈良名所のエハガキ澤山ありますから交換して頂戴又玉章も御願ひ致します編物等も惠んで下さい送つて下さつた方には相當の御禮は必ず致します（大和國北葛城郡箸尾村字中、清水蓉子）

○皆樣へお伺ひ致しますが東京の渡邊裁縫女學校女子職業學校美術學校のやうな學校が京都にもありましようか私裁縫專門に志してなりますが前年東京にて脚氣を患ひましたから成丈けならば京都にて學びたいと思て居ります外にお嫌れまうす人も有りませんし困てをりますから何卒京都の學校の校名所在御教示願ひ上ます（伊豫大洲池田靜子）

寫眞編物交換

○文壇の諸嬢樣方妾にも何とぞ御寫眞の交換をして下さい御早い方十名だけに妾の寫眞あげます其の他には他のものであつくお禮申します玉章繪端書の交換もどうぞ肉筆でお返します（千葉縣山武郡増穗村蓮沼横川北田秀子）

○お寫眞雜誌の交換を願ます（石狩國旭川町字近文六區一條通五、小林喜代の子）

○寫眞や手紙の御交換を願ます（千葉縣印旛郡内郷村飯野榮次郎方にて志田きれ子）

○誌友の皆さま方何とぞ寫眞や編物の御交換を爲て頂戴な組製か縮緬製のひじつきをお惠み下された最初の數名樣に逓信省發行の印紙附紀念端書に妾の寫眞と雜誌を添へて返禮致します（東京府北多摩郡東村山村野口五十嵐靜子）

○珍らしい編物、栞お惠みの方にハンケチ、化粧品お望みの品差上ます（紀伊本町三丁目吉川支店内良子）

○懐しき諸嬢樣何卒交際して下さい御寫眞の交換も何そ（千葉縣東葛飾郡福田村三ケ尾内藤富子）

○手許に女學世界第六卷第十二號より第八卷第九號迄と婦人世界第三卷第二號から四號迄ありますから御手製の編物と御交換して下さいな何物にても差し上ますわ（滋賀縣蒲生郡岡山村字加茂岡田さい子）

○御情深き御方樣よ何卒玉章や繪はがきの御交換をおねがひ申ます寫眞もね（茨城縣稻敷郡牛久局配遞區內下根吉川てつ子）

○不束ものなれど宜しくば御交際下さい寫眞、編物、繪葉書の交換を願ふ（石川縣鳳至郡七浦村大字皆月

高島梅子）○永く病氣の爲め失禮して居りましたが此程は體もよくなりましたてまた昔の如く一層淸き御交はりを願ひます尙ほお寫しゑや御玉章の御交換も願ひます（京都府下相樂郡高山村字田山有野良子）○妾の樂は交際より外ないてす寫眞繪葉書交換願ます先着五名へ畫き作ら妾の寫眞差上ます（常陸稻敷郡舟島村字竹來三十七番地宮本市子）○新案の編物か、ヒザツキシオリなぞを送て頂戴な御禮には書籍、雜誌が澤山ムいますから差上ます（上毛佐波郡赤堀江澤琴子）

圖書換讀

○雜誌ならば何程古くとも又汚れて居ても宜う御座いますから（なるべくは文學雜誌か少年少女向きの雜誌を御送り下さい屹度御禮いたします（羽前國西置賜郡南小國小學校內朝尾加江子）○皆樣の御內に七月一日發行の女子文壇御持の御方がありましたらどうか文章世界、秀才文壇、中學世界、婦人世界、女學世界と御交換願ひます（福井縣今立郡岡高村瓜生吉田梅仙方吉田梅子）○富美子夫人、戀ざめ、二十八人集、世路日記、新式部傳等がありますから何本にても交換します先着二十名だけは名所エハガキを添へて送ります（山口縣豐浦郡瀧部村末森桂みさを）○御なつかしき諸姉樣誌に御氣の毒ですが二筋道後編にせ紫後編御持の御方はしばらく御貸し下さいませんか御禮は屹度致します（淡路三原郡北阿萬村伊賀野三樹民枝）○諸嬢樣の中に本誌四年二號から今月（七月）迄の中御不用のがありましたら何卒お送り下さいませ。（埼玉縣熊ケ谷仲町松本さく子樣內勝子）○言葉の泉御不用の方は妾の國語漢文新辭典帝國以呂波節用大全與見八犬傳、通俗日本外史、新撰明治字典と御交換して下さい御承諾のお方は前に御一報を（茨城相馬上眞野村角川原山下俊子）○晶子著、戀衣、黑髮、亂れ髮、薔園著、伶人、わがおもひ等何れにても御持ちの方は妾の美妙著新詩韻獸作法、高等才媛文集何れにても御交換を願ひます、（茨城縣稻敷郡浮島村原坪薔薇會內宮本楓子）○紅葉全集の內金色夜叉、次郎島、奇人の旅行等御持の方は、安藝伊吹日本海第三回紀念繪葉書、銀山王、航海譚、波魂露魄、滑稽德川明治史、大軍艦、吳の枝折、武者紙質、新函浦島等の中と御交換願ます（吳市二川町四本通二丁目碓井春香）○手許に、新不如歸、戀と人生、未來の妻、婦人の戀愛、ハイカラ田舍娘、美文作法等不用になつて居りますから戀の行末、新婚旅行、ハイカラ夫婦、新家庭、若き時、手風琴、ハモーカ等と交換して頂戴御玉章の交換も（茨城縣稻敷郡阿見村大室大崎誠子）○敬愛なる誌友の諸姉上樣よ私の本箱に婦人世界、少女世界、少年世界、文藝倶樂部、中學世界、俳諧鵜東新誌、淸風草紙、日羅海戰史、等が御座いますからどうか皆樣の御不要書を送つて下さい御禮には相當以上のものを御返し致します御交際も願ひます（近江伊香郡片岡村東野八九淋よしえ）○私に女學世界、女子文壇、婦人世界、文藝倶樂部其他十四種八十二册あります御望みの御方は繪葉書か又は郵稅を添へて申込み下さい繪代て差上ます又新體詩作法、書海、美文資料、和漢字典が有りましたら妾の書信文大成、美文作法、短篇小說傑作集、其他と御交換して下さいませぬか（尾張國東春日井郡篠木村田鶴鈴木しげ子）○圖書交換をお願ひします御返禮は西洋品にてもお望みによりお送り申しませう、郵稅は內地の四倍ですから豫め御承知下さい（露領浦鹽斯德キタイスケ町中野方喜多野洪子）○諸姉樣の內で本誌六月號御不用の方は私の五月號新文林と交換して下さいませんか（岩手縣下閉伊郡宮古町字澤田、熊谷文子）○手許に四季物語ハイネの詩、己ケ罪中下、朝ばれ、深山美人、櫻の御所、少女の煩悶等ありますから皆樣の中で紫子、思出の記、眞人の自白其の他有益の書と御交換下さいませ（羽前西置賜郡豐原村大字中大谷部てい子）○皆樣の中に少年世界第九卷第十五號を御所持相成さる御方がございましたら御惠送下さいませぬか、相當の御禮はきつと致しますから（滋賀縣東淺井郡大郷村川道、一三二、西尾かめ子）○私は破戒、思出の記、花守、白羊宮、二十八宿、落草、行く春、みだれ髮、小扇、塔影、春潮、青春、寶鳳、戀風、鮭子、等不用てすから、春鳥集、有明集、藤村詩集、伯爵夫人全部、女六波前篇、逗子其他最新の詩集や小說を御持ちの御方は御送附下さいな御好の書に遺花か編物を添へます わきつと！それから寫眞掛、脇つき、刺繡等の交換も御願ひしてよ（越後見附上町高野機業店內よし子）○手許に最近文藝倶樂部、女學世界、女子文壇、秀才文壇、女子美文斷片、記事文例等の不用書物があります御望の御方は編物、しをり、遺花寫眞等で御申込下

さい先着十名に限り繪葉書を添へて早速御送付します（山口縣吉敷郡西岐波村字床波小學校下大下禎助内藤子）○皆様の中に緑不緑、露風戀風、金色夜叉、伯爵夫人、青春、思出の記、等御持のお方は私の以下の本どれとても御交換下さい送書の時望みの書を御指命下さい乾度御返書致しますから、明治才媛文集、若菜集、婦女の鏡、もつれ絲、戀の旅、少女の戀、いひなづけ、姉妹の秘密、不如歸、後の新不如歸、四十四里の濱、新家庭訓、我が家風、獨立獨行、春の夕暮、女學世界、婦人世界、少女界、少年界、女子文壇等外にもありますから相當に御禮申します（茨城縣新治郡瑕原村大字瑕原二十七番地天谷雅子）○小野鵞堂先生稿尚高等女子文か幾富利御不用のお方は私の手許にある「女子文かくしるべ」「新編女子普通文」「美文集英」などと御交換を願ひます（淡路三原郡榎列村六百八十番屋敷小泉さと子）○次ぎの御書御持ちの御方御座候はゞ、なるべく表紙等の汚れざるのに、かぎり、御恵送なし下され度、御禮として書籍、及びエハがキ送呈致すべく候ふ、「落草」「みだれ髮」「小扇」「戀衣」「むらさき」「テニソンの詩」「ハイ子の詩」「ゲーテの詩」「舞姫」「キイツの詩」「ナオヅナオスの詩」「靜夜」「草枕」「上總のやどり」「音海」「新約物語」「白羊宮」「行く春」「塔影」（六甌島上園町四十一番地　町長規矩子）○手許に藤村詩集、新曲かぐや姫、同浦島、暮笛集、七つ星、獨歩集、徒然草、金色夜叉、乳姉妹、一葉全集、土佐日記、不如歸、火の柱、己が罪、小説ひは歌、濱子、英靈肉彈、等ありますから皆さんのうちで花守、玉虫、戀衣、亂髮、金色夜叉の歌、己が罪の歌、不如歸の歌、思出の記、二十八人集、雜誌ムラサキ、懸賞文集、等お持ちの方はどうぞ交換してください（福島縣南會津郡伊北村只見新國さわの）○手許に算術小教科書（下）、寺尾の算術教科書（上）菊池の平面幾何學小教科書、作文新辭林、數學辭書、寺尾の代數の部（上）、山崎の世界地理、本多の物理、何れも不用に付き御手許の金色夜叉、辭林、國語漢文中辭林と、交換を願ひます（上總長生郡豐岡村弓渡高山歌子）○手許に日本文學小史定價六十錢極くあたらしいのです日本大文典（四冊定價各四十錢等あります御手許の相思怨緑錦露子夫人か霓風戀風中下、新ホトヽギス等と御交換下さいませ御禮には名所繪葉書か雜誌何れにても御好みのを添へて早速御返送申上げます（北海道有珠郡伊達村有珠矢内菊枝）○金色夜叉戀に戀百海御不用の方は相當代價を以て御讓り下さいませんか（磐城國相馬郡大甕村高阿紋子）○五月分の女子文壇御持ちの方は御送り下さい御禮には奈良名所エハがキ一組御送り致します又繪はがき玉草をも御恵み下さい御かけて御禮致します（京都府相樂郡木津町かせ山杉谷たかへ）

剽窃詩文の注意

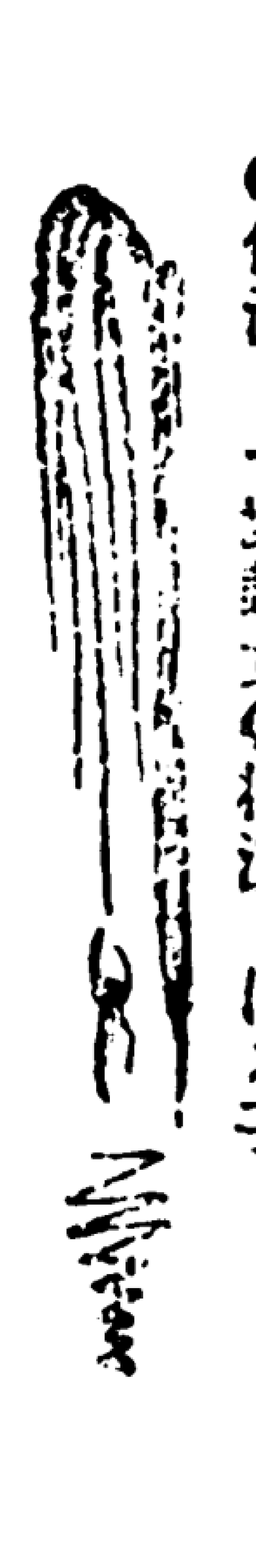
●●●●●第十號の分　○凡俗凝主。小説五等「五月雨の闇」は昨年秋の「萬朝報」より○羽前、松山秋海棠。お伽噺二等「波蹈」は「少女界」五卷七號よりり○金澤市、高村安江。實用文五等「子規きゝにとて醉はれしかへし」は「女學世界」第二卷八號より○牛込、川瀨一郷。俳句二等「涼や」は「萬朝報」より○越後、河島和歌波女。新體詩秀逸「音樂怨」は六七年前の「文庫」より

●●●●●第九號の分　○靜岡縣、わかば女。小説四等「憧憬」は「明治秀才文集」第二編より○金澤市游子野しげ子。お伽噺三等「猫と鼠」は明治二十年出版『高等小學讀本』第三より○湖南、山下渡子。新體詩四等「地圖を披いて」は『萬朝報』より○伊豆、鈴木やす子。滑稽話三等「寫眞」は『少年世界』第十四卷六號より

●●●●●第七號の分　新潟縣川崎貞子。新體詩四等「海」は三十八年の『少女界』第四卷十一號より○信濃、青木まさ子。俳句四等「絵日傘の」は『中學世界』第十卷九號より右、何れも剽窃せるものと認む。

●●取消　本誌第八號「夏すがた」掲載和歌秀逸仙臺市岩田よし子の「夕月夜」は何かの誤りにて同氏の作にあらざる旨直接申越されたるにつき取消す。

▲今回注意を與へられたる諸嬢は○横濱、愛讀者○上毛、ホツイトリヽー○大阪、R.T女○二本松、愛讀者○伊勢、すゞか子○忍瀧女○木村那賀子○福島、リヽー子○上總、さゆり子○大洲女○千葉縣、蓼花子○柳田、蔬蓮○信濃、一愛讀女○横濱、はる子。



文壇餘興　果實（課題）

果が裂ぜる、柿が熟する、秋は凡て果實の成熟する時期です、果實に就てのことならば何でもよろしい、振つて投稿下さい。

▲好きな果實▲嫌ひな果實▲果實の香ひ▲果實の色彩▲果實の形狀▲果實の味▲果實の採り方▲果實の食べ方▲果實の貯へ法▲各地特殊の果實▲氣候と果實▲果實と文學▲人種と果實▲人間及び鳥獸と果實との關係▲特に自己と關係ある果實及び其寄搦▲果實につきて古今の珍談或は逸話▲果實に對する感想▲其他果實に關することならば何にてもよろし、感じたまゝ、思ひついた儘を遠慮なく書いて下さい。原稿は十六字詰十行以内、原稿には必ず『文壇餘興新課題果實』とお書添へ下さい、懸賞は丙種規定による。

▲〆切は本月二十日限り。

雜報

〇懸賞贈呈品改正。本號より懸賞品を改めて悉皆正金てお送りすることにしました、精しくは上段を御覽下さい。

〇夏期講習會。暑中休暇を利用して各學校に大分夏季講習會があるやうです、諸孃も宜しく此の講習會を利用して、休み中に自己の不得手な學課とか、或は特に望む學課を習ふのは宜しいことでしやう、一寸目先の變つたものに、洗濯染色講習會、九重編造花講習會、袋物細工講習會などあります。

〇女學生の立小便。福岡縣では先月縣下の教育關係者が集つて、學生の風紀振肅に關する協議があつたが、其うちに、女學生の立小便を廢止すること、牛肉店に出入するを否認する二項があつたさうです。

〇投稿募集。十月十五日發行の臨時増刊『文壇の光』には大懸賞の投稿募集があり、十一月十五日發行の定期増刊にも新作脚本の募集がありますゝ、諸孃は見落されてはいけません。

懸賞贈額　毎號改正

本月號より實行

▲甲種（短篇小説　美文）
大賞…金參圓
地賞…金壹圓五拾錢
人賞…金七拾錢

▲乙種（お伽噺日記文新論文實用文新體詩）
大賞…金貳圓
地賞…金八拾錢
人賞…金四拾錢

▲丙種（和歌俳句短文圖畫餘興滑稽歌謠學校生活）
大賞…金壹圓
地賞…金五拾錢
人賞…金貳拾錢

〇各種とも發表翌月廿日に總べて正金を以て贈呈す

定價

女子文壇　毎月一回一日發行　其外四回發行　定期増刊（三、五、七、十一月十五日）臨時増刊（四月十月）貳回發行（例號二倍）

一冊（定期百卌頁）	前金拾錢	郵税共　計金拾壹錢
九冊（増刊トモ半ヶ年分）	前金九拾五錢	同　計金壹圓〇五錢
十八冊（増刊トモ一ヶ年分）	前金壹圓八拾錢	同　計金貳圓
六冊（[illegible]半ヶ年分）	[illegible]	同　[illegible]
十二冊（増刊ナシ一ヶ年分）	前金壹圓〇八錢	同　計金壹圓貳拾錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢増すを

[illegible]代用壹割増〇收入印紙謝絶

〔備考〕
〇定期及増刊は各拾錢郵税壹錢
〇臨時増刊は金貳拾錢郵税貳錢

▲女子文壇社の郵便振替貯金口座は＝＝東京壹七貳九番

明治四十一年七月廿九日印刷
明治四十一年八月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　〇東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂


本品は「スミレ」と「白ばら」の
芳香を永く保つ
星美人香水
定價
大瓶 壹円
中瓶 五拾銭
懐中用ニッケル口付 廿五銭
日本橋區瀬戸物町廿四番地
グランド香油本舗
中岡右洋堂

明治四十一年八月一日發行（毎月一回一日發行）
女子文壇
第四年第十二號

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 金拾錢 郵稅壹錢

【東京秀英舍印刷】

復刻版 女子文壇（じょしぶんだん） 第4回配本（第16巻〜第20巻）

2003年4月10日発行

揃定価（本体90,000円＋税）

発行者　船橋　治

発行所　不二出版㈱
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433

印刷所　三　進　社

製本所　青木製本

中性紙使用

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN4-8350-5021-5（全5冊　分売不可　セットコード ISBN4-8350-5018-5）